
IS × GARO

NAVAHO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS x GARO

【コード】

N9077W

【作者名】

NAVAHO

【あらすじ】

よう、こいつはライトノベルIS”インフィニット・ストラス”と牙狼”GARO”のクロスのSSだ。

書き手の趣味で色々と変わっているから、人によっては嫌悪感があるかもしれない、そういう奴なら、見ない方がいいぜ。

ちなみに俺は、この物語の主人公である織斑一夏の相棒の”ヴリル”って言うんだ。よろしくな。

イメージCV 景山 ヒロノブ

イメージは、ザルバよりも声が低い感じで……

今、言えることは

・主人公最強系かもしれない。よく見る”ORIMURA”もしくは、”ICHIKA”になっているかもな。

・この主人公は、原作と違い 化している。

・主要キャラは、GAROのように死ぬことは一応はないが……どうなることやら……

・作者がやっているいくつかのSSと世界観を共有している。当然、どこかのサイトで見たことのある奴が名前だけで出ているぜ。

どの辺で出てくるかは、知らんし、出てこんかもしれない。

その辺が了承できるのなら、楽しんでくれ、じゃあな!!

第零話 其の一(前書き)

やってみたかったGARROとISのクロスオーバーです。

第零話 其の一

第零話 其の一「インフィニット・ストラス」

インフィニット・ストラス。本来は宇宙での活動を目的として制作されたパワードスーツである。

その能力は、既存の兵器をはるかに凌駕する高いモノを持つ。しかし、この兵器には一点だけ、奇妙な特徴がある。

” ISは女性にしか起動できない”

これは、世界の常識であるがここにそれを覆した例外が存在している。

ここにいる、織斑一夏という人物がそれである。女性しか扱うことのできない” IS” を世界で唯一動かすことのできる男性である。

「しかし、厄介なことになったな一夏。どうするんだ？この様は……」

ここに渋い声が響き渡った。それを発しているのは、金属製の狼の被りモノをした髑髏を模したエンブレムが付けられた腕輪である。

「……………そうだね。私としても、これは、どうしていいものか、分からない」

応えたのは、一夏と言う人物。この物語の主人公である。この人物、男性というのは少しばかり声と口調がそれらしくない。

それもそのはず、この人物の外見は男というよりも見た目は完全に”女”である。

肩まで伸ばされた黒髪と男性とは思えないほどの色白の肌で、肩幅は女性よりはるがあるが、男性としては頼りないほど華奢だ。

「ったくよ〜、分からないで済まされるか。お前の事で東西南北の”番犬所”が揉めているだけ。あとお前から、この事が公になったら……………つか、誰だよ、あんなところにIS置いた馬鹿は!？」

腕輪は、何とも煮え切れない態度の一夏と訳の分らなかつた状況に對して口調を荒げていた。一夏は、

「わかってているよ”ヴリル”。”掟”を大きく破ることになるのは分かってている。その先は言わなくても大丈夫だから」

一夏は、そう言いつつ、ヴリルの言葉に応えた。

「”掟”も厄介だが、お前自身も厄介だぞ。注目され過ぎて、動きが取りにくい。今夜も”陰我”から、出てきたみたいだな」

「わかつている。だけど、これは、さすがに私も鬱陶しく思う」

自室の窓から、自宅の様子を窺っている黒服の男がいる。他にも何人かが自分を監視しているのが分かる。連日連夜、IS関連のニュースは自分を報道している。さらには、どここの所属かわからない者もよく目にする。

「そうだな。まあ、どんなに優秀とはいえ、人間だからな。ごまかしは大丈夫だろう」

「それじゃ、アレを行うとしようか、その間は喋らないでくれよ”
ヴリル”」

そう言いながら、一夏はあるモノを自室の机の中から取り出した。それは、拳ほどある干からびた巨大な眼球であった。

「いつみてもエグイもんだな、気色悪いつたらありやしない」

「……うるさいぞ、ヴリル。喋らないでと言ったはずだけど」

そういう一夏の言葉にヴリルは、

「ああ、悪い、悪い。俺は、こういうのがどうも苦手だな」

意外と、繊細な神経な持ち主のようである。ヴリルに構わず、一夏は眼球に奇妙な模様を描き込み、赤い札を張り付けた。

「フン、貴様の存在そのものが、人によっては受け入れがたいのに、よく言えるモノだ」

そこに二人？とは違う第三者の音が響く。

「おい、こいつは、珍しいな。一夏、姐さんがいるぜ」

いつの間にか一夏の部屋の戸が開けられており、腕組をしたスーツの女性が立っていた。顔立ちは、一夏と瓜二つである。

「何が、姐さんだ。お前にそう言われる筋合いはない」

フンと鼻を鳴らし、一夏の姉 織斑千冬は忌々しそうにヴリルに視線を向け、打って変って憂いを帯びた視線を一夏に向けた。

「……………一夏。分かっているが、お前は世界で唯一のISを起動させた”男”として、IS学園に行くことになった」

対する一夏は、干からびた眼球から千冬に視線を返す。一夏もどうしようもないのか、悟ったように頷いた。

「分かっています。ですが、これだけは、やめるつもりはありません」

「なあ、一夏。これは、一つの転機だ。もうここで辞めても、誰もお前を責める権利はない。私はここでやめてほしいんだ、そう言うてくれ……!」

体当たりをするように、千冬は一夏の肩を掴み正面から向かう。自分とよく似ている、目つきの鋭さも……

「それになんだ、その目つきは、少し見ない間にまた、悪くなって

た。

「……姉さん。あまり見ないでほしいな、見られると恥ずかしいんだ」

居心地が悪そうに千冬の視線から自身の胸を手で隠した。

「まったく、男のくせに胸を見られることが恥ずかしいとは……」

家族の様子に思わず苦笑がこぼれてしまう。一夏は、女よりも奥ゆかしいところがある。

「そうだぜ、一夏は結構、初心というか、恥ずかしがり屋だな」

「うるさい！……！お前は口を出すな！……！……！」

ヴリルの言葉に千冬がまた声を荒げる。先ほどの一夏とはえらい違いである。

「まあ。いいじゃないかよ、姐さん。それよりも一夏、”ホラー”がそろそろ動きだす」

「……分かった。早く、目をこまかして行くよ。姉さん、話はまた後でもいいかな」

「待て一夏！……！……！話は終わってはいないんだぞ！……！……！……！」

千冬を半ばスルーしつつも、申し訳がなさそうに視線を向けて、一夏は背を向けた。手に取るのは、銀でできた弓矢とつつを。

「分かっているよ。でも、姉さん。これだけは私も譲れないんだ。今さら、全てを忘れて生きるほど、私は器用じゃないから」

そう言って、一夏は千冬から離れていく。

「待てッ！……！！！」

一夏を追う千冬だが、部屋を出たと同時にその姿はなくなった。

第零話 其の一（後書き）

続きまして、其の二です。ヤンゲン

第零話 其の二(前書お)

其の二は。きんぐー………

第零話 其の二

魔戒騎士

古よりホラーを狩る宿命を負った戦士達の総称。

神出鬼没の魔銃ホラーに対抗すべく、強靱な肉体と精神を併せ持った戦士である。

基本的には、男性のみがその資格を得られる。

「この頃はまだ、あいつが自分の”身体”の事について、疑問もなく男と思っていたな」

一夏が出て行ったあと、千冬は普段はあまり引っ張り出さないアル

バムを眺めていた。

アルバムにいる一夏は、まだあどけない表情をしている。今よりも目元は穏やかだ。

古くは、小学生に入るか入らないかの頃だ。この頃から、女の子のようだった。

千冬

花が好きで、私に積んできた花、種から咲かした花を良く見せてくれていた。

今も花が好きで、この家の庭には様々な種類の花があったのだが、IS学園への入学と寮生活が決まったがために殆どのモノがなくなっている。

意外と手間のかかるモノが多く、世話ができないのならばと一夏は知っている知人に渡している。

そういえば、レストランアギトにも提供したと言っていたな、後は、ディアボロとミレニアムアミーゴとか……

家の様子が変わってしまうのは寂しいが、これは仕方がないだろう。

無責任に世話ができないからといって枯らすよりも、世話をしてくれる誰かに託す方が、花のためにもなる。

それにしても、こんなにも優しい趣味を持っているあいつが何故、あのような戦いをせねばならんのだ。

何度いっても、戦いをやめるとはいわない。

まったくあいつは、どうしてああも頑固なんだ。まるで私の言う事を聞かない。

束の奴は、いっくんのあの頑固な所はちーちゃん似だね。とか言っていたが、自分に似ていると言われるだけで嫌になる。

一夏 私のかけがえのない家族であり、宝物。両親が私を捨て、只一人残された唯一の肉親。

その一夏は、人とは違う悩みを持って生まれたのだ。インターセックス、男でも女でもない身体と心を持って。

”この前、女の子に気持ち悪いって言われちゃった”

” どうしてだろう、好きってのがよくわからない ”

あいつは、そのことをずっと悩んでいた。だからこそ、護りぬくと誓ったのに…

なのに、あいつは私に黙って、魔戒騎士などというものになってしまった。

世の中の男にはISが嫌いな者がいるが、私はこの魔戒騎士というものが嫌いなのだ。

あのような戦いに一夏が夜の度に赴いていることで、私は夜すら嫌いになってしまった。

夜が来るたびに、不安に駆られてしまう。この間の件で魔戒騎士であることは認めしたが、魔戒騎士そのものに対しては嫌悪がある。

護ることに憧れてしまったのは、あるいはみ自分のせいであることも分かっている。だが、どうすればいい

私はもつと、自分の我を通すべきだったのだろうか？ 利己的な人間であればよかったのだろうか？ 他人の事など気に掛けなければよかったのか？

いや、そんな生き方は私にはできない。私という存在が一夏をあのよう護る側へと駆り立ててしまったのだろうか？

たった一人の家族が、血なまぐさい、最も人間の邪悪で醜い心がさらけ出される戦いに赴くのは、許容ができない。

認めたとはいったのだが、こうして事がある度に魔戒騎士とは別の生き方があると言っては、それをやめさせようとしているのは我ながら女々しい。

現に今しがた一夏に言っていた”IS インフィニット・ストラス”に至ってもそうだ。

世界で唯一ISを動かせる男。正確には中性で、男女どちらでもない。この事は、IS委員会には知られているが、ここまで話が大きくなってしまつては隠すしかないのが現状らしい。

いっそのこと、一夏が女でしたと言えればどれだけ楽だろうか……女にしては、少し空気が読めなさすぎだがな。かといって男にしては、繊細すぎるし、

現実にはそう言えないのが辛い。世界最強の女 織斑千冬ともあるうものが情けない。

戦いに赴くたびにあいつは、必ず戻る。信じて待っていてくれと言うのだ。私は信じるが、だが、それすら揺らぐものの不安を抱かすにはいられない。

あいつが戦う相手は、世界最強の兵器ISすら滅ぼすことのかなわない人知を超えた恐ろしいものであり、それは私達が生まれる大昔から夜の闇にいたというもの。

束の奴も、アレを見てから少しは大人になったな。それぐらいアレはインパクトがあった。

今夜も戦いが始まっている。私達が知ることのない闇の世界で……

あいつは、私の家族はそこにいる。

それにしても、外に居る監視はおそらくは政府のものだろうが、当の監視の対象が居なくなったのに未だに気がつかないのか？

一夏の部屋にあるあの気味の悪いものの影響でああなっていると思うと、背筋が寒くなるな。

光あるところに、漆黒の闇ありき。古の時代より、人類は闇を恐れた。

しかし、暗黒を断ち切る騎士の剣によって、人類は希望の光を得たのだ。

一夏は、町の外れにある古びた教会の中に居た。

「あのホラーは、確かアリマ。女の偶像に取り付く奴だ。近頃、多いな」

「最近は”女尊男卑”の世の中を肌で実感してるからね。そういう陰我が多いんだろう、ヴリル」

一夏の前には、不気味なオーラを醸し出すマリア像があった。その足元には、人が身につけていたであろう衣服が散乱していた。

”キサマツ……何をしに此処へ来た。私の餌になりに来たのか”

ブロンズのマリア像が醜悪な笑みを浮かべて、一夏に問いかける。
一夏は気にせず

「お前を狩りに来た。来て早々悪いけど、この場から消えてもらおうよ」

そっぴいなながら、弓を構え、矢を放つ。

放たれた矢がマリア像の額を貫いたと同時に、マリアの顔がわれ、醜悪の悪魔がその姿を現す。

”オマエツ、魔戒法師だね。だけど、やられるわけにはいかない！
！！！！”

マリアの顔から現れた醜悪な悪魔が吼える。皮膚が反転し、中身がそのまま露になった異形　ホラー　アリマ。

「ッ！！！！？！！」

予想よりも早い動きに一夏は銀の弓を刃のようにして、迫る爪を弾き、距離を取る。

「一夏。下級ホラーには違いないが、侮るなよ。それなりに厄介だ」

「分かっている」

距離を置き、矢を再びアリマに放つ。放たれた矢は、空を切りアリマの膝の命中する。命中したと同時に、パンと弾ける音が響く。

”ほう……少しはやるようだな。だが、魔戒法師程度では、私を倒せんッ！！！！！！”

力を解放し、アリマは姿をさらに変化させる。その体は、先ほどの奇怪なものから女性的なシルエットを持ち、衣のような触手を持った姿へと……

宙に浮き、ステンドグラスに浮かぶ黒いマリアの姿。顔は先ほどの醜悪な悪魔の顔から、整ってはいるが内から現れる邪気を放っていた。

攻撃を寸前のところで交わし、勢いに任せて本体に近づき、強烈な斬撃を放つ。

右側面アリマの貌を切り裂き、そのまま一気に両断する。

”ば、馬鹿なツ！！？！女が何故、鎧を……”

未だに信じられないのか、アリマは消滅する間際まで一夏を女であると思っていた。

「言っているだろう、私はどちらでもない。だからこそ、鎧を使うこともできるし、ISも動かせたんだよ」

アリアの消滅とともに教会の中に風が吹き荒れる。

「いつかは、今までになかったことが現実になる。俺にしちゃあ、ISの存在が信じられないもんだがね」

「そうだね、ISなんて創造の産物でしかなかったんだから、この10年間は信じられないことばかりだったんじゃないかな」

一夏は、荒れ果てた教会に背を向け、この場を後にした。

誰も居なくなつた教会の跡に残されたものの中に、こんなものが……

” 史上初 世界初 ISを起動させた男子 織斑 一夏”

の記事が……

顔写真は載っては居ないが、背を向けて自宅に向かう後姿だけが掲

載されていた。

それから二カ月後、一夏はIS学園へと入学する。

第零話 其の二（後書き）

やっちゃいましたISSのSS。この物語の一夏は、ある作品の主人公と対極になるようにしています。

ある作品とは、私が前にやっていたライダーのクロスSSなんです
が、こちらも

区切りのいいところで投稿をしたいと思います。

週一のペースが理想ですが、何処まで維持できるかが悩みどころです。

第巻話「IS学園」(前書き)

いよいよ、本編が始まります。PVが既に3000越え、感想まで頂き、すぐモチベーションがあがってきます。ありがとござい
ます………!!

それでは、どうぞ………!!

ホラー

闇に潜み、古より魔界に生息し、陰我のあるオブジェより出現し人間を襲い、その魂を食らう魔獣。

ホラーは、我々の世界の生物のどの生態系にも属さないために、古より妖怪、悪魔として伝わっている。

彼らは人間、物に憑依し実体化する。特に人間が憑依される事は”死”と同じであり、その魂は安らぎを得ることなく苦しみ続ける。

陰我

森羅万象に存在する闇。それは、主に人間の持つ負の感情、邪心や欲望である。

此処に宿った”陰我”をオブジェにして、ホラーは我々の世界へ現れ、人間を捕食する。

四月某日

一夏はモノレールに乗っていた。周りには、IS学園の制服を着た女子が自分を見て少し騒いでいた。乗っている乗客は、皆女性である。

「しかしまあ、女の園とはよく言ったモノだ。あ、一夏も一応は……」
女なんだよなと言いたかったが、言えなかった。ヴリルなりに気を使っているのだろうか？

「確かにね。私は今まで、男で通してきたんだ。今さら、女の方に変えるつもりはないよ」

一夏は、少しため息を吐き、そう応えるのだった。正直、人ごみは好きではないが、世界初の男性のIS操縦者として学園に行かねばならないのだ。気がめいってしまう。

今、ヴリルは腕輪ではなくペンダントになっている。理由は、言うまでもなく姉である千冬の目を逃れるためである。

「姐さんは、どうして俺にはめちやくちやあたるのかね」

「仕方ないよ。きっかけは、私がお前に応えた事が魔戒騎士入りを決めてしまったんだ。姐さんに相談もなしだったから……」

一夏は、たった一人の肉親である姉の事を想った。

物心つく頃から、両親はいなかった。分かっているのは、姉と自分を捨てて何処かへ行ってしまったことだ。

故に私にとって家族は姉だけで、姉にとっても私だけが家族だった。だからこそ、姉は私を護ろうとした。

十代のまだ、青春真っ盛りのころに学校と仕事に奔走して、ここまです私を育ててくれた姉には感謝しきれない。

そんな姉の気持ちを踏みにじるかのように魔戒騎士として戦う事を選んできました。幼いときに彼らに出会い、護りしモノである彼らの生き方に共感し、いつの間にかその修練に明け暮れていた。

姉が仕事に忙しく、めったに家に帰ってこれないのは少しさびしか

ったが、この事がばれるよりは良かったと思っていた。

一年前のあの日、何故か姉が帰っており、ホラーとの戦いで傷ついてしまった私と鉢合わせしてしまったのだ。

”一夏!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!”

私を見るや、駆け出した姉の顔は今も忘れられない。怒っていて、今にも泣き出しそうな顔を……

”なぜ、私に何も言わなかった!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!なぜ、お前がそんなことをやらねばならんだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!”

この事を巡って、初めての姉弟喧嘩を始めたのだ。私は、当然やめる気にはなれなかった。姉には悪いが、もう私は引き返せないところまで関わってしまったのだ。

だからやめられない。姉もまた、私に何度もやり直せる、今から別の生き方を選ぶことができると言ってきかせた。

私ひとりでは、姉とこじれたままだったかもしれない。だけど、一年前のあの日に出会った”仲間達”が私達を支えてくれた。

仲間達は、それぞれが不思議な宿星をもった者達だ。時々仲間の所にはお邪魔させてもらっている。

「しかし、周りの娘っ子達は、何を騒いでいるのかね?と言いたいところだが、やっぱり一夏が姐さんに似ているからか?」

ヴリルの言葉の通り、周りの女生徒達は私の姿を見ては”千冬様?

”、” 千冬お姉さまにそっくり”と話しているのを聞く。

「そうだね。私は時々、姉さんに間違えられるから」

私が、姉と間違えられたのはかなりの数に上り、そのたびに”人違いだ”と言ってきた。

そう姉は、IS操縦者の中では格別の存在であり、世の女性たちの憧れである。

かつての日本代表にして、ISの世界大会であるモンド・グロツンの第一回 総合優勝者。故に不敗乙女 ブリュンヒルデと言われ、今尚熱狂的な人気を誇っている。

「目つきの鋭さも益々似てきたしな」

「それは、よくわからないけど。姉さんの言うように昔ほど、穏やかな顔はしてないみたいだしね」

ふと、視線を向けると反射した窓に姉と瓜二つの貌を持った自分の姿あった。髪は姉よりも短く、目は確かに鋭い。

姉からは、目つきが悪いとよく言われる。この間も”また、悪くなっている”と嘆いていた。

「さて、そろそろIS学園だ。ヴリル、二人きりになるまでは絶対にしゃべらないですよ。私がいいと判断するまでは…」

「ああ、分かっている。しかしなんだ、この学園は、感じたところかなりの”陰我”の要素がある。今まで、ホラーが出てこなかった

のが不思議だ」

ここに来る前に姉からは、ヴリルを持って行くなと言われていたが、一夏としては一人？にしておくことができなかったので、連れてきたのだった。

「感謝するぜ一夏。楽しい学園生活を送ってこい。俺は、ここで見守ってるからよ」

「ふふ、ありがとう、ヴリル」

私はこれから三年を過ごすIS学園へと足を踏み入れた。

一夏

本当に女子しかいないのか。ISは女性にしか起動できない、それゆえ関係するのは女性が多い。操縦者、その開発にしてもだ。

あらかじめ、聞いてはいたがこれは、男が一人だけだと相当きつい。一応、私も男なのだけれど、女でもあるので特にプレッシャーにはなっていない。

「全員、揃っていますね。SHRを始めますよ〜」

私の席は、真ん中の一番前だ。これは、さすがに目立つし、正直隅っこがありがたかったのだけれど、誰がここにしたのか？

「それでは、次は織斑君……………」

ここで先生の声が少しだけ小さくなった。理由は言うまでもなく、私の外見であろう。

「…………はい」

少し、考え事をしていただけの自分でもはっきり分かるほど低い声をしていた。まるで怒っているかのような、ついでに言うと目つきも姉曰く相当悪くなっているの、そう取られてもおかしくはないかも…………

「ひつ、も、もしかして怒った？あ、う、ごめんね。今、自己紹介をしていて”あ”から始まる人からで、今は”お”なんだよねっ！だからね、自己紹介してくれるかなっ！ご、ごめんねっ！」

「別に謝らなくてもいいですよ。少し考え事をしていただけですから、山田先生」

どうみてもテンパっている山田先生を安心させるために私は、少しだけ笑いかけた後、席を立ち。

「織斑一夏です。世界初の男性のIS操縦者ということですが、まだ皆と比べて分からないことだらけです。迷惑をかけるかも知れま

せんが、一年間よろしく申し上げます」

無難に頭を下げるが、”えっ、ほんとに男？””声がセクシー”、
”本当は女の子じゃ”、”千冬様そっくり””織斑って”

色々と囁きが聞こえるが、挨拶はこんなものでいいだろう。なぜか、
山田先生は私を見て、呆けている。不思議に思いながら、席に着こ
うとした時だった。

「なんだ、まだSHRは終わっていなかったのか？」

私にとっては、もっともなじみ深い声でした。グリル辺りは、”お
おっ、姐さん”と言うだろう。そうだ、姉さんだ。

「あ、織斑先生。職員会議は終わられたんですか？」

「ああ、すまないな。山田先生、慣れないことを押しつけてしまっ
て」

姉は山田先生に笑いかけていた。先生が小声で”織斑君と同じ”と
僅かに聞こえた。

「い、いいえ、副担任としてこれぐらいは、当然です」

えへんと胸を張る山田先生は、何処となく微笑ましく見える。

「諸君、私が”織斑千冬”だ。君たち新人を一年で使い物になる操
縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、よく理解しろ。

出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五歳を

十六歳までに鍛えぬくことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

姉がまるで演説をするように力強く自己紹介をした。言ってる事は、暴力的だが説得力がある。さすがは、ブリュンヒルデと言う所か。

「キヤアアアアアッ！！！！千冬様、本物の千冬様よッ！！！！」

「ずっとファンでしたッ！！！！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんですっ！北九州からッ！！」

「私、お姉様のためなら死ねますっ！！」

「織斑君と同じ顔っ！！？！！」

さすがは、姉さんです。世界の女性から多くの支持を集めているだけあります。ヴリル辺りは、ここで何かを言いたいと思うところだろう。

「……………毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

姉さんは、うっとうしそうな顔で一組全体を見回した。

姉さんは、こっぴつのが苦手だからね。それをいうなら、私もか…………

「キヤアアアアアアアアアッ！！お姉様ッ！！もっと叱ってっ！！！！罵って！！！！」

「でも時には優しくしてっ！」

「そしてつけあがらないように躡をして~~~~!!!!」

普通なら鬨聲ものだが、流石は姉さん。盛り上げています。

あの無愛想な黄金騎士なら、印象最悪かもしれない。

姉は溜息をつきながら額に手を当てる。それすら絵になっているのはすげー。

「それと、一夏。山田先生を怯えさせるな。私の印象が悪くなる」

どうやら、先ほどのアレを物陰から見ているらしい。別に怯えさせては居ませんが、

「……………それは、私の目付きが悪いと言いたいのですか？織斑先生」

「馬鹿モノと言いたいところだが、今は、千冬姉でいい、お前は双子と言っつていいほど私に似ている。もう少し、表情を和らげろ」

そんなことを言う姉さんに対して、山田先生は何かを言おうとしているが、会話の波に乗り切れないらしい。

「男一人の状況でどうしろと……………」

「戸惑うのは仕方ないが、お前も一応は……………」

女と言いたいのですか。でも、言えないんですよ。私も女である

ことは自覚していますけど、戸籍上は男ですから、

「まあ、これからは学園にいる時は織斑先生で通してもらうぞ、織斑、それと……」

そう言って、私の腕をつかみだした。この腕は、腕輪だった頃のヴリルを付けていた。

「よし。あの不届きモノはいないようだな。この学園に来たからには、お前も晴れて、こっち側だ。向こう側に関わることはない」

そう言いながら、再び、一組全体に視線を向け

「先ほどのやり取りで分かってもらえたが、こいつが世界初の男性のIS操縦者にして、私の弟の織斑一夏だ。私に似ないで目付きだけが悪く、少し硬いが、まあよろしく頼む」

「ええッ、うそ……!!」

「やっぱりっ!!?!?!」

「いいなあ、変わってほしいな」

クラスメイトがやたら騒いでいる。正直、姉のこれは有難迷惑だ。

「織斑先生。公私を分けた方がよろしいのでは……と私は思うのですが」

「そうだな、先生としては、あまり社交性のないお前にその辺のところを直してもらいたいのだからな」

私をこの席にしたのはあなたでしたか、職権乱用と言いたいところですが、まあいいでしょう。いずれ慣れますから。

確かに私は、友達が多い方ではない……中学の頃は、鳳と弾ぐらいしか知り合いがいませんでしたし……

「分かりました」

何故か、姉は嬉々として私をこちら側に染める気満々だ。こちら側の世界。確かにホラーはいませんけど、それなりに”陰我”はあると思いますよ。

”番犬所”からは、まだ通達、連絡は来ていない。これから、どうすべきか……

そういえば、幼馴染の篤が居た。向こうは、私を覚えてくれているかどうかわからないが、私は覚えている。忘れるわけがない。

これでいいだろう。これで一夏もあちら側の事には気を回せなくなる。

我ながら女々しいが、一夏はあまりにもあちら側に染まり過ぎている。中学時代の私は、一夏を護ろうという一心で、かなり怖い人物だったらしい。

故に時々、怖がらせてしまったこともある。一夏も中学生の頃は、人を寄せ付けなかったという。修学旅行の写真も隅のほうにしか写っていない。昔の恩師曰く”織斑の再来だ”と言っていたが、私はそんなに恐ろしい人物だったのか？

ISを一夏が動かしたのは、本当に驚いたが、それはそれで、一夏が別の生き方ができると思ったからだ。私としては、魔戒騎士であることを認めたとはいっているが、実を言えば、一夏には今すぐ辞めてほしい。

あのヴリルという不屈きモノは、私との相性は最悪だ。私のペースがすぐに乱される。あの不屈きモノは、それを面白がっているから始末が悪い。一夏も一夏だ、ろくなモノを持っていない。

ここならば、多少は不自由な思いはさせても、危険な夜の戦いに赴くことはない。実を言えば、ISにもあまり関わってほしくはなかったのだが、魔戒騎士よりはISの方がましだ。

ISは、国家の力に関わる故に扱いには慎重さが求められる。故に女尊男卑という風潮が社会問題になっている。

一部で言っているだけで、大きなというわけではない。唯一の男で

ISを起動できる一夏の希少性は言うまでもない。正確には、IS
”インターセックス”中性”ではあるが。

一夏ならば、一人でもやってはいけるだろう、その希少性を考える
と非常に危うい立場だ。男でも女でもない故に、男女どちらにも付
く事が出来ず、ISを動かしたことにより、この世界のどこにもま
ともな居場所すらない。

いや、むしろ私が一夏から離れられないのだろう。どんなに栄光を
称賛を浴びようと、私にとってそれは、一夏以上のものではない
のだ。

中学を卒業したら、本格的に魔戒騎士の務めに従事するかと考えて
いたが、意外にも一夏は進学を考えていた。もし、魔戒騎士の務め
に従事するようなら、徹底抗戦も辞さない覚悟をしていたのは、私
だけの秘密だ。せめて高校、できれば大学卒業も……

あの不屈きモノ曰く

”あれだ、一夏は姐さんの事をそうとう気遣っているんだぜ”

少しでも私を安心させたいのだろうか？あいつの生き方は、常に誰
かのためなのだろう。魔戒騎士がそうであるように……

本来なら、見守る事が筋なのだが、私はただ見守ることができない。
故に、事あるごとに魔戒騎士とは別の生き方があることを一夏に言
っている。

この学園で、一夏がどう過ごすかは私にもわからない。私のこの気
持ちを、一夏は分かってくれているだろうか？

お前を危険な場所に行かせたくないことを……

だが、ここならば、”ホラー”が現れることはない、一夏も魔戒騎士とは別の行き方を見つけてくれるかもしれない。

第

一夏。お前、すごく綺麗になったなって、男に言うことじゃないよな。

最初お前と出会ったとき、女だと思っていた。真実は男だった。

私が男女に対して、お前は女男だった。だけど、お前はその辺の男子よりも男らしく、私を護ってくれた。

あの時は、女そのものだったが、成長すればすごくかっこよくなると思っていたのだが……

なんだ？その華奢な身体は、長い髪は、白い肌は？カッコよくなっ
たとは言えないではないか！！！！

お前が私に綺麗になったと言っても嫌味にしか聞こえんぞ!!!!!!
それに目付きは千冬さんによく似ている。千冬さんは、そこは似て
ないと言っているが……

一種の近寄りがたさを感じるところもそっくりだ。あの頃のお前は、
千冬さんとは正反対だと思っていたが、やはり姉弟だから、似てし
まうのだろうか？

いやいや、あの人と私が似てしまうのだけは勘弁したい。あんな奴
に似たくない。そんな事を考えていたら、いつの間にか一夏が私の
前に立っていた。

「い、一夏っ?!?!?!」

いつの間にか目の前に立っている幼馴染に対して、等は思わず声が
上ずってしまった。

「どづしたの等。そんなに慌てて」

らしくない幼馴染の様子に一夏は、思わず苦笑してしまった。

「な、何を言うか!?!い、いきなり話しかけるな!?!?!」

反射的に怒鳴ってしまうのは、一夏のよく知る箒像である。

「こ、ここでは何だ、少し外へ出るぞ。付き合え」

どもりながらも箒は、注目を浴びるのが嫌なのか一夏を教室の外へ連れ出すのであった。

「そうだね。私も少し外の空気が吸いたいと思っていたところだ」

一組の教室前には、唯一の男性のIS操縦者を一目見ようと学年中の女子が溢れ返っていた。

まさかここまでではと思う一夏ではあったが、表情は崩しては居ない。

”あれが世界で唯一ISを動かせる男子なんだって”

”ええっ、女の子にしか見えないんだけど、ていうか、千冬様そっ

くりなんだけど……”

対する筈は、少しだけ表情を歪ませた。

（何だ、一夏がそんなに珍しいのか？ 言うておくが、私は幼馴染なんだ）

周りからちらほらと

”篠乃之さん、抜け駆け？”

”先を越されたッ！?!”

”大丈夫、まだチャンスはあるわ”

などと聞こえてくるが、二人はそのまま屋上へと足を向けた。

一夏

「……………」

先ほどから筈は、何も喋らない。当然か、私から呼び出したのだ。

「改めて言うね、箒。久しぶり」

「……ああ、そうだな」

私が話しかけると、箒は何処となく緊張したように返事を返してくれた。

「六年ぶりだけど、箒は変わらないね。一目で箒だってわかったよ」

「な、何だとっ!?!わ、私が成長してないと言っても言いたいのか!?!」

顔を真っ赤にして、怒鳴られました。そういうわけじゃないんだ。

「いや、髪形と私があげたりボン、まだしてくれてるんだってね」

箒は、焦ったようにリボンと髪型に手をやる。

「……ああ、これが一番楽だからな」

少しだけ、視線を私から外し照れたように応えてくれた。

「ふふ………そういう所は昔から変わってないね。相変わらずで、何よりだよ」

「何だ、お前は、目付きが鋭く、悪くなっているせに………」

箒は私に仕返しをしたいのか、姉と同様に目つきの悪さを指摘する。

「そつだね…姉さん曰く、昔ほど穏やかな目はしていないみたいだし」

篝

「そつだね…姉さん曰く、昔ほど穏やかな目はしていないみたいだし」

一夏は、何処となく寂しそうな顔をしていた。私が知らない表情だ。いや、六年も離れていたのだ、私が知らない表情があつて当然だ。

ここで、気の利いたことが言えればいいのだが、口下手な私にはそんなことは言えない。これが嫌になる。

嫌な沈黙が少しばかり続いたが、

「篝、そろそろ戻ろうか。遅れると姉さんが怖いよ」

ここで一夏が私に手を差し伸べてくれた。素直に取ればよかったのに

「何だっ！?!もう子供じゃないんだぞ!?!?!手なんて恥ずかし

くてつなげられるかっ!?!」

恥ずかしさのあまり私は、手を取ることなく一夏に背を向けてしまった。

一夏の顔が見れない。恥ずかしくて……こんな自分を見せられない。嫌だ、素直に一夏に触れ合いたかったのに、何故?

自己嫌悪に陥りながら、私は教室に戻っていった。

「だけど、一夏。お前は、あの頃と変わっていないぞ」

私は、自分でも分かるくらい頬が熱かったのを感じていた。その後、クラスメイトから何があつたのかを追求されてしまった。

屋上に残った一夏は、箒の背を見送りながら

「……やっぱり、六年も経つと箒も変わるのかな」

と呟いた。

「いや、一夏。そうでもないぞ、変わるものもあれば、変わらないものもある」

ここで、一夏の胸に居たヴリルが制服越しに語りかけた。

「何だ、ヴリル。私がいいというまで、喋るなどいったはずだけど」

「硬いことは言うな。箒だっけ、鈴の前に一緒だったんだよな」

「……小学四年生までは一緒に居たんだ。これは、前にも言ったはずだけど」

「そういえばそうだったな。あの嬢ちゃんには、間接的ではあったが、この前、会ってたもんな」

ヴリルの言葉に、一夏は少しだけ目元をきつくした。

「ヴリル、確かにアレは、箒が関わったといっても、ほんのきつかけだから、会ってたとはいえないよ」

「ああ、あの時はホラー狩りの最中だし、巻き込むわけには行かなかったからな、俺としては、再会して、剣道の全国大会の優勝祝つてあげてほしかったな」

「……あのときの優勝は、箒にとってはいい思い出ではないよ。あそこで祝つても、箒を悲しませるだけだ」

「わかってるぜ。あの嬢ちゃんは何だか、放っておけないな。かなり危なっかしい」

一夏も同意する。篤は、あまり要領がよくなく、かなり不器用だ。それは、幼い頃から知っている。いじめにもあっていたこともあった。

「まあ、嬢ちゃん以外にも危なっかしいのはそれなりにいる。姐さんには悪いが、ここは、”陰我”を生みやすい要素がかなりある、ホラーが現れる可能性がそれなりにある……」

ヴリルの言う通りである。

世界の軍事バランスを一変させたISは、国家の”力”の象徴であり、その”力”に対する姿勢は、凄まじいものがある。

故に様々な陰謀や欲望が渦巻いている。このIS学園もまた同じであり、国連の思惑により日本政府が運営、管理しており、各国からの留学生に紛れて諜報員が多数紛れ込んでいる。

国の欲望だけでなく、個人の欲望もまた存在し、それが負の方向に走れば邪心となり、”陰我”を生むのだ。それは、ISが絶対的な力の象徴であるからゆえである。

「今は、私の存在が”陰我”を生むかもしれない。世界で唯一の男性のIS操縦者であるから」

「確かにな。だが、お前の使命は何だ。一夏」

「分かっている。私の使命はホラーを狩る事、護りし者として戦うことだ」

「よし、それでこそ、一夏だ。そろそろ行くとするか。俺は黙って
おくから、安心しな」

丁度、チャイムが鳴り一夏は教室に戻るのだった。

第巻話「IS学園」（後書き）

一夏、IS学園に入学です。幼馴染との再会と学園に対しての不安を覚えていきます。

ここで、少し、ガ口風に予告をしておきたいと思います。

それでは、では！！！！！！

世界初の男性のIS操縦者 織斑一夏

そして、俺の相棒。女にしか扱えない兵器を扱える男に対して世の女は、一夏に何を見る。

ここに一夏に近づく女が居た。見た感じ、”女尊男卑”の考えの染まった今時の小娘だ。

次回！ セシリア・オルコット

一応、言っとくが一夏も女だぞ。だが、こいつは、口が裂けても小娘には言えねえな。

第2話「セシリア・オルコット」(前書き)

少し早いですが、テンションが上がりましたので、早い段階で掲載します。

GNZさん、tokki-兄さん、バラモ-クさん、白砂糖さん、感想ありがとうございます。

第弐話「セシリア・オルコット」

「私とあいつとは、何も無い。ただの幼馴染だ」

チャイムが鳴り、席に着いた箒はクラスメイト達からの質問攻めから開放され安堵の息をついていた。

箒

” 何もない” 自分でいうのも何だが、虚しい気持ちになる。本当は、一夏に会いたくて、しかたがなかった。

一夏は、私にとって初めて好きになった異性 初恋の人だからだ。

一夏の事を思うと自然に手をやるのは、このリボンと髪型。これは、幼い頃一夏が私にしてくれた髪形だ。

幼い頃から、私は剣道に打ち込んでいて、一夏も同じように剣を学んでいた。

それまでは簡単に髪を結えた程度だったが、男女といじめられていた私を護ってくれた一夏は

” 元気を出して、箒。ワタシは知ってるよ、箒はかわいい女の子だ
って”

そう言つて、私の涙をぬぐい、落ち込んだときは何も言わずに傍に居てくれた。ある時、私に今、しているリボンをくれ、髪を梳かしこの髪型にしてくれたのだ。

見た目は、私よりも女らしいのに、誰よりも男らしく私を護り、傍にいてくれた。もしかしたら、誰よりも私に近かったのは一夏だけだったかもしれない。

家族は、むしろ姉である 束にかかりつきりだ。姉は、自分の世界にこもっていて、他人に対して何の関心も寄せない人だった。

思い出しても、私の姉である篠ノ之 束は、私に対して姉らしいことなど何一つもしてくれなかった。

むしろ、私の人生の半分を滅茶苦茶にしてくれた。人生を滅茶苦茶にしてくれたものが”IS インフィニット・ストラス”だ。

宇宙用の強化マルチスーツであるこのISを姉が発明し、発表した事で世の中は、特に私の日常は壊れてしまった。

ISによつて、姉が重要人物になり、家族が政府の都合によりバラバラになつても、姉は知らん顔だ。

何よりも悲しかったのは、初恋の相手と言つてもいい一夏と離れ離れになつた……

一夏と離れた私に待っていたのは、あちこちを点々とする孤独と執拗とも言える政府の監視、何処に行つてもついてくる束という天才の妹と言う名のレットル。

だからこそ、願った。一夏に会いたいと……

六年間の陰鬱とした気持ちの中、私は忌々しいIS学園に入学することになったが、ここで思いがけない再会を果たした。

世界で唯一、ISを動かせる男子として織斑一夏がこの学園に入学したのだ。

私は、嬉しかった。会いたかった人にようやくめぐり合えたのだ。嬉しくないはずがない。

一夏は、綺麗になっていた。かつこよくではなく綺麗にだ……

目付きは、格段に鋭くなっていたが、本質的には、あの頃のままだった。私に最初に声を掛けてくれた。

だけど、私は一夏に怒鳴り、あまつさえ差し出した手すらも拒んでしまった。本当なら、その手を取りたかったのに……

この六年の間で私は、ひどい人間になってしまったのだろうか？一夏と一緒に学んだ剣道だって…もはや、一夏に見せられるものではないのだから……

これから、どうしようか？一夏は私を嫌いにならないだろうか？こんなことで悩んでしまう人付き合いの苦手な自分がいつものように嫌になった。

自身に対して苛立ちを覚える筈は、ふと視線を感じ、その先を見た。その先には、いつの間にか教室に戻ってきた一夏が目元に笑みを作っ
ていてくれた。

”大丈夫、気にしていないから”

と言わんばかりに……

自分を気にかけてくれる一夏に対して、再び気恥ずかしさから頬を赤くしてそっぽを向いてしまう筈だった。

IS学園は、ISという兵器を扱う、開発する者達を育成する機関であるために始業式から授業が始まる。

「であるからにして、ISの基本的な運用には現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合、刑法によって罰せられ……」

ISの力は、国家の象徴。故にこの学園にくるのは、エリート中のエリートである。

一夏は、五冊の教科書を開きノートを取っていた。

(……話には聞いていたけど、ISイコール”国家の力”。誰もが手軽に使えるわけではないか……)

世間話程度には、ISの事は知っていたが、ここまで慎重な扱いを求めるとは始めて知った。世の中には、ISが使えるからといって女は偉いという風潮があるが、そんなことはない。

ISの力は、個人の意思だけではなく所属する国家の意思をも必要とするのだ。

「……今のところで、分からない人はいますか？」

ここで山田先生こと山田真耶がクラス中に分からないところがないか問いかけた。

「織斑君は、どこか分からないところはありますか？」

「いえ、今の所は大丈夫です。ただ、ISの運用に関してですけど、国家代表は自身の専用機を持っていますけど、自分の意思で自由にいつ何処でも使えるわけではないんですね」

一夏の言葉に、真耶は

「はい。確かに国家代表は自身の専用機は持っていますが、それを扱うには国家の認証が必要です。織斑君の言うようにいつでも使えるわけではありません」

「そうですか。大丈夫です、そのまま続けてください」

一夏は納得したように頷き、真耶は再び授業に戻った。そんな一夏に視線を向ける金髪の少女が居た。

授業が終わり、再び廊下には一夏を見ようと学園中の女子が押しかけていた。

唯一の男性のIS操縦者がよほど珍しいのだろう。

一夏は、それらの視線を気にすることなく次の授業の準備をしていた。予め予習はしていたので、ついていける。

暇があれば勉強をしている傍ら……

”おい、一夏。なんだ、この訳の分からない文字の羅列は、魔戒語にもこんなは、載っていないぞ”

”対したもんだな。棒に石を括り付けて獣を叩いていた人間が、よくもここまで……”

”IS委員会？番犬所みたいなものか？”

腕輪だった頃のヴリルがやたら騒いでいたが、ひたすら集中して無視した。

そのためか、一夏はIS学園の模試問題では8割方は正解をしていたのだった。実際、こちらでの試験も受けており、五番内には居たのは、一夏とその姉のみが知る。

「ちょっと、よろしくて？」

授業中に一夏に視線を向けていた特徴的な髪型をした金髪の白人の少女が前に居た。

少女の名は、セシリア・オルコット。

一夏

「ちょっと、よろしくて？」

私に声をかけてきたのは、確かイギリスの代表候補生 セシリア・オルコット。

「……何か？」

無難ではあるが、そう返した。自慢ではないが、無愛想な人間が多い魔戒騎士の中では私は、人当たりがいいらしい。

「んまあっ！?!なんて、目つきの悪さ。ワタクシが声を掛けたん

ですよ、もつとにこやかに出来ませんか？」

また言われてしまったか、姉さん、尊にも言われるこの目つきの悪さ。私は、かなり目つきが悪いようだ。

「……目つきが悪いのは、承知している。セシリア・オルコットさん」

自分でいうのもなんだが、目元に少し力が入っている。ここは、目元の力を緩めないと……

「あら、ワタクシをご存知で。下々の”男”にしては、感心な事ですわね」

優越感たっぷり私を見ている。このセシリア・オルコットの態度に、この四文字が浮かんだ。”女尊男卑”。

ISの登場により、世の中は女性中心と声高に語る傲慢な女性達が多くなっている。理由は言つまでもなく、ISが女性にしか扱えない兵器だからだ。

見知らぬ女に男が小間使いのように扱われる事は偶にだがある。私は、外見が”女”なので、特に”女尊男卑”を地で行く輩に絡まれることは皆無だが……

魔戒騎士達からは、ISに関しては評判はあまりよくない。理由は言つまでもなく、ISの登場で”女”に関する”陰我”がここ十年で圧倒的に増えているのだ。

この間、私が狩った”アリマ”もそうだが、その後も”女尊男卑”

を因とした”陰我”から出現したホラーを数多く狩ってきた。

世の中は、こうだが、逆に魔戒騎士と女性の魔戒法師の連携、結びつきは、より高まっており、これまでにないくらい一緒になるものが多くなっている。

これは余談だが、学園に入学する二週間前に遠出をして閑岱まで行き、”白夜騎士”の弟子の婚姻を見てきた。

その時、白夜騎士より”一夏、お前に、愛する者はいるか？”と聞かれたが、私の愛する者。それは、女なのか、男なのかは分からない。それに私は、恋愛など分からない。

ただ、私は家族が居て、友が居るだけでも十分だと応えた。

”それがお前

の戦う理由か、護りし者は内に誰より

も護りたい者の姿を想う事で、何処までも強くなれる。今度の件は、大変だが、お前にとって誰よりも護りたい者が現れるかもしれない”

そうは言っていたが、私は少なくとも目の前に居るセシリア・オルコットのような者だけは遠慮したいと思った。

「先ほどのあなたの自己紹介を聞いていたから……」

「フフン、よろしいですね。先ほども言いましたようにワタクシは、イギリスの国家代表候補生。つまり、エリートですわっ！！！！」

周りにワザと聞こえるように声を張り上げている。男としてもそうだが、女としてもあまりよい印象ではない。

「……そのエリートが、何故、私のような一介の男子生徒のところ
に？挨拶なら、関心するよ」

「んまあ、ワタクシにそういう口をききますの？そうですわね、ワ
タクシはこの学園を主席で合格をし、試験管をも倒したエリート中
のエリート。あなたのように、無知で何も出来ない方にだって優し
くしてあげますわ」

典型的な、それもかなりの”女尊男卑”の考えに固まっているらしい。
確かにISは、女性にしか許されない力だが、それはあなただけの
力ではないことは、分かっているだろうに……

「……………別に無理して優しくしなくてもいい」

「わざわざ、優しくしてあげたのに、何ですのっ!!?!?!その態度
はっ!!?!?!?!」

私の反応が感に触ったのか、先ほどとは違って、激しく問い詰めて
きた。これぐらいの反感を買うことぐらい分からないのか？

「自分の事を振り返ってみろ、セシリア・オルコット。私のお前に
対する態度は、それ相応だ」

自分でも反感を感じているのは、よく分かる。口調もきつくなって
いる上に目元にも力が入っている。

「何ですってっ!!?!?!」

更にヒートアップしたのか、私が用意していた教科書等を払いのけ、
詰め寄ろうとした時、チャイムが鳴った。

「ふんっ、命拾いをしましたわね。また来ますから、逃げなくつてよ」

そう言つて、私のデスクの上から落ちた教科書を無視して自分の席に戻った。周りのクラスメイトは、私に何かを言いたそうだが、相手が相手なだけに私に味方ができないらしい。

仕方がないので、教科書を拾い、汚れを払って次の授業に集中することにした。

「何だ、あの小娘。生意気にもほどがあるぜ」

喋るなどといったヴリルが私にだけ聞こえる声で、吐き捨てたが、私はそれに応えることなく、教卓につく山田先生と姉さんが現れるのを待ったのだった。

絡まれて分かるが、アレでは魔戒騎士達がISに対して好意的ではないのが嫌というほど理解できた……………

二時間目は、担任である千冬が行うものなのか、先ほどよりもクラス全体が引き締まっているようにも感じられた。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

各種装備　ISは近距離、中距離　遠距離と基本的なものがある。

軍事目的なだけに、様々な状況に対応できるようになっている。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

授業の前に千冬がクラス代表者について話し始める。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の会議や委員会などへの出席……」

まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。

今の時点で大した差はないが競争は向上心を生む。一度決まると何か大事がない限り一年間変更はないからそのつもりで」

一夏

IS学園は、こうやって学園全体の士気を高めているわけか……

思うところは、はっきり言って”お祭り”と言った感じがする。ISは、最強の兵器ではあるが、その活躍場はIS委員会が運営する”競技大会”である。

各国が血筋をあげて、自国の戦力の向上のために研究を行っている。本来ならば、戦場での活躍を想定しているが、実際は最強ゆえに使い所に困っているのが現状だ。

一機で一国の軍隊をも相手取る”戦闘能力”は、まさに国家の象徴ともいえるほどの力だ。

私達、魔戒騎士にもその技術を競い合う儀式 ” サバツク ”。魔戒騎士による闘技大会である。

それは大会を運営する元老院が選んだ屈強な魔戒騎士のみが出場を許される神聖なもの。いつか、私もそこで戦ってみたいと考えている。

たしか閑岱の白夜騎士の翼さんとその弟子、暁さん、あの黄金騎士 鋼牙さんと互角の実力を持つ銀牙騎士 零さんも出ていた。

「誰か、立候補をするものは居ないか？それとも推薦、他薦でもかまわないが？」

担任である姉が、クラスに聞いている。

「はいっ！！織斑君がいいと思います！！！！」

私の名前が呼ばれてしまった。表情は崩してないつもりだが、目元に力が思わず入ってしまう。

「お、織斑君。に、睨まないで」

山田先生が私を見てそんなことをいう。別に睨んではいけないのだけれど……

「……………また、目付きが悪くなったか。一夏」

ここに居るときは先生と生徒の関係なのに……………

「はいっ！！！！私もそれがいいと思いますっ！！！！！！」

次々と私を推す声がある。はっきり言って、私はそういう柄じゃない。

「……質問ですが、織斑先生。他薦はお断りできますか？」

「そんなこと、出来るわけないだろう。いい機会だ、やってみてはどうだ？織斑」

ドヤ顔で私に提案する織斑先生こと姉さん。

「候補者は、織斑 一夏。他には居ないか？自薦推薦は問わんぞ」

流れは完全に私を代表者にしようとしている。

「織斑先生。物珍しさで私を推すのは、どうかと思うのですが？」

「何だ？断るのか、この流れで断るのは、どうかとも思っぞ」

姉は私をこちら側に染めるべく色々と体験をさせようとしているようだ。

「待つてくださいつ！！納得がいきませんわっ！！！！」

私と姉の会話に割り込むように甲高い声が教室に響いた。セシリア・オルコットの声だ。

「そのような選出は認められませんっ！！大体、男がクラスに居ること自体が恥曝しですっ！！！！その上、クラス代表までっ！！！！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっし

やるのですかっ!?!」

男が恥曝し。それは、身内に男がいるだけでそれは屈辱だといった
いのだろうか?

「実力から行けばワタクシがクラス代表になるのは当然、それを物
珍しいからという理由で極東の猿にされては困りますっ!!ワタク
シはこのような島国までIS技術の修練に来たのであってサーカス
をする気は毛頭ございませんわっ!!!」

私という存在がとことん気に入らないらしい。男というだけで…私
の女の部分で言うのもなんだが、セシリア・オルコットの意見には
同意しかねる。

「いいですかっ!!!クラス代表は実力トップがなるべき、そして
それは、ワタクシですわっ!!!」

クラス全体に同意を求めるように見渡すセシリア。見た所、クラス
のほとんどがセシリアから視線を逸らしている。

代表候補生である自分こそがクラスの代表であると言えといてい
るのだろうか?

「だいたい、このような文化的にも後進的な国で暮らすこと自体が
屈辱で……」

「……そこまでしておけ。それ以上喋るな。耳障りだ」

セシリア・オルコットの言葉にはつきり言って嫌悪しか浮かばなか
った。私を馬鹿にするのは別にかまわないとして、自分という存在

を絶対と思っている傲慢な態度がはつきりって聞くに堪えなかった。

「なっ！！？男の分際でっ！！？私に意見を言うつもりですかっ！
！?!?!」

腹が立ったのか、私を指差す。

「先ほども言ったが、お前の態度を振り返ってみる。私の態度はそれ相応だ。聞くが、皆は何故、私を代表に推す？このオルコットのようにな私を見世物にするつもりか？」

オルコットに対する不快感がそのまま声に出ている。

「ち、違っよっ！！？！織斑君！！？」

「そっだよ、だって…千冬様の弟だし……」

「そ、そんなつもりはないよっ！！？！本当だよっ！！？！」

誰もセシリアに代表をやってほしくないとは表立っていえないようだ。休憩の時に、自分が態々代表候補生と宣言したことだ。

代表候補生は、ISを扱うものの中でもかなりのステータスを持っており、国家の後ろ盾もあるためにそれに対して、恐れがあるようだ。

彼女の言葉に対してクラスの大半が反感を抱いているようだが……
…このオルコットが気づいているとは思えない。

「……みんなの言いたいことはわかった」

「まあっ、お分かりしましたか？あなたが、どういう立ち位置か？」
私が人間ではない、猿か何かだといいたいのだろうか？

「……………オルコットにクラス代表をやってほしくないようだということが」

「何ですってっ！！！！？！！皆さんは、このワタクシにクラス代表がふさわしくないと！！！！！！ワタクシよりもこんな男、下賤で卑しい男がっ！！！！！！」

ますます不快になる。どんな人間でも此処まで言われたら……………

「お前は、男が身内、近くに居るだけでも屈辱、恥だというのは？この場には、父、兄弟がいる者だって居る。それを分かっていっているのか？」

「そうですねっ！！！！所詮男なんて、私達の必要なときに使えればそれでいいんですっ！！！！！！それ以外は必要ありませんっ！！！！！！！！！！」

女尊男卑。女が偉くて男は不必要……………ISという心のない”力”による蹂躪。心無いから、力のないものをこうやって傷つけることができるのだから……………

「そこまでにしておけ、お前のその考え方自体が自分を否定している。仮にも代表を名乗るといふのなら、もう少し周りのことを汲んだらどうだ」

「オルコットさんっ！！あなたの態度は度を過ぎています！！！！
！！ISは女性にしか使えませんが、だからといって男性をないが
しろにしているというわけではありません！！！！！！」

副担任の山田先生が今までにないくらいに声を張り上げた。教師として、彼女の態度が目に残ったのだろう。

「副担任は黙っていただけですっ！！？ワタクシはイギリスの代表候補生ですわっ！！！！」

「イギリス代表候補生なら、もう少し言動を考えるべきだろう。ただISの力があるだけで、全てがお前の思い通りになるわけではない」

私の言葉に更に顔を赤くして

「決闘ですわっ！！！！あなたには、躰が必要のようですわっ！！！！！！」

「思い通りにならなかつたら、最終的には”力”で押さえつけるか。それで代表になってお前と同類になるのは、我慢できん。だから……」

最終的には自分の継っている”IS”に頼るわけか。それで、私の優劣を示したいのだろう。男よりも女のほうが優れていると……

「受けてもかまわないが……勝つても私は代表はやらんぞ。お前と同類には、なりたくないからな」

「それは、あなたが負けることを前提で？」

嘲るように返してくるが、私の答えは

「いや、勝つ積もりだ。お前の”陰我”断ち切らせてもらうために……」

”陰我”という聞きなれない言葉に、セシリアが疑問符を浮かべたが私は構わずに

「織斑先生、山田先生、手間を掛けさせますが、私とオルコットの戦いの場を設けてほしいのです…できれば、三日以内に」

「三日以内って……織斑君はISを動かして間もないですし、専用機だって……」

「そうだぞ、織斑。お前がいくら強いとは言っても、さすがに三日でISで決着をつけるのは……」

私の言葉に二人はもつともな事を言うが、私には三日後に戦えるだけの準備がある。

「専用機に関しては、大丈夫です。あの人から既に渡されたから……」

私は、左手首に付けられたブレスレットを二人に見せた。これが、閑岱に行く前に篝の姉である 束さんより渡された私の専用機 蒼牙。

「一夏つ、どこでそれを……た……」

束と言いそうになった姉さんを私は、言い切る前に止めた。

「姉さん、これは束さんから渡された。だけど、ここで束さんの名前を出すのは……」

視線で箒を私は指す。察してくれたのか、姉さんはそれ以上のことは言わなかった。私の専用機に関しては、例が例なだけに対応と言うことで説明してくれた。束さんの名前を伏せて……

一ヶ月前に私を訪ねてきた束さんは、蒼牙とともにある願いを私に託した。

” いくくん。ごめんね、私が自分勝手なばかりに、迷惑を掛けて……勝手なことばかりでごめんんだけど、箒ちゃんのことをお願いできる”

” いくくと魔戒騎士の人に怒られて、初めて分かったよ。私は自分勝手に生きてきて、その付けを箒ちゃんに押し付けていたんだなって”

箒が姉である束さんを嫌っているのは分かっている。ここで嫌いなもの名前を出し、さらにはその人の妹と言うことで注目を浴びてもらいたくはない。

” 私は、箒ちゃんに合わす顔がないよ。今まで、私のせいで迷惑を掛けて、嫌な思いばかりをさせてきたから……”

三日後の放課後に、一組のクラス代表を決める代表戦がアリーナで行われることが決まった。

織斑一夏は、勝っても代表になるつもりはないようだ……

第弐話「セシリア・オルコット」（後書き）

やってしまいましたセシリア・オルコットさん。

アンチと言うわけではないですが、今は敵対すると言うことでこんな風になってしまいました。彼女にある陰我を断ち切ることを一夏は宣言してしますので、悪くはなりません。

早い段階で決着を付けさせたかったのと、魔戒騎士が戦うのならと言うことで夜に近い夕方、放課後の時間帯にしました。

最近、束さんのアンチを見てましたが、おもいつき反省して落ちていた束さんが居てもいいんじゃないかと言うことで、回想ではこんな感じです。

次回からは、代表戦の前に籌をメインにしていきます。セシリアは、その後で…

予告をいれます。

おいおい、一夏。お前も他の魔戒騎士の例にもれないな……

やっぱり、互いがぶつかりあわないとお互いを理解できんのかね……

次回！花の鎖

六年振りの試合の前に、少しだけ昔話をしようか……

第参話「花の鎖」(前書き)

GAROの第二期が始まりました。さつそく見ましたが、相変わらずダークな世界観。深夜放送だからこそ、できるものだなと……

今回のホラーのデザインは個人的にはつぼでした。

さて、こちらもがんばらなくてはと思い、第参話を投稿します。

PVが一万件以上、ユニークが2千件を超えました。

それと、感想ありがとうございました!!!!!!

第参話「花の鎖」

放課後、一夏は教室で先ほどの授業の復習をしていた。IS関係の授業は、予習をしただけに何とかついていけるが、これ以上に理解を深めなければならないので、復習は大切だ。

「一夏、授業つてのは意外と面白いもんだな。ああやって、人間は学んだな」

一夏に最も近い存在 魔導具 ヴリルは本日の授業を一通り聞いていた。

「私たちが生まれる前から居て知識は豊富な癖して、授業が面白いのか？」

てつきり、退屈をしているかと一夏は思っていた。

「ああ、俺達のような魔導具は、魔戒騎士のパートナーとして居る。だけど、こんな風にごこのお嬢ちゃん達の授業を聞くのは初めてだな」

言われてみれば、学生生活というのを魔導具が体験するなど皆無に等しい。学園で魔戒騎士がこんな風に授業を受け、魔導具が傍らでそれを聞くなど今までに前例がないのだ。ましてや、男性にしかない魔戒騎士が女子高などに居ることは……

「お前も物好きだね、ヴリル。学んで、どう役立てるつもりだ？」

「それは、特に考えてないな。まあ、貴重な体験だ。思いつきり楽

「しませてもらうつもりだ」

ヴリルの言葉に一夏は、半ば呆れながらも復習を続ける。そんな一夏達に訪れる二人の女性が

「あ、織斑君。まだ教室に残っていたんですか」

山田 真耶である。少し遅れた千冬が続く。

「はい、まだ寮の部屋が決まっていないので、こちらで復習をしていたところです」

「そうですか……寮の部屋は、寮長室です」

「そうだ、私と同室だ」

千冬が真耶に続くように応える。

「お前を他の女子と相部屋と言う意見があったのだが、お前の”身体”のこともある。同室にはできん」

「織斑先生？織斑君の身体のことって？」

「そのことだが、山田君。織斑は、事故で誰にも見せたくない傷がある。それを見せるのは、織斑自身も嫌がっているな」

一夏は、男でも女でもある中性、IS”インターセックス”である。ISを動かしたのは、この体質が原因と言われている。

この事は、一夏が男性のIS操縦者である事を事実としている今、

一夏が女であることは色々都合が悪いため、秘密事項になっている。

「……はい、それを聞いて安心しました、ですが教師と一緒にたというのは、色々とまずいことがあるんじゃない、例えば、生徒に見られたらいけないものとか……」

「ああ、そのことだが、お前なら安心だ。お前は口が堅いし、べらべらと喋るほどの社交性もないしな」

余計なお世話だと一夏は思った。思わず睨みたくなった。

「睨むな、一夏。まったく、どうしてお前は…昔はもっと優しい目をしていたのに」

先生から姉が変わってしまった。事あるごとに目付きの悪さを嘆く姉に一夏は内心、うんざりしていた。

「……目付きの悪さはいいでしょう。今日、箒にもオルコットにも言われていますから……」

「そこだけは、私に似ていないのに……」

(いえ、先輩。織斑君の目付きの悪さはどうみても先輩似です)

二人が並ぶとよく分かる。双子と言えるぐらいに二人の容姿は瓜二つだ。違いは背は若干一夏が高く、肩幅はほぼ同じ程度。声は千冬のはスキーンな声と比べると一夏のほうがより女らしい声である。

「どうでもいいですが、姉さん。そんなことを態々、言いに来たの

ではないのでしょうか？」

「どうでもいいだと……この事は、後で話すとして、お前の専用機だが……」

「そうでしたっ！！！織斑君！！！その専用機はいつ、誰に渡されたんですか！！?!」

「あの場では、伏せていたが、篠乃之 東博士、東さんからだ」

「ええっ!?!篠乃之博士がですが!?!」

驚きの声を上げる真耶とは対照的に千冬は落ち着いた感じである。

「……一夏。いつ、渡された？あいつは、どういう訳か、私からも連絡が取れなくなっている、今、何をやっているのだ？」

長年の付き合いである千冬ですら、行方が分からなくなり、連絡さえつかなくなつた親友が何故、一夏を尋ね、さらに専用のISまで与えたのか？

一夏の脳裏に、一ヶ月前に尋ねてきた束の姿が浮かんだ。かつては、髪をピンクに染め、カラーコンタクトをし、派手な格好をしていたが、会ったときは髪を黒くし、カラーコンタクトを外し、質素なシスターの服を着ていた。

彼女を古くから知るものからみると、その姿は別人そのものだった。

”いっくん、どうかな？この格好……”

” いくくん、私は今までのことを振り返ってみたら、碌な事をしてないよね。お父さんとお母さんには、恩を仇で返すみたいに生活を滅茶苦茶にして…作ったものは、魔戒騎士さん達にも迷惑を…男の人達にも恨まれることを”

” 私はしばらくISは作らないよ。だけど、この子だけは特別… いくくんは、護りし者だから、絶対に政府やIS委員会の思い通りにはならないで……”

” これをちいちゃんに渡しておいて、これさえ、あればいくくんをみんなが如何こうするなんてできないよ”

私は特に何も言わなかったが、あの人はまるで自分の罪を悔いている罪人のようだった。確かに東さんは、ISを作り女尊男卑の世界を招いた。

だけど、それが自分勝手な世界を作ろうと言う願望ではないことを私は知っている。ただ、私達にとって幸せな世界を作り上げようとしたのだ、それがあまりにも強引過ぎた。ただそれだけだ。

そのために、様々なものを壊し、気づかずに居て、それによつやく気づいただけ……

一年前のホラー遭遇と魔戒騎士との出会い。これが、東さんの心を変えたのだ。何よりもこの人が一番悔いているのは…

”ごめんね、篝ちゃん。私が自分勝手なばかりに、篝ちゃんの人生をめちゃくちゃにして……”

「……私からは、何も言えない。ただ、東さんの事は、あまり詮索しないでほしい。あの人には、まだ時間が必要なだから」

「……そうか、それで渡されたままではないのだろう。動かしたのか？」

「はい、初期化と最適処理化は済ませている。これは確かに、私の専用機だ」

左手首のブレスレットに視線を向けた。これは、あの人の願いだろう。

「なるほど、それで準備は整ったと言っていたのか、まったくお前は、私の目の届かないところで、何をやっとするんだ？」

呆れ顔の姉さんと話がついていけない山田先生を見つつ、私は、苦笑いを浮かべるしかできなかった。

一夏

その後、姉さんに束さんからの手紙を渡しておいた。あれは、私の処遇に関して製作者の意向が書かれている。

イレギュラーな対応だけに私を調査するために、専用機を渡し、そのデータを取るために様子を見ると言うことである。

そのため、IS委員会を始め、各国の干渉および、何処にも所属はさせないという、無理にでも干渉、所属をさせた場合は、各国のISを使い物にならなくすると。

姉さんと違い、束さんは、私が魔戒騎士であることに抵抗を感じていない。むしろ認めてくれている。

私が魔戒騎士として不自由を掛けないように、手を回してくれるのはありがたい。

「しかし、あの嬢ちゃんが束さんの妹だったのか？性格は似てないが、根本的な所はそっくりだぜ」

寮の部屋に向かう途中で、ヴリルが話しかけてくる。

言われてみれば、そうかもしれない。あの二人は、性格こそは正反対だが、根本的にはよく似ている。

特に人付き合いに関しては、とことん苦手なのだ。

「一夏、束さんは、何故、箒のお嬢ちゃんに会いに行ってやらない？このままだと、根本的な解決にはならんだろう」

「確かにね……だけど、それだけに束さんは、自分のせいで箒を苦しめていたことに悔いているんだよ。踏み込めないのは、まだ決心がついていないんだから……」

「ったく、人間の心つてのは、色々ややこしいんだな。俺は、もっとシンプルに気持ちを伝えてほしいところだ」

「……それができたら、人間は苦労しないよ」

古くから人間を知っている魔道具達から見たら、私達人間は自分で自分を拘束しているようなものなのだろうか？

「そっぴゃ、束さんだけじゃなくて、お前も箒の嬢ちゃんに声を掛けられた場所に居たのに、それをしないで去ったよな」

ヴリルの言葉に、私も人のことは言えないと思った。箒も知らなかっただろう、半年前に”ホラー”に狙われていたことを……

半年前

人間が立ち入る事のできない異界に彼らは居た。

「 を南へ向かわせます」

「 何故、我々の管轄ではない場所に、 を？」

声は、一つの空間から複数に聞こえる。どれも男性の声である。

「 は、これまでの魔戒騎士よりも格段に若く、成長が早い。故に多くの試練を積ませなければならない」

「 一体でも多くのホラーを狩る。ホラーとの戦いの一つ一つが魔戒騎士にとっての試練なのだ」

「 故に、 は、多くの戦いを経験することで、屈強の魔戒騎士へと至る」

「 あのIsと言うモノのおかげで魔戒騎士も魔戒法師も人出がいくらあっても足りない。優秀な魔戒騎士は、多くほしい」

南の管轄

「しかし、一夏。お前も随分とお人よしだな、見ず知らずの奴の尻拭いなんてな……」

「うるさいぞ、例え尻拭いでもホラーは狩らなければならない」

「そうだったな。相変わらず生真面目な奴だ。それにしても管轄外のところは俺達を送るとは、何を考えているのかね？」

腕輪のヴリルは、相棒の一夏に苦笑する。一夏は、今、普段の管轄区域から離れた町に来ていた。本来は、西の管轄であるが。

理由は、昨日ホラーが”陰我”のあるオブジェから現れ、それをこの管轄の魔戒法師が討伐に赴いたのだが、返り討ちで重傷を負ってしまった。

本日、番犬所から南の管轄へ赴き、ホラーを狩れと言う指令が出たのだ。本来なら南の魔戒騎士が行えばいいのだが、西の魔戒騎士の一夏に白羽の矢が立った。

理由は、一夏に多くのホラーを狩らせ、その成長を促そうと言うもの。これまでの魔戒騎士の中では最年少の一夏に寄せられる期待はそれなりに大きい。だが、一夏はそれをあまり気にしていない。

「話に聞くと、現れた奴は、非常に凶暴だというけど、心当たりは

ある？」

「ああ、やられた法師の傷と”号竜”の壊された具合から察すると、”ヴレイド”と見て間違いないな」

ヴリルが、ホラー”ヴレイド”について語る。

「奴は、人間の”怒り”を感じて、それに憑依する」

「……怒りに……」

「奴は、本能の赴くままに”怒り”を持つ人間を探し、それを食らう。頭のイッチまった奴だ」

濃い青のコートを揺らめかせながら、一夏は昨日、剣道の全国大会が行われた武道館へと足を踏み入れた。

「ヴリル。ホラーは此処から現れて、誰に憑依した？」

「ここで悔し涙をした学生の思念を感じる。決勝戦で、そいつに負けて、激しい怒りを持っていたようだな」

「……ここで憑依し、何人も喰らったようだ。まったく、何て奴だ」
ヴリルの言葉に一夏も同意する。いつもながら、ホラーの行動には怒りの念を感じる。だが、今回の相手はその”怒り”感じて取り付くのだ。

何もいえなくなるが、やはり、怒りを感じずには居られない。

「……ヴリル、そのまま何処に？」

「此処を出てから、入り口で魔戒法師と交戦。そのまま行っちゃった様だ。今晚、現れる。たぶん、取り付かれた奴が”怒り”を感じた人間のすぐそばに……」

一夏はすぐに、先日の予定を確認する。昨日はここで、剣道の全国大会の決勝戦が行われた。その決勝戦の対戦表には……

篠乃之 篇 西川 美登里

「……篇……」

まさか、こんな所で六年前に分かれた幼馴染の名前を聞くとは思わなかった一夏は、思わず声を上げてしまった。

「なんだ、一夏。知り合いか？」

「……私の幼馴染だ。まさか、ホラーが憑依したのは？」

「ああ、お前の幼馴染に負けたお嬢ちゃんに憑依した。お前の幼馴染を喰うつもりだ」

ヴリルの言葉に一夏は、今、筈が通っているであろう学校へと急ぐ。今の時刻は、午後五時半過ぎを回っていた。

中学 剣道部 道場

時刻は既に六時半を過ぎ、ほとんどの部員達が後片付けを始めている。

「篠乃之さんは、もう帰ったの？」

「ええ、あの子はいつもそうよ。用が済んだら、挨拶もなしに出て行くわ」

「天才の妹って言うから、もっと凄いと思ってたんだけど……」

「さあ、あれも一種の天才じゃないの？」

何気ない会話をしているが、ここで名前の挙がっている篠乃之に対して、あまり評価は良くないようだ。

「それでも、全国大会優勝だもの……結果だけを見れば、大したものよ」

一人の剣道部員に同意するように他の部員も同意を示すように、額く。時刻は夏の夕暮れ、少しずつではあるが夜の闇を迎えようとしていた。

夜の影に追従するように、一人の剣道着を着た少女が道場に近づく。その少女の目に一瞬だけ、“魔界文字”が浮かび上がり、つられるように口元が釣り上がった。

いつものことだ。誰も私のことなど気にかけてはいない。いや、私の日頃の行いが悪いからだろう……

六年前、姉が政府から重要人物として指定され、私は育った町を離れ、こつやって転々としてきた。

そこには、味方なんて誰も居ない。いつもあるのは、あの姉の妹と言う肩書きと政府の監視だけ……

もし叶うのなら、姉がISなど作らずに、誰にも迷惑をかけないように世界を巻き戻してほしい。

願わくば、私が好きだった初恋の人の居るあの場所へ私を帰してほしい。

いつも縋るのは、今、手元に持っている六年前に一夏が私にくれた”花のブレスレット”

六年も経つのだが、これを枯らしたくなかった私は押し花のようにして栞として使っている。これだけが、私と一夏を繋いでくれるもののようにして……

一夏は、男の癖に花が好きで奴だった。あさがお、ひまわり、あじさい、ゆり、桜などとあいつの隣にはいつも花があったような気がした。

最初に出会った頃は、私よりもかわいい女の子かと思ったが、あい

っは男だった。花が好きと知ったときは軟弱者とも言った。

” 箒は、どうして、花が嫌いなの ”

” こんな、軟弱なものの何処がいいのだ？竹刀で叩けばそれで散るだろう ”

” そうかな。ワタシは箒のそっちのほうが弱く思えるよ ”

” なんだとっ！?! ”

” だって、花はこうやって限られているけど、どんな場所にでもがんばって咲けるんだよ。がんばっている花を ” 力 ” が強いからって散らすほうの方が弱く思えるんだ ”

幼い頃の私は、今と変わらない餓鬼だった。一夏は、私よりもずっと強かった。育てた花を千冬さんや私に見せていた。そのたびに私は、 ” 軟弱なものを ” と言っていた。

分かれる間に、一夏が編んでくれた花のブレスレットは、私と一夏を繋ぐ唯一のものとしか思えなかった。この ” 花の鎖 ” だけが…

だから、私は好きだった人の名を呼ぶ。今は、遠く離れてしまった幼馴染の名を……

「……………一夏……………寂しい……………」

顔を伏せて、下校する箒を一夏は、物陰から見ている。ホラーが狙うであろう彼女のすぐ傍まで来ていたのだ。

すぐにでも声を掛けたい。だけど、今、声を掛けたら……

「一夏。ホラーは、あの嬢ちゃんじゃなくて、学校のほうに出たみたいだ」

「……わかった。少なくとも箒には危険はない。それでよしとする」
寂しそうな箒の背中を後にして、一夏はホラーが現れた学校へと足を向けたのだった。

箒

「……一夏？」

すぐ傍に、懐かしい感じがした。それは、私が焦がれていた一夏と同じ。

「……まさかな。居るわけがないものな」

夜が近づいてきたのか、近くの街灯に明かりがとまり始めた……

中学 剣道部 道場

突如現れた訪問者は、突然、剣道の試合を申し込んできた。

「試合をしましょう」

「ちょっと、今はもう練習時間も終わっているのよ。そういうことは、事前に……」

いきなり、妙なことを言い出した訪問者 西川に対して剣道部員は

断りを入れたのだが：突然、部員は倒れてしまった。

倒れた部員から、夥しい血が道場の床に広がり始めた……

「いやあああつ！……！！！」

「……何を騒いでいるの？お前達の剣はこういうものではないのか？」

その言葉とともに大きく飛翔し、手に持っていた竹刀で近くの部員めがけて切りかかったと同時にまるで、真剣のようにざっくりと切られてしまった。

血が飛び散り、部員達は恐怖に駆られ、我さきへと道場から逃げ出す。

「………あいつは、いない？まあいいわ………少しだけ、憂さ晴らしの相手になってもらいましようか？」

ニヤリと笑ったと同時に、目に魔界文字が浮かぶ。もはや剣道を嗜んでいた少女の姿はなく、それは、まさしくホラーであった。

ホラーは、すぐ近くで足を絡ませ、倒れてしまった数人の少女達に視線を向け、すぐに足を進めた。

恐ろしいものがすぐ近くまで迫っている恐怖感で、少女達は逃げ出すことができない。

「いや、いやっ！……！！こないでっ！……！！……！！！」

近くに落ちてあった竹刀を投げつけるが、まるで効果がない。あと二歩、三歩という所まで来たときだった。

「そこまでしてもらおうか……試合が不本意で、怒りを覚えるものだったとしても、それを理由に八つ当たりをしていいわけではない」

ここにホラーを狩るもの 魔戒騎士 織斑一夏が立った。

「……誰？織斑千冬？」

暗がりではあるが、その顔はあの織斑千冬に瓜二つのものだった。

「……すまないが、人違いだ」

と同時に、ホラーめがけて矢を三本纏めて放った。放った矢に対して、ホラーは鬱陶しそうに叩き落す。

「……………逃げろっ」

怯える少女たちに視線を向け、この場から去るように一夏は促した。

ホラーは、逃げる少女達に目を向けるが、間合いに踏み込んできた一夏の斬撃に対応すべく、その腕を鉋状の物に変えて迎え撃つ。

一夏は、斬撃を防がれ、さらに魔戒弓の刃が挟まれたことに対し、これを解除するために一旦、魔戒弓を手放し、大きく飛翔し、頭部めがけて強烈な二段蹴りを浴びせた。

「っ!!?!?!?!」

顎と顔面をけられたホラーは大きく仰け反り、挟んだ魔戒弓を放してしまった。放された魔戒弓を手元に戻し、腰元にある矢筒から、矢を取り出し、弓とともに構え放った。

放たれた矢は、胸部に命中し、ホラーの黒い血を噴出す。

「キッ、シャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！」

もはや少女の声の原型を留めていない叫びを上げ、血走った目と赤く染まった歯を剥き出しにして、一夏に敵対心を燃やしていく。

対する一夏は、表情一つ変えずに魔界弓を構え、矢筒からさらにもう一本の矢を抜く。

「まったく、花の女子中学生にそんな面をさせんな」

ヴリルの言葉に伝えることなく、一夏は矢を構えるが、それに合わせてホラーはその驚異的な力で駆け、一夏の眼前に迫ったのだ。

一夏の首を落とさんとすべく鉄を向けるが、一夏は構えるはずだった矢をその鉄の中心に突き立て。去り際に魔戒弓の刃を使い切りつけ、背後に回った。

一夏に対し、ホラーはその姿を変え、更なる敵対心を燃やしていくのだった。

その姿は、憤怒の貌を正面にした”悪鬼”そのものであり、身体のいたるところから炎が上がり、禍々しい突起物を肩に備えていた。

ヴレイドの姿が消滅したと同時に、鎧が解除され、一夏はヴレイドが消滅した場所のとある一点を見つめていた。

「く、悔しい……なんで、あんな奴に……どうして、あたしが……」

下半身を失い、まるで壊れたガラス細工のような姿をした西川 美登里の成れの果てがあった。まだ、怒りが収まらないのか、その目には憤怒の色が浮かんでいる。

「……私からは、何も言えない。だけど、お前がホラーに取り付かれた時点で、もうこれ以外にできることはなかった」

「なら、あんた。……あいつを一回負かしてよ。そしたら、私、満足するから……」

苦し紛れの台詞なのか、そのまま次の言葉を言うことなく崩れ、消えていった。

「……善処するよ。ただ、私は幕の前では、かなり甘くなっ
てしまっから……」

なんともやりきれない気持ちであったが、一夏はその場を後にした

……

そして、現在

「俺がこんなことを言ってもなんだが、やっぱりホラー狩りの最中に声を掛ける訳にはいかなかったもんな」

ヴリルは、少し一夏を責めるように言ってしまったことに対してフオローを入れたようだった。

「別に、ヴリルが気にすることではない」

誰の問題でもないと言うのが、一夏の考えである。篝の境遇は、周りのために酷く歪んでしまったことによる。

今まで、彼女をちゃんとみて、分かってあげられる存在が居なかったからだ。

だけど、今は……

「今は、私が近くに居る。篝に対して、何ができるかはわからないけど、一人で悩まないようにはしてあげたい……」

「……そうだな。人間ってのは、一人じゃ生きていけないっていうしな」

一夏は、自身がこれから過ごす寮へと足を踏み入れた。寮長室へ…
今は、姉は居ないがこれから、三年間はここで過ごすことになる。

部屋の内装は、それなりに金を掛けているのか、ホテルよりも豪華だ。ベッドの枕元に、魔戒騎士にとって見慣れたものが目に付いた

「姐さんが一緒じゃなかったのは、良かったな」

ヴリルの言葉の通りだった。ベッドの枕元に赤い封筒が置かれている。これは番犬所からの指令書だ。

魔道火で燃やし、指令の内容を確認する。

”その地での活動については、追って連絡を行う。ゲートが開かれる気配はないが、念のため陰我のオブジェの封印を行え

番犬所からは、こちらと繋がりのあるものの協力を要請してある。その者は近々、お前達の前に現れる”

「……番犬所もここには、それなりに気にかけていたのか」

「そうだな。やれやれ、協力者つてのは、どこのどいつだ？名前ぐ

らい知らせるよ」

「ヴリル。魔戒騎士ほどじゃないけど、それなりに闇に通じている名前に心当たりはある？」

「そうだな、一番に思い浮かぶのは、更識だ。確か今の当主が国家代表だっけな」

「よく知っているね。私もつい最近までは、その辺の事情は疎かったのに……」

「俺もだ。だが、勉強した」

どこでそんな知識を仕入れてくるのかは、分からないが、こういうところは頼りになる。

「後で更識について、調べてみようか？」

「ああ、だが、骨が折れるかも知れんぞ。更識は、確か隠し名だ、堂々と名乗っているなんてことは……」

今、この場にホラーは現れては居ない。だが、用心だけは怠ってはならないと思う一夏であった。

翌日

第

分かっていただけだが、剣道部に見学に行っただがあまり好意的ではなかったな。当然だ、あんな剣道、歓迎されるはずがない。

何処で知ったかは知らないが、私が篠乃之束の妹だと誰かが言いふらしたようだ。ここでも姉に振り回されるのかと思うと嫌気が差す。

また、怒鳴ってしまった。すぐに頭に血が上りやすいのは、私の悪い癖だ。いつもながら成長をしていない。

一夏は、今どうしているだろうか？結局、あの後、一夏の顔を見るのが恥ずかしくて逃げるように出て行ってしまった。

寮に住むと思うが、何処に住むというのだろうか？誰かと相部屋になるのか、もし来るのなら、私と一緒に……いや、男女、七日して同衾せずというではないか……

そんなことを考えていたら……

「おはよう、箒」

と、その一夏が話し掛けてきた。

「い、一夏っ!?!」

すこしデジャブを感じる光景に箒は、自分は相変わらず成長していないと思った。昨日もこんな風にやり取りをしていたのではと……

「お、お前、なんで、こんなところに居るっ!?!」

「何でって、私も朝食を取りにきたんだけど……」

昨日から思っていたが、一夏はオーバーな対応の箒に対して苦笑するしかなかった。

「な、何を笑う。一夏っ」

「いや、相変わらずだなんて……成長していないってわけじゃなくて、私の知っている箒なんだなって」

一夏の言葉に箒は、

「なんだ、そういうお前だって……変わっていないぞ」

「……そうかな」

何処かほにかむ様に笑う一夏は、少し照れているように見えた筈であつた。

「せっかくだから、一緒に朝食を取ろうか？」

「……ああ、別にかまわん」

筈

何故、一夏はこうも私の虚をつく形で現れるのだろうか？普通に言葉を返したいのだが、何故か喧嘩腰になつてしまふ。

こんな自分がものすごく嫌になる。もう少し、愛想よくできれば…
…普通の女子高生らしく…もっと…普通に…

今、朝食を二人並んで取っているが、一夏とは会話は無い。一夏も私に気を使っているのだろうか？

昔から、そつだ。一夏は、あの姉と違い必要以上に構うことはなかった。私の事を少し離れて見守ってくれと言った感じだった。

気になることといえば、明日には一夏は”クラス代表戦”をあのセシリア・オルコットと行うというが、大丈夫なのだろうか？

「一夏、お前は明日、ISでセシリアと戦うと言うが、大丈夫なのか？お前は、ISに触れて間もないだろう」

「私にも私なりの意地がある。少なくとも、ああいう輩には負けたくはないし、好き勝手には言われるのは不愉快だ」

少しだけ、一夏の口調がきつくなった。一夏は、こうだった。私が”男女”と虐められた時、いつも助けてくれた。男なのに”私”という奴で、私よりも虐められそうだったのに

誰かを心無い暴力で傷つけられるのが我慢できないのだろうか、一夏は……

女尊男卑もある意味、心無い力による抑圧だ。姉が作ったアレのせいでセシリアのような考えがまかり通っている。

私も一度、負けてしまえばと思う。男に……一夏ならと思うが、ISの国家代表候補生となると、付け焼刃程度の技術では対抗が難しい。

「なあ、一夏。私がISを見てやるうか？お前は、私達、”女子”と違い、ISには、あまり触れていないだろう」

私にしては、うまく言えたなと思う。

「確かにね。だけど、やれることはやった。私もこの一ヶ月は、ただ遊んでいたわけじゃないから……」

そう言っつて、一夏は左手首にあるブレスレットに目をやった。あれが一夏の専用機らしい。昨日の件では、驚いたが、なにより嬉しかったのは、一夏が私を気遣ってくれたことだ。

一夏の専用機は、間違いなく姉が渡したものだ。あそこで、姉の名前を出さなくてくれたのは、ありがたかった。

「そうか……なら、それだけのことをいうのなら、私にその”実力”を見せてくれ。同門としては、お前が負けるのは恥ずかしい」

駄目だ。これでは、威圧的ではないかと思う。もっと柔らかく言えない物かと……

「そうだね。筈は、実際に目で確認しないと納得してくれないよね。分かった、じゃあ、放課後に久しぶりに試合でもどうかな？」

一夏からの試合の誘いだった。正直、あの剣道は一夏には見せたくなかったが、相手が一夏ならば、あんな暴力的な剣は振るわないかもしれない。

一夏と離れ離れになったことによる苛立ちで私は憂さ晴らしの暴力に走ってしまったのだ。

でも、一夏ならば……私は、私の望む剣を振るえるかもしれない。何より、私は一夏と一緒にいたい。

「ああ、その試合受けてたとうではないか」

なあ、一夏。お前は今でも、花は好きか？好きならば、私達の”花の鎖”は決して途切れてはいないよな……………

私達は、これからは、ずっと一緒にいられるよな？

”泣かないで、篤。また、いつか会えるから”

”いつかって、いつだ？わたしは、これから遠くへ行くんだぞ。もう会えないかもしれないじゃないか”

”ううん、そんなことはないよ。ワタシ達のはなればなれになるかもしれないけど、いつかまた、会える日がくるよ、だから、これを”

幼い日に私の右手に結ばれた花で編まれたブレスレット。これは、私と一夏のいつかの再会を願って作られたもの……………

第参話「花の鎖」(後書き)

今までで、一番長かったかも……………

箒さんのイベントとして、あと 魔戒騎士としての一夏を書きたかったので 回想で戦ってもらいました。

やっぱり、難しいものですね。ヒロインを固定しようかと悩み始めましたが、一通り全員を出した後にしたほうがいいのか悩んでいます。

今の時点では、箒です。今回で、箒をデレさせたかったのですが、まあ、仕方がありません。次回に持ち越ししましょう。実を言えば、ここで剣道を行おうと思ったのですが、

次回も箒がメインで話が進みます。

この作品の一夏の声のイメージは、川澄綾子さんかなと思ってたり、どうですかね？ fateのセイバー役で有名です。予告を言っておきます。どうぞ……………

さて、試合の前の昔話も終わった。

そろそろ本番と行くか？二人とも、思う存分にやれ、ただし相手を想ってな

次回！「篠乃之 箒」

もう無理はしなくていい、甘えたいなら、甘えればいいさ。今まで辛かった分だけ……………

第四話「篠乃之尊」（前書き）

こんにちは、NAV AHOです。

最新話ができましたので、掲載します。

G A R R O第二話を見ました。鋼牙とカオルを久しぶりに見れてよかった。

それにしてもあの魔戒魚：結局カオルで落ち着いたんですか（笑）

前回の奴と違い、今回のホラーは業が深いなと思うයි。

女のホラーは、生々しすぎます。

そして、皆様。感想、ありがとうございました！！！！！！

それでは、どうぞ！！！！！！

第四話「篠乃之箒」

一夏と箒は、午前の授業を終え昼食を取っていた。授業では、本格的にクラス代表戦が明日の放課後に決定した事が伝えられた。

「なあ、一夏。本当に大丈夫なのか？あのオルコットは、あれでも代表候補生だぞ。本当に勝つつもりか？」

箒が一夏に対して、クラス代表戦の事を聞く。今朝も似たようなやり取りをしていたが、

「今朝も言ったよ、箒。私にも意地がある。ああいう輩には、負けたくはない。力で抑えられるのは不愉快だからね」

一夏は、今朝と同じように応える。箒は思う。この幼馴染は今時の”女尊男卑”の世界で、よくもまあこんな風に堂々と構えていられると……

(まあ、その外見では、女に絡まれることはないか……)

箒は、一夏を見る。幼い頃から、女のようにであったが、今もまさに”女”そのものだ。姉である千冬に瓜二つだ。

「……箒。何か、私に失礼なことを考えなかった？」

「な、何を言っているっ！?!?!一夏、お前も男ならば、その長い髪と華奢な身体は何とかならんのかっ！?!?!」

”そういう事を考えてたか” と言う具合に一夏は、箒が自分に対して思っていることを察した。

「別にどういふ外見をしようとは、関係はないよ。ただ、女っぽいからと言って髪を切るのは、それを認める事になる」

箒は、知らないが一夏は女でもあるのだ。女でもある故にそれなりに髪のご事は気にしている。

「……お前も自分の外見は承知しているのか」

一夏は、自分が女でもあるので、特に箒に返す言葉はなかった。この時、少しだけ、一夏が睨んだように見えたのは箒の錯覚だっただろうか？

「ねえ、あなたが噂の子？」

見たところ、上級生のようだ。1人ではなく、2、3人連れている。上級生は、一夏に注目している。

「本当に織斑先生に似ているわね」

人と会う度にこう言われる。魔戒騎士として活動している時にも姉の千冬と間違えられたことがあった。

「ねえ、代表候補生と明日、クラス代表を掛けて戦うって本当？」

「……別に賭けて戦うわけじゃない。ただ、私は勝って、オルコットのよような輩と同じになるのは、嫌なだけだ」

一夏は、勝つてもクラス代表にはならないようだ。負けるつもりは無いらしい。

「本気で言っているの？男が強かったのは、昔のことだよ」

ISが女性にもたらされた事により、男女間のバランスが崩れ、男と女で戦争をしたら三日で男は負けると言われている。

半ば失笑しているような上級生に対して、一夏は気にすることなく

「それは、ISがあることが前提の話だ。ISが無ければ五分ぐらいにはなる。それに……………」

一夏の脳裏には、自身が憧れる魔戒騎士達の姿があった。彼らなら、ISを装備した者達が相手でも負けることは無いだろう。

「以前の男尊女卑をやっていたことの仕返しをISの力で、無理やり押さえつけて、それを”強い”と勘違いしている、先輩方の助けはいらない」

「ちょっと、あなたっ！！いくらなんでも失礼じゃないのっ！！！！」

上級生は、一夏の態度に声を荒げた。理由は親切心で接したあげたのにそれをこのような反抗的な態度で返されるなど思いもよらなかったからだ。

「……………私にとっては、さっきの先輩の方が失礼だ」

一夏も分かっているが、ISの力「強い」と言う考えに反感を持っている。強いと言うことは、力ではなく、もっと別の意味を持っていることを知っているからだ。

「分かったわよっ！！！無様に負けても知らないからねっ！！！！」

ご立腹な態度で上級生は去っていった。一夏は何事の無かったようにお茶に手を伸ばした。

「おい、一夏。いくらなんでも、あれは言い過ぎではないか？」

先ほどのやり取りを見ていた箒が一夏に問いかける。

「……………それでもない。私は”強さ”と言うものをあんな風に言われるのが我慢ならなかっただけだ」

”だから言っちゃった”と言わんばかりの一夏に内心箒は、自分の心に陰が差すのを感じた……………

箒

この六年間で一夏に何があったというのだ？先ほどの一夏は、私と

は違う遠くを見ているように見えた。

その華奢な外見からは思えないほどの”強さ”を感じる。何故だ、何故お前は、そこまで強くなれたのだ？

昨日もオルコットに対して一步も引かなかった。それと比べれば私は弱い。昨日もオルコットが一夏の事を罵倒したときも擁護できなかった。

理由は明白だ。私がオルコットの”力”に恐れをなしたからだ。I Sの代表候補生となると私達の同じ年代の者達よりも”力”がある。その代表候補生に一夏は、臆することなく勝負を受け、それに勝つと言った。

”勝つ積もりだ。お前の”陰我”断ち切らせてもらうために”

私も聞きなれない”陰我”と言う言葉、オルコットの何を断ち切ろうと言うのだ？クラス代表など、問題ではないほどのものをお前は見ているのか？

今、お前が見ているものが何なのかは知らぬが、放課後の試合で見せてもらうぞ、一夏。

放課後

一夏と箒は、ともに剣道着を着て剣道部の道場に来ていた。

一夏自身、胴着を着るのは久しぶりではあるが、それを感じさせることの無い落ち着きを持っている。

その様子に箒は、

「一夏、随分と様になっているな。あれからも剣道は続けていたのか？」

「……まあ、剣自体は続けているよ」

返ってきた返事に対して、箒は剣道を続けていたと解釈したのか

「そうか、お前も続けていたのだな」

少しだけ上機嫌に防具を身に付けていく。歓喜にも似た気分には水を差すような言葉が箒の耳に入った。

”篠乃之さんよ。ここで試合をするんですって、織斑君と”

”えっ！？！織斑君、大丈夫かな？怪我とかしないかな？”

”千冬様の弟だから、大丈夫じゃないの？でも、篠乃之さんって、

相手をただ叩きのめすだけで有名だし”

いつのまにかギャラリーができていたのだが、その中には剣道部の部員の姿もあった。

箒

自分の評判が悪いことは理解している。分かりきっているのだが、それでも……辛い……

でも、一夏となら自分はあるな剣道はしない。一夏となら……絶対に……

二人は向かい合い、礼をし互いに剣を構えた。

先に動いたのは、箒だった。先手必勝と言わんばかりに突きを行う

が、一夏はそれを防ぎ、カウンターを返した。

返された一撃はそのまま箒を吹き飛ばしてしまった。

「うわっ!?!」

受身を取れずに箒は、道場の床に転がってしまふ。腰に痛みを感じつつも一夏を見ると、そこには何事も無かったように立つ姿があった。

「織斑君って…こんなに強かったの？」

「………凄い。息一つ、切らしてないよ」

私は、一体何があったのか分からなかった。先手必勝で突きを繰り出したと同時に一夏がそれを防いだと同時に私は衝撃を受け吹き飛ばされてしまった。

一体、何だと言うのだ。

何度、一夏に竹刀を打ち込んだらだろうか？一撃をまったく与えられない。競り合っても弾かれ、一本を取られる。

かつては一夏は私よりも強かった。でも私は、別れてからも剣を続けていた。そのおかげで全国大会で優勝できたのに、この差は何だ？

私は竹刀を取り、一夏に向かっていった。

「やあああああああつ！！！！！！！！」

叫びを上げ、竹刀を振りかぶった。振り落とされた竹刀を一夏は、何事も無く防ぎ、再び私は一本を取られた。

「……第。ただ、打ち込むだけでは、私に一撃は与えられない。もっと護りに気を配って……」

一夏は、私に何かを言っている。何をいうのだ、何事も攻めなければならぬ。攻撃こそ最大の防御ではないか。

「一夏つ、攻撃こそ最大の防御だ！！！！」

突きを可能な限り私は放った。それを、あいつは何事も無いように

避け、鋭い踏み込みと共に鋭い一閃で一本を取られてしまった。

まただ…一夏の動きがまったく見えない。攻撃が来るのは分かるのだが、それがまったく分からないのだ。

だけど、一つだけ分かったことがある。一夏は強い。私が思う以上に遥かに強くなっていた。

それは、それで嬉しかった。だけど…

「一夏…お前も剣道は続けていると言ったな。それだけの強さを持ちながら、何故私は、お前の名前を聞かなかったのだ？」

一夏が剣道部に居たのなら、当然のことながらその強さ故に名前を聞くはずだ。だが

「確かに私は、剣は続けている。けど……中学の頃、部活動はやっていない。だから、篤が私の名前を聞かなかったのは当然だよ」

一夏は剣こそは続けていたが、剣道部そのものには入っていなかった。そのことを知ったとき、私の中で何かが切れた。

「なんだとっ！…！！お前は、自分の”力”だけで、そこまで強くなったとでもいいたいのかっ！…！！！」

私も剣の師であった父と別れ、一人で訓練を行ってきた。そしてより実践的なものを求めて剣道部に身をおいた。

一夏も条件は同じなのに、この差は……これが、もって生まれた才能と言うものなのか？あの姉と同じく、お前も”持つべき者”と

いつのか？

「私一人だけの”力”ではない。箒と分かれた後にある方の元で”剣”を学んだ。その方と、その後に出会った人達が……私を”強く”させてくれた」

その言葉は、私が思っていた以上のものだ。自分自身の力だけではない何かを、知った上での……

何なんだ、私などでは足元にも及ばない。勝負になどならないと思っただのか、私の手から自然と竹刀が離れてしまった。

一夏

”……一夏、この魔戒弓を持ってみる。そして、これを使いこなすんだ”

私は、師の言葉を思い出した。私が師と出会ったのは、小学生の頃。まだ、箒と出会う前だった。

”なんだ？お姉さんが、元気が無いって、そうだな。女は”花”が好きだ。こいつを見せてやれ”

私に花の美しさと穏やかさを教えてくれた。そして……

”……一夏。人間ってのは、自分が思う以上に弱いんだ。どんな奴でも、弱さと脆さは持っている。だから、支えあうんだ”

今なら良く分かる。箒は、確かに剣道で全国大会を制するほどの”力”を得た。だけど、それは、苦しみや悩みに振り回され、そこから逃れようと相手を打ちのめすだけのものだった。

私に負けてしまった事に対して、箒は顔をうつむかせている。昔から箒は、落ち込んでしまうと顔を俯かせてしまう。

今の箒に半年前に見た後姿が浮かぶ。あの時は、声を掛けられなかったけど……

「……箒……」

私は箒に近づき、幼い頃のようにそっと彼女を抱きしめた。

篤

「……………篤……………」

気がつくとも夏が私を抱きしめていた。

「な、何をしているかっ！！！！？！！一夏っ！！！！？！！！！」

私は頬が自分でも真っ赤になるくらい熱くなっているのがわかる。

こいつは、幼い頃からこんな感じだった。言葉ではなく、行動で示すのだ。だからと言って、もう子供の頃とは違うんだぞ！！！！！！！！

「は、離せっ！！！！！！！！」

恥ずかしさのあまり私は、一夏から離れようと抵抗するが、一夏は私から離れようとはせず、抵抗するとより強くに私を抱きしめたのだ。

「離れたら、篤は私から逃げる。小さい頃は、嫌なことなことが遭ったら、いつもこうしてたよね」

幼いときから、私が落ち込んだり嫌なときがあったら一夏はこういう風に私を抱きしめてくれた。

両親が姉に掛かりつきりで、私は甘えたいときに甘えることができなかった。唯一、甘えることができたのは一夏だけ……

恥ずかしさもあるのだが、なにより、六年ぶりに感じる一夏の暖かさを感じていたかった。

それにこんな状態の私を一夏が放っておくわけもなさそうだから、私は自分の気の済むまで一夏に甘えることにした。

一夏

昔から、箒はこうすると大人しくなる。両親が姉の束さんにかかりつきりで箒は甘えたいときに甘えることができなかった。

道場で剣を教えている箒のお父さんと接することができる剣道に打ち込んでいた。私も姉さんの勧めでここで剣を学んだ。

その時から箒は、男勝りで口調と態度が厳しかった。それ故に男子からは”男女”と虐められ、口調ゆえに女子とは中々、打ち解けられなかった。

落ち込んだ箒は、両親に相談することができずに道場の裏でいつもうずくまっていた。

口だけでは、箒の気が晴れないことは幼いながら私は知っていた。花を見せたとしても。

”一夏：人間が人を傷つけるのは、その人の”温もり”を知らないからだ。だから、”温もり”を知ること傷つけようとは思わなくなる”

”人間は、忘れやすい生き物だ。だから、時々、温もりを思い出させてやれ。優しく抱きしめてやれ”

姉さんも私が寂しそうにしていたら、何も言わずに抱きしめてくれていた。だから、箒にも……

箒が剣道で相手を叩きのめすようになったのは、人の温もりという物を忘れかけただけだから……

道場でギャラリーが固唾を呑んで見守っていることに二人は気づかない。

「織斑君って……大胆……」

「篠乃之さん。幼馴染だからって、それはないよ」

「……男に抱きしめられているというよりも、あれってお姉さんに甘えているみたいなんだけど……」

後に箒は、クラスメイトや剣道部の面々に追及されることになるのだが、それはまた別の話である。

道場で試合を終えた二人は、寮へと戻る道を歩いていた

「なあ、一夏。少し遅れたが、六年前に私に渡してくれた”アレ”は覚えているか？」

箒は、自らが持つ”花のブレスレット”について一夏に聞く。

「私が箒に渡したブレスレットだね。まだ、持っていてくれたんだ。私も栞にして持っているよ」

一夏の言葉に、箒は嬉しそうに笑みを浮かべ

「そうか、そうか」

本人も何を言いたいのかわからないのか、そんな風に言葉を繰り返しただけだった。

「箒。夕食のときに、お互いに見せ合おうか？六年振りの再会だから……」

「そうだな。絶対に忘れるなよ」

箒

一夏は、私が思う以上に強くなっていた。力だけではなく、心も私
が思う以上に強く……

同時に思う。どうすれば、その”力”が得られる？どうすれば、強くなれるのかと……

私は未熟者だ。確かにある程度”力”は得たが、心があまりにも弱すぎる。

幼い頃のように一夏は、私を気遣ってくれ。だけど、私は、ただ一夏に護られるだけの女にはなりたくない。

私から一夏を抱きしめ、支えられる立場になりたい。一夏に遠く及ばない私は、本当の意味で”強く”になりたい。

いつかは、自分が一夏を護れるようになりたい……

だから、オルコットには絶対に負けるなよ。いや、お前が負けるはずがないものな……

ISという”力”で押さえつけるだけの者に、本当の意味で”強い”お前が負けるなど……

夕食の時、向かい合う二人の間に六年前と変わらない”花のプレスレット”があった。

それは、六年前に別れた二人の再会を願って作られたもの。六年ぶりに二人は再会を果たした。

第四話「篠乃之箒」（後書き）

書き終わった後で、色々とやっちゃった感がありますが、こんな感じでもいいかな。

うちの一夏は、ある意味男前です（笑）こういう事を人目を気にせずをやっちゃいますので……

……
魔戒騎士の皆さんは、基本言葉よりも行動で示しますよね、想いを

……
箒をデレさせるといった目的も達成したので良しとしますか。

……
今回は、いよいよセシリア戦ということで、セシリアの出番が増えます。此処のところオルコットでしか呼ばれていませんでしたので

……
今回、ヴリルが一言も喋っていません（笑）その代わり一夏の師匠を少しだけ、出しました。

……
女は男よりも強い。これが、今時の女の考えか？

まったく、ISってのは厄介だな。一夏、その考え、跡形もなく粉砕してやれ。

次回！「クラス代表決定戦」

蒼き牙 青い雫と今、対峙せん。

第五話「クラス代表決定戦」(前書き)

どうも、NAVAHOです。

いつもながら、皆様、感想ありがとうございました!!!

最新話ができましたので、掲載します。今回もかなりの難産でした
(汗)

牙狼は、今回も面白く”カ”について、改めて考えられる話でした。

今回のアクションを見ていて、生身でホラーとあそこまで渡り合える魔戒騎士は、生身でもISと普通に勝てそうと思いました。

ラストでは、久々に零もでてきて、これからの盛り上がりを楽しみな回でした。

それでは、どうぞ!!!

第五話「クラス代表決定戦」

セシリア・オルコット

織斑一夏。この世界で唯一のISを操縦できる男性。女性にのみ許された”力”を扱えるとは、不愉快ですわ。

それに男なんて、力に媚びるだけの卑しい生き物。このISが出る前は、男尊女卑で、腕力にものを言わせていたようですが、今やISにひれ伏している。

ISを扱える女性の中でも上の立場にある専用機持ちであるワタクシに対して、怯みもしない。

クラス代表には、ならないがワタクシに勝つつもりでいるあの生意気な男には、制裁が必要ですよ。このブルーティアーズで……

男なんて、所詮はワタクシの前にひれ伏すしかないんですわ……
あの人のように……

威厳も誇りも無かったあの人のように……

” xxxxxxxx?セシリア”

あの人が昔、ワタクシに何かを言っていたようですが、そんなこと忘れましわ。覚えていても、ワタクシにとって、どうでもいいこ

とですから……

クラス代表戦が行われる三日目の日もまだ上がらぬ早朝、一夏は学園から少し離れた場所で魔戒弓を振るっていた。

日課の鍛錬である。魔戒弓で大きく弧を描き、時には大きく振りかぶる。

「一夏…せいが出るな。あの生意気な小娘には、後れを取るなよ」
ヴリルが一夏に生意気な小娘こと、セシリア・オルコットの戦いについて言う。

「言われるまでもないよ、ヴリル。オルコットの”陰我”は、この私が必ず断ち切るさ」

「ああ〜、お前もとんだお人よしだな。あんな小娘のことにまで気を配ることなげ……」

「ヴリル。私はただ、魔戒騎士としての務めを果たす。ここに”陰

我”を生む要素があれば、それを封印、消滅させるのが私の使命だ」

一夏は、鍛錬を終わらせ、寮へと戻っていった。

「まったく、お前って奴は本当に生真面目な奴だぜ」

放課後

第三アリーナは、これまでにない熱狂に包まれていた。

理由は言うまでも無く、世界初の男性のIS操縦者 織斑一夏の姿を見ようと言うこと。その一夏とイギリスの代表候補生セシリア・オルコットとの試合を見るためである。

ピットに向かう一夏は、IS学園の制服、一夏のIS用のスーツは、ダイバースーツのようなものである。

身体のラインがそのまま出ており、首から下で出ている肌は無い。胸のところにはプレートと小さな機器のようなものがある。

プレートの内側には、ヴリルを収納するスペースが存在する。

「東さんには感謝だな。しかし、顔を出せないのは不満だ」

視界が見えないわけではないが、本人は顔を出してISの乗り心地を体験したいらしい。

「ヴリル。お前は、何をしたいんだ？」

「何って、ここにいる内は勉強だろう。これも勉強だな」

もしかしたら、自分以上にこの学園生活を楽しんでいるのではないかと思う一夏だった。

第三アリーナ・Aピットに着いた一夏を迎えたのは、姉の千冬、真耶、篝の三人であった。

「着たか、織斑。まだ確認はしていなかったが、お前の専用機を見せてもらっぞ」

教師として千冬は、一夏にISを展開するように促す。

「織斑君って、スタイルが良いんですね」

真耶がこの場で関係の無いことを言う。箒は、一夏の姿を見て顔を赤くして視線を逸らした。

箒

戦いの前に一夏に激を飛ばしたかったのだが………できなかった。
現れたのは、身体のラインにピッタリとしたスーツを着た一夏だった。一夏に私は見惚れてしまった。

華奢だとは思っていたが、奴の身体は”男”のものではなかった。
完璧な”女”のラインだったのだ。

肩幅は私よりはあるが、長身なために目立っておらず、ウエストも括れている。私よりも細いかもしれん……

あれだけの”力”がこの身体の何処にあるのだ。あの細腕に……あの華奢な身体に……

私は、目の前の一夏が眩しくて顔を赤くして俯いてしまった。

同時刻、Bピットではセシリアが自身のIS ブルー・ティアーズを展開しアリーナ上空に現れた。

彼女が展開したISは、青を基調としたドレスのようなデザインであり、彼女自身の美しさを全面的に押し出すものだった。

ISは女性のみが動かすことができるため、このように操縦者の美しさを押し出す要素が強いのだ。

セシリア

ワタクシの専用機 ブルー・ティアーズ。我が祖国イギリスが開発した最新鋭の第三世代のIS。

世界の中でも僅かしか、開発の目処が立っていないこの第三世代のISであれば、負けるはずがありませんわ。

あの男のISは、こういうものかは情報が入りませんでした、篠乃之博士の妹と剣道をして、それに勝ったと言っ噂ぐらい。

おそらくは、接近戦を挑んでくるでしょう。ですが、このブルー・ティアーズは遠距離射撃型。

近づくことができなければ、何もせずに落とせますわ。

ワタクシに口答えしたことを後悔させてあげますわ。それに誰が、代表に相応しい実力を持つかを分かせてあげますわっ！！！！！！

セシリアのISは、一組のクラスメイト達の姿を捉えていた。

彼女らは自分にクラス代表になってほしくないようだが、ここで”力”を示せば、認めざる得ないだろう。

Aピット

「オルコットは既に出たか…私も行く。蒼牙っ!!!」

左手のブレスレットを掲げると同時に、待機状態にあった蒼牙が展開する。

その姿は、蒼を基調とした鎧を全身に纏い、背中には、六枚の羽がマントのような状態で待機している。顔の上半分を覆うのは狼を模したバイザー。

誰もが目を引くのは、バイザーの後部に取り付けられた赤い長髪を思わせる”エネルギーアキュメーター”

赤の鬣を持つ蒼い狼。その姿に、千冬は少しだけ頬を引きつらせた
「……………束の奴め。私とそのデザインが嫌いなことを知ってのこと
だろうな」

蒼牙の姿は、一夏が魔戒騎士として鎧を召還し纏った姿に酷似しているのだ。違いは鬣を持っているぐらいである。

”さすがに、いつくんの鎧の造詣は束さんには、まねできないね”

とある男に完璧な造詣と絶賛された”魔戒騎士の鎧”。束もまた、騎士達の鎧の造詣を絶賛している。

「……箒、行ってくる」

一夏は、自分に視線を向ける箒に声を掛ける。

「あ、ああ。必ず、勝って来い」

バイザーのために、一夏の表情は隠れているが口元が笑っているのを箒は見た。前を見据えると同時に、背中の左右合わせて六枚の羽を展開して、ピットを飛び出した。

ピットから飛び出した一夏は、アリーナの地表に着陸し前方に浮かぶISを展開したセシリアを見上げる。蒼と青がそれぞれ対峙する。

「最後のチャンスですわ」

優越感たっぷりに一夏を見下ろし、

「そう、このまま戦えば、ワタクシの勝利は自明の理。今ここで謝

ると言うのでしたら、許して差し上げないこともなくつてよ」

対する一夏は、相手がいつでも戦闘に入れる体勢になっていることを察していた。

「初めから私をISでいたぶるつもりの人間がその口を言うか。何処までも耳障りな口だな、オルコット」

「相変わらずの減らず口ですわね。あなたには、教育、いえ、仕置きが本当に必要ですわっ！！！！」

一夏の態度に青筋を浮かべながら、セシリアは射撃態勢に入り、一夏にロックオンを定めた。

「このまま。お別れですわっ！！！」

大型ライフル スターライト MK?より、一夏日掛けて高出力のビームを放った。

一直線に向かってくるビームを見据える一夏は、

「……………来い、”雪片”」

右手にブレードを展開し、そのまま構え、踏み込むようにして迫ってきたビームを縦一文字で切り裂いた。

切り裂かれたビームは左右にそれ、そのままアリーナの地表で爆発を起こした。

後頭部の赤い鬘を揺らしながら、一夏はゆっくりと歩みを進め、雪

片の切っ先をセシリアに向けた。

「……オルコット。来るなら、本気で来るんだ。私は、慢心して倒されるほど甘くは無いぞ」

「そつだぞ、小娘。一夏と蒼牙を舐めんなよ。生意気な口は、今から塞いでやる。一夏、ぶちのめしてやれ」

パイロットスーツ越しからヴリルが声を掛ける。ちなみにヴリルの声は、セシリアには聞こえていない。

「す、少しはやるようですわね。ですが、これならっ!!!!!!!!!!!!!!」

高出力ビームを切り裂かれるなど予想もしていなかったのか、セシリアは半ば驚いていた。

彼女は、自身のIS ブルー・ティアーズ最大の武器である 第三世代用 兵器 BT”ブルー・ティアーズ”を展開した。

「踊りなさいっ!!!ワタクシ、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円舞曲でっ!!!!!!!!!!」

ビット型自立稼働兵器 BT”ブルー・ティアーズ”

機体の名前の由来にもなった4機のビットは、一夏に向かっていった。

ピットでは、蒼牙が展開した武器を見て千冬、真耶は驚いていた。

「せ、先輩。あれって、雪片ですよね」

「……ああ、束の奴め。一夏も一夏だ……私に対する当て付けか？
二人して……」

言葉こそは、憎まれ口だったが口調は穏やかだった。まさか、ここで自分が愛用していた武器を家族が使うとは予想をしていなかった。千冬も知っているが、一夏は魔戒弓という剣と弓の機能が一緒になった武器を使う。故にISでの戦闘もそれに準ずる物と考えていた。

（魔戒騎士ならば、ISが相手でも遅れは取らんと思っていたが、一夏を見る限り、その通りか……）

仮に一夏がISを展開していなくても、ISと互角以上に戦えたのではと千冬は思う。

弟である一夏が強いのは、姉としては嬉しいが、その強さがどのようにして得られたかを思うと素直には喜べない。

本来ならば、ISにも関わらせたくなかったのだ。それどころか、一夏はISが抱える闇以上に深い闇の世界に身を置いている。

だが千冬も今は、ISで一夏が如何にしてセシリアに勝利するかが気になっていた。そして、一夏がセシリアに何を見ているのかを……

(凄い、これなら勝てるぞっ!!一夏っ!!!!)

箒は、自身の想像を大きく越える強さを持った一夏に対して驚きと同時に憧れを抱いた。

(私もいつかは、一夏のように強くなりたい)

展開されたブルー・ティアーズは、一夏を取り囲み、一斉にレーザーを放つ。

放たれたレーザーを上空へ飛び上がることで回避し、すぐに自身の兵装である”弓”を出現させ、ビーム状の矢をセシリアめがけて放つ。

「くっ!!?!?!」

ブルー・ティアーズの操作に思考を取られていたためか、あるいは、一夏の異常なまでの早い反撃に対して虚を付かれた。

急いで回避するものの、矢はそのまま肩の部分に当たり、ダメージを受けてしまった。

焦ったセシリアに対して、一夏は冷静そのもの。セシリアが回避行動した時に、足元に見えるブルー・ティアーズを一瞥した。

ブルー・ティアーズは停止している。だが、すぐに一夏を追跡する。

「なるほどな、こいつらと本体は同時には動けないと言うわけか！

！！」

ヴリルが”わかったぞ”と言わんばかりに叫んだ。一夏は、ヴリルに言われるまでも無く察していたが……

「言われるまでもない。このまま、攻めさせて貰う」

一夏は、”弓”を収納し、雪片に切り替えて足元から頭上に現れた四機のブルー・ティアーズを見た。

空間のあらゆる場所から放たれるレーザーを回避するのは、並大抵のことではないが、一夏にとっては造作も無かった。

攻撃をあえて撃たせて、撃った後にできる隙を狙い、手近にいるブルー・ティアーズを薙ぎ払うかのように両断し破壊した。

「……まずは一機」

セシリア

な、なんですの!?!?!この男はっ!?!ワタクシのブルー・テイ
アーズを簡単に破壊するなんて……

こんなこと、今までにもなかったですわ。イギリスでの訓練では、
ブルー・テイアーズの前ではどんなものでも数分も持たずに倒され
たと言っのに……

本当に、ISを数時間ほど展開させただけですの?軽く見ても、国
家代表候補生に匹敵する”実力”ですわ。

ですが、これ以上やらせませんわっ!?!?!?!男に、負けるなんて、
これ以上の恥はありませんわっ!?!?!?!

セシリアは、残った三機のブルー・ティアーズを戻しライフルによる射撃に切り替えた。一夏とセシリアの距離はかなり離れている。

これを利用して遠距離から狙おうというものである。照準を一夏にあわせ、引き金を引く。フルオートにより連続でビームが発射される。

発射されたビームに対して、一夏は素早く回避し、一夏も遠距離用の”弓”に切り替え、自分を狙っているライフルの銃口目掛けてエネルギー状の矢を放った。

放たれた矢は一直線にセシリアの持つライフルの銃口を傷つけ、発射寸前だったエネルギーを暴発させ、破壊した。

破壊されたライフルは、セシリアの手から離れアリーナの地表へ落下する。

「っ!!?!?!」

歯を噛み締め、セシリアは三機のブルー・ティアーズを一夏に再び差し向ける。

迫ってくるブルー・ティアーズは、一夏による矢を警戒し、一直線には行かず上下左右に展開するが、一夏はその中の一機に狙いを定めて矢を放つ。

ここで一機に気を取られた隙に、もう一機で攻撃するのがブルー・ティアーズの基本戦術であるが、一夏はそれに嵌ることなく自身を攻撃するブルー・ティアーズに対して、雪片で切り伏せた。

同じく近くに展開していた残りのブルー・ティアーズを立て続けに切り捨てた。

「お前は、ISの”力”に過信すぎだ。その”力”が全てではない」

一夏は、ISの戦闘能力の高さは理解しているが、これを傘にして他を押さえつけることに対して反感を持っている。

女尊男卑に対しての”陰我”。力による支配、力のみが強さではない。”力”のみが、全てを思い通りにできるわけが無い。

「セシリア・オルコット。お前の”陰我”、この私がここで断ち切るっ!!!」

狼を模したバイザー越しに一夏は、ただセシリアのみを見据えていた。

バイザー越しに感じる強い意志をセシリアは、確かに感じていた。

四機のブルーティアーズはすべて破壊され、さらにはライフルもない。

近接戦闘の兵装はあるのだが、一夏相手では勝ち目は無い。バイザードで確認することはできないが、見入ってしまうほどの強い瞳をしているのだろう。

あの人とは違う。記憶の中のある人物が持っていなかったものを持っている一夏にセシリアは、魅せられていた。

「……一か八かは、分かりませんが、あの方には一矢を報いたいですわ」

一夏は、決定打を打つために必ず接近してくる。その時が唯一のチャンスだ。ほとんど使うことは無かったが、近接用兵装であるショートブレードを展開した。

だが、セシリアは一夏を待つつもりは無かった。そして、自身が嫌悪する男性に対する心境もまた変わっていた。

”××××だい？セシリア”

一夏

オルコットが近接武装を展開した。主力である武器がやられたからだろうか？いや、違う。先ほどの傲慢な雰囲気は無い。

自分の”間違い”に気がついたように見える。何か大切なことを思い出したことで……

仕掛けるつもりだ。蒼牙もブルー・ティアーズの背部分にあるミサイルを確認している。

気になることがあったので、蒼牙にサーチをさせたら確認を取ることができた。

仕掛けるつもりだろう。なら、私もそれに応えよう。

「一夏、”瞬時加速”を使うつもりか？」

「ああ、そのつもりだ」

「弓でやったほうが早いんじゃないのか？」

「いや、雪片でやる。オルコットも覚悟を決めて、私に一矢を報いる気だ」

「それに応えるつもりか。いいね、さすがは”男の子”」

「……うるさい。無駄口を叩くな」

セシリアは、ショートブレードを構え、一夏に向かっていく。

この展開にはアリーナ全体が驚いた。遠距離を基本とするセシリアがまさか接近戦を挑んでくるとは……

高速で接近してくるセシリアに対し、一夏も応えるように間合いを詰めるべく動く。

セシリア

あの方も、ワタクシに伝えてくれましたわ。ワタクシがあなたに一矢を報いる可能性があるならば、この残されたブルー・ティアーズのみですわっ！！！！！！

蒼と青が互いに向かっていき、激突する。振りかぶるブレードに対して、セシリアは

「掛かりましたわねっ！！！！ブルー・ティアーズは四機だけではなくってよっ！！！！！！」

背部分に取り付けられた実弾タイプのブルーティアーズを展開し、攻撃を加える。

一夏は怯むことなく、そのまま”瞬時加速”を行いミサイル二機を雪片で両断し、そのまま勢いを落とすことなくセシリアを切り付けた。

そのエネルギーは凄まじく、まさに一撃必殺の威力でセシリアのエネルギーを0にした。

「試合終了 勝者っ！！！！織斑一夏っ！！！！！！」

アリーナに勝利者の名を告げるアナウンスが響いた……

Aピット

真耶は、先ほどの試合内容を見て驚いていた。

「凄いです。あの一瞬で……織斑君は、本当にISを一ヶ月動かしていただけなんですか？」

「ああ、ISの起動時間に関してはオルコットに及ばないが、あいつはそれ以上に、私達の”想像を絶するモノ”を相手取っていた。他のブルー・ティアーズについても予想ができていたんだろう」

「なんですか？その想像を絶するものって？」

「山田君が気にすることは無い。アレは、ここには絶対に現れることはないのだから……」

その時の千冬は、何かに怯えているように見えた。それは、絶対に

遭遇したくない何かに対して……………

(……………そうだ、ホラーはここには、現れない。現れてはならない)

一夏が関わっている間については、悩むところだが、今は、クラス代表の事をどうするかが千冬の悩みだった。

「そんなことよりも、一夏はクラス代表を勝ってもやらんと言っていた。どうしようか、山田先生」

「ええっ、やっぱりそうですかっ!?!でも、やっぱり織斑君が代表になるべきじゃ……………」

真耶個人としては、一夏に対する評価は高い。人格、戦闘能力共にクラスの代表としては十分だ。

「勝ってクラス代表になることは、オルコットののように力で押さえつけてしまうことと同じと一夏は言っている。あいつは、首を縦には振らんな」

「ええっ、じゃあ、誰がクラス代表をやるんですか?他のクラスは既に決まっているんですよ」

涙目の真耶に対し、千冬はあの一度決めたら梃子でも動くことの無い頑固者を思うと頭が痛くなった。

「ああ……………一夏のことだから、何か考えがあると思うが……………あいつの考えは私の想像の斜め横に行くからな」

ピットのディスプレイには、ブルー・ティアーズを解除し、気絶し

たセシリアを抱える蒼牙を展開している一夏の姿があった。

「一夏、お前が勝つって信じていたぜ」

「…言つたら、遅れを取るつもりは無いつて…」

バイザーをつけている為、一夏の表情は隠れているので良く分からない。

「そこは、当然勝つと決まっているといえよ」

ヴリルもまた、顔を出していないので、外からは表情が分からない。

「ISで戦つた感じはどうだ？」

「ああ、鎧とは違い少し頼りないけど……ソウルメタルと違い、このままでも人に触れられる」

「ああ、そつだな。鎧と違って、そこはいいところだ」

一夏の腕には、ISが解除されたセシリアの姿があった。ソウルメタルで作られた”鎧”は、特殊な性質ゆえに魔戒騎士以外の者が触

れることはできない。

Aピットに戻った一夏は、待機していた医療班にセシリアを託し自身もまた、この場を後にすべく立ち去ろうと足を進めるが、

「織斑君……クラス代表のことなんです……」

真耶が戸惑いながら一夏に声を掛ける。

「山田先生。勝ってもクラス代表になるつもりはないと言ったはずですが……」

「ですが、クラス代表はやっぱり織斑君がなるべきだと……」

真耶は、クラス代表になってくれないかと一夏に問うが、一夏からの返事は”ならない”。

「おいつ、一夏。お前は、国家代表候補生に勝ったんだぞ。これは、凄いことだ。誰もが認めざるえないことだぞ」

篤が、真耶に加勢する形で一夏に言葉を掛ける。彼女もまた、一夏

のクラス代表就任を望んでいるようだ。

クラスメイトのほとんどが物珍しさから一夏を推したようだが、一夏の実力は本物である。これは事実なのだ。

千冬は、言葉を掛けないが本心では、クラス代表に就いてほしいと願っている。だが……

「オルコットを”力”でねじ伏せて、代表になったところで、彼女はこれからどうなる？」

一夏の意外な言葉に一同は、目を丸くした。

「一夏、オルコットが負けたのは、単にお前よりも弱かっただけだろう？これは、オルコットが望んだことだから、それからのことは”自業自得”ではないか……」

箒は、セシリアが自ら一夏に火の粉を振りかけて、それで返り討ちになったことは自業自得と言う。確かにその通りではある。

「織斑君の言いたいことは、分かりますが。オルコットさんは、少し行き過ぎた考えを持っていましたから、これを機に反省をしてくれれば……」

真耶もこれはセシリアにとっていい薬になったのではと思っている。

「たとえば、振りかかった火の粉を払うためでも、私は自分の言ったことは絶対に曲げるつもりは無い。それに……」

一夏は一呼吸入れて、三人を見据えた。

「オルコットをあのままにしていいいわけが無い。確かに”力”を誇示して、それを強要した。本人の自業自得とはいえ、これからの周りは彼女をどうみるか、分からないわけではないだろう」

自らを実力者と称していたが、いざ、勝負を試してみれば圧倒的な大差で敗北したものに、周りは何を見るだろうか？

クラスの中には、セシリアに反感を持っていたものはそれなりに居た。あのままでは、確実に孤立してしまう。

「私は、オルコットの傲慢を叩きたかっただけで、彼女を貶めるために戦ったわけではない」

その言葉に二人は、それなら尚更、一夏が就くべきではと思う。だが、一夏はクラス代表にならない。それを曲げるつもりは無いのだ。

「私は、言った。オルコットの陰我を断ち切ると……」

一夏は、言葉を切りその場を後にするように立ち去った。これから、一夏が何をやるのだろうか？

それが分かっているのは、姉である千冬。ただ一人。

(……一夏、お前は魔戒騎士として”陰我”を許すことはできないのだな)

医務室でセシリアは眠っていた。不意に、気配を感じ身体を起こすと入り口のところに腕組をし、壁に寄りかかっている一夏の姿があった。

「あ、あなたはっ！？！お、織斑さん、ど、どうしてここへ？」

目が覚めた途端に、出くわした意外な人物に対してセシリアは声を上げて驚いた。

「そうだね、話をしにきたと言っておくよ。セシリア・オルコットさん」

一夏の言葉にセシリアは、気が楽になるのを感じた。自分が罵倒し、オルコットと不快感を露にしていた人物が態々 さん を付けてくれたのだ。

「そ、そうですよ。あ、あなたに、まず、謝らなければなりませんわ。申し訳ありませんでしたっ！！！！」

セシリアは頭を下げ、一夏に謝罪を行う。

「いいよ、別に気にしては居ない。確かに、女が偉いと言われる中では、私の態度は生意気かもしれないが、それなりに意地があるから」

一夏は、それだけで十分だと言わんばかりに笑いかけた。これに対して、セシリアは自分が思っている以上に気を重くしないで良いと判断した。

「織斑さんは、とてもユニークなんですね。そうやって、ワタクシに言葉を掛けてくれるなんて……」

「ブラックジョークが売りのイギリスでも通用するかな？」

「ふふふ。ええ、織斑さんなら十分やっていきますわ」

三日前は険悪ともいえる関係だったが、今は和やかな雰囲気であった。対立の果てにISで試合をしていたもの同士とは思えないほどの……

「話だけど、私に、いや男性に対して、何故、オルコットさんは、あそこまで”嫌悪”を顕に？」

「ええ、話を聞いてくれますか？」

話を聞くと、彼女がイギリスの国家代表候補生になる数年前に、両親が列車事故で他界したという。

オルコットさんの母は女尊男卑以前より、たくさんの会社を営んだ成功者であり、由緒正しき名門の貴族の出だった。

父親は婿養子として、結婚をしたが、由緒正しき名門貴族である妻に対する夫は人の顔色ばかり伺っており、幼い彼女からは情けない男として見られていた。

家庭でもほぼ別居に近い形でほとんど顔を合わすことがなく、事故の日に限って一緒だったという。

彼女の元には、莫大な財産が残された。それを狙う親戚を称するハイエナのような人間だけが群がってきたのだ。

いわゆる金の亡者だ。古今東西、金は人間を狂わす麻薬と言われる。当然、金銭に関する”陰我”も存在している。

前にも相手をしたことがあるが、気持ちの良いものではなかった。そんな人間に付きまとわれると気が立ち、そんな男ばかりでは男性に”嫌悪”を持つのはある意味当然だ。

”女尊男卑”に関する”陰我”もそうだが、金銭に関する”陰我”

は、魔戒騎士の中でも一、二を争う忌々しいものだ。

親が残してくれた遺産を護るために、必死で勉強をし、その過程でISの適正値が高かったことで代表候補生としての訓練を経て、専用機 ブルー・ティアーズを任されるに至った。

だが、少しだけ気になることがある。幼少期から、男性に対しての不信感を持つ彼女が、男性である私と、仮に情けない男と正反対な存在であってもこのように和やかになれるだろうか？

知り合いに私と同じ”体質”の知り合いが居るが、その知り合いは、男女共に嫌悪しており、仮に親切なものとして接しても壁を作って拒絶してしまふ。

父親が原因らしいが、それだけではないはずだろう。ISによる”女尊男卑”も関わっているかもしれない。

「オルコットさん。本当に父親はそこまで情けない人物だったの？」

「そうですね。あの人は、いつも母の顔を伺ってばかりでしたわ」

父親の事については、はき捨てるように述べる。

「今のオルコットさんを見る限り、父親もオルコットさんが思うほど情けない人ではなかったと思うよ」

「ど、どういふことですか？今のワタクシとあの人が、どう関係してくると？」

「うん。私は”女尊男卑”に関する厄介ことは何度も見たけど、徹

底した考えの者は、何が何でも男を認めようとはしなかった」

脳裏に、それに関する”陰我”から出現したホラーの姿が浮かぶ。憑依された女は、自業自得で災難に遭い、それを男のせいにしていった。

「オルコットさんは、試合に負けたけど、私が勝ったのは、まぐれだと思っ？」

「そ、そんなはずはありませんわっ！！！！織斑さんの力は本物ですっ！！！！」

「今の世の中だと、まぐれで勝ったとか言われるんだけど、オルコットさんは私をこうして認めている」

「それが、何故、あの人と？」

「オルコットさんは、何か忘れていることがあるんじゃないか？父親のことで……」

師の言葉が浮かぶ。あの言葉は、人の悲しい性質を言っていた。

”悲しいかな、人は嫌なことも忘れるが、愛されていたことも忘れちまうんだ”

「ワタクシが忘れていること？」

「オルコットさんは、父親の負の面ばかりが目立っていたけれど、私とこうして話ができているのは、負の面だけではない所もあったはずだ」

私の言葉に、オルコットさんは何かをふと思い出したように目を見開いた。

セシリア

母は、強い人でした。厳しくも温かい人でした。それは、過去形。もう何年も前に事故で父と共になくなってしまったのですから……

思えば、母と違い、父は情けない人でした。

婿養子で母の顔色を伺ってはかりで、幼いながら思っていました。

”情けない男とは、結婚しない”と……

でも……本当に情けない人だったのでしょうか？

”どうしたんだい？セシリア”

思い出してみれば、人の良さそうで腰の低い人でしたが、ワタクシが母に叱られ、庭の隅で泣いていた時、真っ先に声を掛けてくれたのはこの人だったではありませんか……

ワタクシが落ち着くまで、母との間を取り持つてくれたではありませんか…

鬱陶しがっていた母でしたが、なんだかんだ言っただけで父を思っていたのではないですか…

織斑さん。今、あなたの試合中の言葉の意味が理解できましたわ。

”力”が全てではない。あなたは、ワタクシの傲慢を指摘していたのですね。

ワタクシは、イギリスの代表候補生。最新鋭の第三世代 IS ブルー・ティアーズの専属操縦者。故にこの力に溺れていたのですね。

それなのに、ワタクシは……、ISという絶対の”力”に溺れ、それを他に強要した。溺れていたが故に優しかった父を貶め、忘れてしまった。

だからこそ、あなたはワタクシに不快感を抱き、他の方々もワタクシをクラス代表に推さなかったのが分かります。

思えば”女尊男卑”の考えなど、あまりに行き過ぎていて、間違っただけではありませんか。

かつての”男尊女卑”は、男の方々がその腕力にものを言わせていましたが、それをISの力を得たからと言ってワタクシ達が行っているというわけではありませんわ。

「やっぱり、ただの情けない人ではなかったんだね」

「ええ、ワタクシは親不孝者ですわ。優しかった父親を忘れてしまふなんて…それどころか、貶めてしまつて……」

「優しかった父親なら、今、オルコットさんが思い出してくれただけで満足してくれているんじゃないかな」

「そうです……織斑さん。よろしければ、ワタクシをセシリアと呼んでくれませんか？ワタクシも一夏さんと呼ばせていただいても」

「構わないよ、セシリア」

「ありがとうございます。一夏さん」

その後、間もなくして一夏は医務室を後にした。残ったセシリアは、一夏の事を考えていた。

（織斑一夏。あなたは、まるで”騎士”ですわ）

日本で言う侍が当てはまりそうだが、セシリアが一夏に抱いたイメージは”騎士”だった。

誰かが間違いを犯そうものなら身を持って、その人のために剣すら握ると言う御伽噺にある存在。

故にもっと知りたい。あなたの事を……そして、あなたに近づきたい………

第五話「クラス代表決定戦」（後書き）

セシリアの女尊男卑ですが、原作もそうですが、情けない父親と正反対であってもそうそう認めないだろうと思って、試合の後に仲良くなるのは普通無いよなど、仮に勝っても、中々認めないとも思いました。

もしかしたら、父親の悪いところだけが目立っていて、良いところをセシリアが忘れてしまい、周りに影響されてあんな風になったのではと思い、こういう具合になりました。

次回予告をいつものように、入れておきます。それでは、では！！！！

IS学園、ここは陰我の色が濃く、いつかはホラーが出ると思っ
ていたが、

此処から出るんじゃないかと、まさか、この学園を目指すとはな……

一夏、絶対に近づけるんじゃないぞぞつ。

次回！「訪問者」

懐かしいあの子と再び、めぐり合う。

第陸話「訪問者」(前書き)

ええと、明日から少し忙しくなりそうなので、早めに掲載しちゃいます。

いつも感想、ありがとうございます。とても励みになります!!!

とうとうわけだ、てんてん!!!.....

第陸話「訪問者」

「だから、違うんだっ！！！僕は、何もやっていないっ！！！」

男は両脇を二人の警官に抱えられながらも、叫んでいた。だが、警官は聞き入れずに機械的に男を独房を突き飛ばし、そこへ閉じ込めた。

「待ってくれっ！！！！話を聞いてくれっ！！！！！」

男の言葉を見殺して警官は背を向けて去っていった。

「くっ、くそっ、な、何でこんなことに……」

膝を突き、男は自身の身に起きたことを振り返った。

偶々、会社帰りに百貨店へ故郷の家族への贈り物を買に行った際、そこで女に絡まれて、その女に呼び出された警備員に連れられ、ここへぶち込まれたのだ。

”女尊男卑”あのISという兵器のせいで、無条件で女は許される。たとえそれが理不尽なものでも、全て”男が悪い”とされる。

男は、この独房で絶望していた。ここに入れられたら、自身は終わりだ。裁判でも有罪は確定。

先の未来は、光すらなく絶望的なのだ。そこへ……

”此処から、出してやろうか？”

「だ、誰だっ!?!誰なんだっ!?!」

不意に声が独房に響き渡った。

”理不尽な理由で、此処に閉じ込められ、誰もお前の言い分を聞かない”

「……………」

その通りだった。誰も話を聞いてくれない。

”哀れなお前に力をやろう。力が欲しいのならば、応えよ”

「ああ、僕は力が欲しいっ!?!この酷い世の中を変えるぐらいの力がっ!?!」

”ならば、与えよう。代価は、お前の”魂”と”肉体”だっ!?!”

独房の隅の影が大きくなり、男を大きく覆い尽くす。影の中心より、”悪魔”が現れた。

数分後、独房に男の姿は無かった……………

その日の夜

「そのあなた、ちょっとこれ持ってきてくれる」

町で女が男に対して荷物を持つように命じる。男と女はこれといった関係のない他人である。

「なによ、逆らう気。ちょっと、その人、この人を警察に……」

女は、近くを通りかかった別の男に命令をするが……

男は、女に対して嘲笑うように……

「誰が何をするんだ？お前は別に何も偉くはないのに、何故、そんなことをしなくちゃいけない」

「あなた、男の癖に女に逆らうつもり？あなたも警察に突き出して……」

そう言おうとした時、男に変化が現れた。目に奇妙な文字が浮かんだのだ。これを見た女は気味悪がり、その場から離れようとするのだが……

先ほど、絡んだ男が女の行く手を阻んだのだ。

「ちょっと、あなた。なに考えてるのよ。そこ、どきなさいよっ！
！……！！」

だが、絡んだ男はまるで聞こえていないかのように黙っている。女

「今、一年でクラス代表が決まっていけないのはこのクラスだけだ。誰か、やりたいものは居ないか、それとも推薦は……」

千冬が、クラス代表について話を進めていた。

「あの織斑先生、織斑君は代表にはならないんですか？」

クラスの一人が手を上げて、千冬に聞く。

「ああ、こいつは、勝つてもやるつもりはないようだ。少しぐらいは、融通が利けないのか、織斑」

千冬は目の前に居る 弟 一夏に問いかけた。

「織斑先生。三日前にも言いましたけど私は、勝つてもクラス代表にはなりません」

「でも…私は、織斑君について欲しいです」

教卓には、担任の千冬と真耶の二人がクラス代表について一夏に聞いている。

「……私は就くつもりはありません。ですが、私が推した者ならば、文句はないですよね。先生」

この言葉にクラス全体が静まり返った。突然の言葉に意表を付かれたのだ。

「私は、クラス代表にセシリアを、セシリア・オルコットを推します」

「えええっ！！！」「」「」「」「」「」「」「」

「い、一夏っ！！！！何を言っているんだっ！！？！！お前はっ！
！？！！！」

驚くクラス全体を代弁するように筈が立ち上がった。

「そ、そうですねっ！！！い、一夏さん、な、何故ワタクシなどを
推すんですか！！？！」

セシリアのまさかの一夏の行動に驚き立ち上がってしまった。

「お前らっ！！！まずは、落ち着けっ！！！他のクラスの迷惑だ
っ！！！！」

千冬が騒がしくなった教室を静めるために怒声を上げる。流石は、
ブリュンヒルデ 鶴の一声で黙らせてしまった。

全体が静まったのを見てから、千冬は一夏と向かい合う。

「織斑、オルコットを何故、推す？まさか、負けた方に責を負わせ
るつもりではなかるうな」

少しだけ目をきつくして千冬は、一夏に問う。

「私がセシリアと決闘を行ったのは、私なりの意地のためであり、
彼女を貶めることではない」

一夏も目をきつくして千冬に言葉を返した。二人の睨みあう様は、まさに圧巻である。瓜二つの顔が互いに睨み合っているのだ。そんな二人に挟まれた真耶は涙目である。

「あの時のセシリアは、行き過ぎた考えを持っていたけれど、今の彼女は間違いに気づき、それを正している」

その言葉にクラス全体がセシリアに視線を向けた。その視線に対して、セシリアは思わず

「はい、情けない話ですが、ワタクシは国家代表候補生の肩書きと専用機持ちという事で、自分自身の”力”に酔っていましたわ。

ワタクシにも、優しいお父様が居たのにそれを、情けないと言って貶めてしまい、あるうことが男性の方々には大変な無礼を働いてしまいました。

皆様にも、ご家族の方々がいらっしやいますのに、以前の失言は、本当に申し訳ありませんわ」

頭を下げて、謝罪をしたのだ。この行動には、担任、副担任はもちろんのこと、クラス全体が本当に驚いていた。

「確かにセシリアは、皆に不快な思いをさせてしまったけれどもそれに気づき、正しているのならば、これ以上に無い代表は居ないと思う」

一夏の言葉にクラスメイト達は納得せざるえないのか、納得がいかないのか微妙な表情だった。

「今の世の中は、女尊男卑のせいで、間違ったことが通っている。でも、それを自身の身で知ったのなら、その間違いを正すことだってできる」

「い、一夏さん。わ、ワタクシなどに、そのようなことが……」

一夏が自身を評価していることにセシリアは嬉しさと戸惑いを感じていた。

一方でクラス全体は、一夏が推すのならばと……

「織斑君が言うのなら……」

「がんばってよ、セシリアさん」

「応援するから」

まだ尾を引いているのか、クラスメイトの声は微妙な感じであったが…以前と違って、好意の色があった。

「できるさ、私は”間違いを犯し、それを正した人間”をそれなりに見てきた。だから、セシリアにも……」

弱気になりそうだったが、セシリアはここで弱気になってはいけな
いと思ひ、

「わかりましたわ、このセシリア・オルコット。クラス代表の任を立派に果たしてみせますわ」

箒

一夏の奴。まさか、オルコットを推すとは……アレほど、不快感を露にしていたのに、よくもあんなに仲良くなれたものだ。

どうやって口説いたかは知らぬが、まさかと思うが、お前は私と離れている間に”女誑し”になったのではないよな？一夏……

”箒…どうしたの？今日は、凄く絡んでくるんだね”

”な、何を言うかつ、お前がオルコットに掛かりつきりで私に構ってくれないからだろ”

”ふふふ、箒は焼餅焼きだね。じゃあ、こっちへきて”

”今日だけは、私だけの……”

”箒、声が小さくなっているよ”

”今日だけは、私だけのお姉さまだ。一夏”

な、なんだ？この光景は……

何故、一夏がお姉さまなのだった?!?!それに何故、私が甘えている?!?!?

あっちへ行けっ!!!あっちへ行けっ!!!

一夏は男だっ!!!!!!お姉さまではないっ!!!!!!何を考え
ている、篠乃之箒っ!!!!!!

箒は必死でその光景を追い払おうと頭を必死で振っていたが、それを無視して千冬が、

「クラス代表はオルコットに決まりになるが、異存は無いか?」

千冬がクラス全体に確認を取る。皆も異存が無いのか頷く。

「でも、織斑君がこのままというのも勿体無いですよね」

「そうだな、織斑。お前は、これからクラス代表補佐になれ」

突然、話を振られた一夏は

「もしかして、それはセシリアを推したのならばそれなりに責任を取れと言つことですか？織斑先生」

「そつだ。お前はオルコットをそのままにはしないつもりだったんだろ？」

千冬の言葉に、少しだけ目を逸らしながらも頷いた。

「よし、皆、織斑はクラス代表補佐に就く。これについては、依存は無いか？」

「……………ありませ〜ん……………」

打ち合わせた様に全体が唱和する。一夏は、この乗りの良さに少しだけ引いてしまった。

「一夏……………いい響きだよな。クラス代表補佐」

ヴリルが、一夏にしか聞こえない声で話しかけた。 ” 喋るなど言つたはずなのに………… ” と内心、イラついた。

「い、一夏さん。ワタクシを、いえ、クラスを支えてくださいますか？」

セシリアが頬を赤くして、一夏に尋ねた。

「こうなってしまった以上は、私も全力でクラスを支えるよ」

一夏もクラス代表補佐として、クラス代表をクラス全体を支える事を心に決めた。

「お、おいつ、待てっ！！！！オルコット、貴様、さつき、自分を支えてっって言わなかったか！！?!?!」

箒が聞き捨てならないことをセシリアが言ったことに対して、突っ込みを入れた。

「いえ、ワタクシは何も言っておりませんわ。一夏さん……よろしければ、ワタクシとISの訓練をお願いできますか？

近接戦闘に関しては、ワタクシは一夏さんと比べれば、まだまだですし……」

セシリアは、ピットに頼りきっていた戦いもそうだが、いざと言うときのための接近戦も重要と考えての提案だった……

「その必要は無いっ！！！！！！態々、お前のために一夏の手を煩わせる必要はない！！！！！！」

箒に青筋が出ているのは、気のせいだろうか？

「ここは、専用気持ち同士の方が効率的ですわ、篠乃之さん」

クラスで専用機を持っているのは自分と一夏だけをアピールするセシリアだが、ここで担任からのありがたい”拳”を頂いてしまった。

「痛っ！！！！！！」

「アウチっ!?!」

セシリアと箒が頭を互いに抑える。

「何を争っているかっ!?!ここに居る限り、お前たちが、どんな肩書きを持っていようとモトヨッコだ!?!?!?!代表候補生も一から、全て学べっ!?!?!?!」

担任である千冬の言葉に二人は、黙り席に着くしかなかった。こうして、一組の代表は セシリア・オルコットに決定した。

一夏

セシリアからは、ISの訓練に誘われた。私としては、蒼牙を動かしてまだ一ヶ月程しかたっていないので、できる限り訓練は行っておきたい。

束さんからは、一応教えてもらったが……

” いったくん、ズガンンって感じに ”

” ポンポーンって、飛んでみて ”

” いっくん、グツと行く感じで ”

” ババっという感じで武装を展開して ”

正直言って訳が分からなかった。一応、姉さんにも教えたといっただけけれど、姉さんも同じ感じだったのだろうか？

今は、SHR中だから後でセシリアに私からお願いをしようかな。

時刻は、夕方の七時を回ったところ、寮の食堂では一組のメンバーに
よる……

「セシリアさんとクラス代表就任と織斑君のクラス代表補佐就任、
おめでとう！！！！！！！！！！」

「…………おめでとう…………」

パーティーが開かれていた。

クラッカーが鳴り響き、その中心に居るセシリアと一夏をたくさん
の女子が祝っている。

一組のメンバーは、ともかく他のクラスの人達の姿も見える。

「これから、クラスも盛り上がるよねえ」

「織斑君が、クラスを支えてくれるんだよ、この一年が凄く楽しみ
だよ」

「ラッキーだね」

「ほんとほんと」

クラスメイトの騒ぎようにセシリアは、笑みを浮かべているが、一
夏の表情は少し硬い。

「一夏さん、もう少し、にこやかにしてくださいな。綺麗な顔が
もったいないですわ」

「セシリア。私は、こういうのが少し苦手だな。戸惑ってしまって
あれほど、堂々としていた一夏がこのように戸惑うと思うと少しお
かしかった。

「うふふふふ、一夏さんにも苦手なことがあるんですね」

「ああ、少し情けないかもしれないが……」

「フンっ、人気者が何を言っている」

一夏の反対側になるように、箒が現れた。手に飲み物を持っていて、むりやり一夏に手渡す。

「あら、箒さん。無理やりはよくないですよ」

「ふん、これが私のやり方だ」

意気地になっているのか、箒は一夏がセシリアと仲良くなっているのが面白くないらしい。

「セシリア、箒には箒なりに私を気遣ってくれているんだから」

ここで一夏が、箒に助け舟を出す。箒は、少しだけ機嫌を良くし、

「そつだ、これが私のやりかただぞ。オルコット」

そんな三人に近づくボイスレコーダーを持った上級生が近づいてきた。

「はいはい、そこ盛り上がってるところを悪いけどインタビューいかな?」

名詞を差し出し、「新聞部副部長 黛薰子」と書かれてある。

「では、さっそくだけで、クラス代表補佐の織斑君に特別インタビューをおねがいします」

「……………」

正直、一夏はこういうのが苦手なために少し戸惑ってしまった。

自身がISを動かしてから、マスコミや各国の上層の人間が押しかけてきたが、一夏はこれらから、逃れるべく様々な知り合いの家を転々としていた。

一ヶ月ほどは、束のところでISを学び、そのあとの一ヶ月は、閑岱を含めた魔戒騎士達の元やそれ以外の知り合いの元にお邪魔していた。

自宅には、マスコミが居なくなるの見計らって帰っていたが……

「一夏、情けないぞ。たかが、インタビュー如きで」

「箒、私はこういうのには、慣れていないの」

そんな二人に構わず薫子は、

「ずばり、クラス代表補佐になった感想をどうぞっ……!」

マイクを差し出された一夏は

「ええ、私の力の及ぶ力のかぎり、代表のセシリアとクラスの皆を支えていけるようがんばりたいと思います」

「おおっ、男とは思えない、セクシーな声っ……!」

薫子は、一夏の声を聞いてボイスレコーダーだけでは、男だとは分からないなと思った。

「一夏、お前はいつになったら声変わりをするのだ？」

「……いや、私の声の事を言われても……」

篤の言葉に一夏は、少し困ってしまった。どんなに頑張っても自分は、低い声が出せないのだから……

「まあ、そこは置いておいて、もっと他にはないの？ 学園唯一の男子だからさ、この学園の女子は”俺の物”とかさっ」

「なっ、なんて破廉恥なっ！！！！」

「あなたには、聞いてないから、少し静かにしてね」

一夏にインタビューをしているのだが、何故か篤が反応することを鬱陶しく思ったのか薫子は、そんなことをのたまいました。

「まあ、この辺は適当に捏造しておくことにしてとにして、次はセシリアさん、代表になった感想ちょうだい」

「ワタクシ、こういったコメントはあまり好きではありませんが、代表になったからにはしっかりと役目を果たさせていただきますわ」

「なるほどね。噂に聞いた印象とは随分と違うわね。もっと、偉そうに言っちゃうかと思ったんだけど」

「どんな噂かは、わかりませんが、ワタクシが変わったのなら、それは一夏さんのおかげですわ」

セシリアの言葉に薫子の目が妖しく光った。一夏は、何か良からぬ

ことを思ったが、口には出さなかった。

「なるほど〜、織斑君に惚れたからってことね」

「なっ、ななななな……」

薫子の言葉に、セシリアは顔を赤くしてテンパってしまっている。

面白くなさそうに箒は、一夏とセシリアをじと目でみる。

「とりあえず、写真を撮りたいから、クラス代表補佐の織斑君とクラス代表のセシリアちゃん、並んでもらえる？」

「なにっ!?!」

箒がまるで仇に会ったかのような凄んだ目で薫子を見る。

「注目の二人だからね、ツーショットもらつよ、握手とかしてくれるといいかもね。何なら、肩でも組んでもらっていいからさ」

「だめだっ!?!?!それはだめだっ!?!?!」

箒が一夏とセシリアの間に割って入るように抗議を行う。

「そっだ、そっだっ!?!」

「織斑君は、皆を支えてくれるから、共有財産だから、独り占めはだめーっ」

クラスメイトの反応にセシリアは残念そうだったが、ツーショット

ならと言つ事で納得した。

「じゃあ、握手でいいね」

これならいいと許せるのか、箒をはじめとしたクラスメイト達も了承した。

「それじゃあ、撮るよー。35×51÷24は？」

「……74・375」

一夏は、何故、この掛け声なのか不思議に思いながらも応える。そんな一夏の思惑をよそにデジカメのシャッターが切られた。

気がつけば、ツーショットではなくクラスメイト達が二人の周りを囲っていて、集合写真になっていた。

「ちょっと、ツーショットではありませんのっ!?!」

セシリアの声に対して、

「いいじゃない、クラスの思い出ってことで」

「そうそう、思い出よ、思い出」

皆でセシリアを丸め込めるようなことを言っており、セシリアは何も言い返せなかった。

かといって、一夏も一夏でどう言っているのか分からないのか、苦笑いを浮かべていたのだった……

一夏

すまない、セシリア。私はこういふとき、どうすればいいのか、分からぬ。

思えば私は、こういふ風に集まって騒ぐといふことは、ほとんどしなかつたな。

私とセシリアのために、パーティーを開いてくれているのは嬉しいのだが、この気持ちをどう伝えればいいのだろうか？

箒も箒で楽しんでくれてそうだし……

パーティーは、その後も盛り上がりを見せ、一組だけではなく他の組の者も加わって更に盛り上がった。

セシリアは、完全にパーティーの中心として楽しんでた。

一夏も一夏で中心であったが、こういうのが苦手なのか時折、席を外して気を休めていた。

この時も少し席を外していた。

そこへ、仕事を終えた真耶が一夏の元へやってきた。

「織斑君、楽しんでいますか？」

「ええ、こういうのは初めてですが、まあ、楽しんでます」

「そうですか、それなら良かったです」

真耶は笑みを浮かべて、一夏に応えた。

「そういえば、織斑君。さっき、妙な人からこれを織斑君にとって…」

真耶は思い出しように一夏に赤い封筒を手渡した。手渡されたのは、赤い封筒”番犬所からの指令”だった。

「おい、一夏。何だ？その悪趣味な封筒は」

筈は、一夏が手に持っている封筒に対して、不機嫌な目を向ける。

「箒、悪いけど、用事ができたから、席を外すね。山田先生、このことは皆に言っておいてください」

二人に断りを入れて一夏は封筒を取って、そのまま食堂から抜ける。箒も着いていこうとするが、

「……ここから先は箒の関わる所じゃないから……」

「な、何を、不純異性行為は……」

自分を拒むような一夏に対して、箒はムツとするが、一夏の目を見てしまった。

その目は、彼女が全く知らない一夏の姿だった……

箒

私は、一夏を問い詰めることができないまま、その背を見送ってしまった。

あの目を見てしまったのでは、何もいえなくなってしまふ。私達が離れて、六年。

一夏の身に何が起きたんだろうか？あの一夏は、少しだけ怖かったな。

お前は、変わらなかったはずだよな。そうだよな……

「おい、篠乃之。一夏は何処に行った？」

気がつくのと千冬さんが話しかけてきた。意外だ、こういう集まりには来ないと思っていたのだが、

「はい、用事ができたからって何処かへ行きました。変な赤い封筒を持って……」

「赤い封筒だと……」

その時の千冬さんも一夏と同じく私の知らない表情だった。酷く狼狽していた。

すぐに一夏を追うように千冬さんも食堂を後にしてしまった。

一体、何があったんだ？この六年の間に、あの姉弟に……

一旦、部屋に戻った一夏は、魔道火を使い、指令書を炙る。

”女尊男卑”の陰我より現れしホラー。その発端である”IS”を破壊せんとすべく、その地を目指す。これを速やかに殲滅せよ。ホラーの名は、レギオン”

「レギオンだとっ！?!、こいつは厄介なのが来るぞ」

ヴリルが声を上げて驚く。

「レギオン？どういう奴なんだ？」

「ああ、こいつは現れたときは一体なんだが、人間に憑依すると憑依した人間と似た考えを持つ奴を自分に取り込み、巨大化、もしくは、そいつらを元に増殖する」

「となると、厄介だね。もしかしたら、このIS学園そのものを餌場に、いや、それよりも酷いか……」

「それに、取り込んで巨大化するだけじゃなくて、そいつらと群れることもある」

「早いうちに倒していれば……過ぎてしまっただけじゃなく、そいつらは無い」

ね

「仕方ねえさ、この世情は騎士も法師も人手不足だ。これで二度目だな、巨大ホラーと戦うのは……」

「ああ……分かってる」

一夏は、戦用の服に着替え、魔戒弓を持ち迎撃に向かうべく部屋を後にしようとした時だったが……

「一夏っ！！！何処へ行くつもりだっ！！！！」

いつの間にか、入り口には部屋の同居人であり、姉の千冬が立っていた。走ってきたのか、少しだけ息を切らして……

「何処つて……ホラーを狩りに……」

一夏は、何気ないように言葉を返した。

「何故だっ！！！！お前は、もうこっち側だろうっ！！！！もう向こうに関わる事はっ……」

千冬は思わず一夏の目を見て黙ってしまった。その目は、彼女が最も嫌う目だった。闇を生きる魔戒騎士の目を……

「前にも言ったけど、私はやめるつもりはないよ。だって、いまさら、全てを忘れて生きるほど、器用じゃないから……」

一夏の目は、邪魔をするなら、例えあなたでもと言わんばかりの”殺気”すら秘めていた。その目を直視してしまった千冬は、何もい

えなかった。

様々な修羅場を越えてきた彼女であっても、苦手なものを受け入れがたいものは存在する。彼女が苦手なものそれは、護るべき存在である”一夏”がもつ魔戒騎士の目である。

受け入れがたいものは、ISですら滅ぼすことの適わない魔獣”ホラー”。

「……………必ず、戻るから……………話は後でもできるよね。姉さん」

すれ違いざまに一夏は、千冬に声を掛け、彼女に背を向ける形でこの場を後にした。

一夏が去った後、千冬は膝を突いて崩れた。俯いた顔は、悲しみを浮かべていた。

千冬

何故だ…何故なんだ、一夏。どうして、お前は、そうまでしてホラーと戦うんだ。

お前は私が護る。だから、何も気にせず、穏やかに日常を生きてくれ。そう願っていた。

かつて、私と束は、お互いの大切なもののためにこの世界を変えた。

私の大切なものが一夏。一夏は、他の人とは違う悩みを持って生まれた。男でも女でもない心と身体を持って……あの時の社会なら一夏は半端者として、男達から下に見られていたかもしれない。

だからこそ、一夏にとっても暮らしやすいようにと私は、束の作ったIS”白騎士”を駆った。

だが、世界は思い描くようにはならなかった。その最もたるのが”ホラー”の存在だ。

私達は、あのとき以上に”陰我”と言うものを生み出し、ホラーにとって都合の良い世界に変えてしまった。

そのために一夏は……魔戒騎士に……

影ながら、人々のために戦うことは、立派なことだとは思いますが、あの戦いだけは受け入れることができない。

一夏が、私の前から消えてしまうのが恐ろしい。一年前、初めてホラーと出会い、戦いの場に居合わせた私は、悪夢をみたのだから……

”ウワアアアアアアアアアアッ！！！！！！！！”

蒼い鎧を纏った一夏が変化した。獣のように咆哮し、禍々しく変化し、その場に居たホラーを引き裂き、周囲を破壊始めたのだ。

そのときに見た、鎧越しにみた一夏は……

”ああ、一夏っ！！！！一夏っ！！！！！！”

一夏を止めようとISを展開したが、あの男に止められてしまった。

”よせっ、お前が行っても何にもならん”

白いコートを纏ったそいつは、私を押しつけて、禍々しく変化した一夏と向かい合う。

”何故だっ！！！！他人のお前に私の一夏が分かるものかっ！！！！！！”

”うるさいっ！！！！お前が、一夏の緊張の糸を切ってしまった。本来ならば、”心滅”などありえなかった！！！！！！”

振り向いたそいつの目は、私を萎縮するだけのものを持っていた。

”鋼牙っ、早くしないと、一夏が鎧に食われるぞ”

”ああ、一夏は、これから多くの人を救う。それをここで、失うわ

けにはいかんっ！！！”

鋼牙という男は、剣を頭上に翳し、円を描いて、一夏のように鎧を召還した。その姿は、眩いばかりの黄金に輝いていた。

そうだ、あの時一夏を救ったのは、”黄金騎士 牙狼”だった。私は何もできずに終わってしまった。

だからこそ、怖いのだ。自分の手が及ばないところに居る一夏がいつか自分を置いて何処かへ行ってしまおうのが……

” 姐さん…もう少し、大人になったらどうだ？”

いつも一夏の傍に居るあの不届きモノが、いつか言っていた言葉がよぎる。何を言っている、私はもう大人だぞ。ただ、一夏が大切なだけだ……

私は、一夏が育てた花の前に立っていた。これは、一夏が家から持ってきた私物の一つで私も気に入っている奴だ。

そういえば、花にも性別がなかったな。一夏は花のようだな。ただ、日のあたるところではなく、闇の中に咲いている……

ある一団がIS学園を目指していた。それは、数十人からなる男達
が集団を組んで進んでいたのだ。

彼らが進むたびに辺りの雰囲気は暗くなり、また、その場に居合わ
せてしまったものは影に飲み込まれ、一団に加わってしまふ。

その先頭にいる男は、数百メートル離れた場所にあるIS学園に視
線を向け、嗤った。瞳に魔界文字を浮かべて……

「僕は、今日、この社会を変えてみせる。この手に入れた”力”で
っ……!!」

男に合わせるように、集団の面の皮膚が割れ、そこから醜悪な”悪
魔”の顔が現れる。目は赤く、禍々しく輝いていた。

「行くぞっ……!!」

これから起こす革命に対して、意気揚々と進もうとするのだが、

「………悪いが、この先には行かせる訳には行かないよ」

集団と対峙するように、蒼いコートを靡かせる人物が一人。弓を持
ち、それに付けられている刃を向けて………

「なんだっ、お前は、まさか、IS学園の関係者か？女あッ」

集団と対峙する一夏は、少しだけシニカルに笑い、

「お前達の天敵だ。それと、私は、どちらでもない」

ホラーに対して、一夏は弓を構え、牽制する。

「魔戒法師かつ、ならば、恐れるにたらんっ！！！」

ホラーは、自身の集団の何人かを一夏に差し向けた。差し向けられた者達は、様々な凶器を持ち、一夏に襲い掛かる。

その瞬発力は人間のそれを遥かに超えており、並みの人間ならば、あっという間に袋叩きにされ、餌食にされたであろう。

一夏は、魔戒騎士である。故に、集団にたいして、切り込み、三人を同時に地に伏せさせた。

直ぐに立ち上がり、蹴り、拳、凶器による攻撃が一夏を狙う。狙いに対して、一夏はこれを回避し、魔戒弓による斬撃ですべて切り伏せた。

相手の腕が飛び、足が切られ、凶器は破壊された。

倒される集団に対して、ホラーは

「その弓、まさかソウルメタル。貴様、法師ではなく、魔戒騎士だ
というのか？」

「ああ、どちらでもないがな」

言葉と共に、矢をホラーに対して放った。放たれた矢に対して、腕を甲殻類を思わせる物に変えて、それを防いだ。

「なるほど、最近よくみる。男らしくも無ければ、女らしくも無い半端者か？だが、僕の敵じゃない！！！！！！」

男の身体が弾け、中からホラー レギオンが姿を現す。それは、三つの角をもつ甲虫を思わせる頭部を持ち、半身は蛇の尾の姿をしていた。

それだけでは、終わらずに回りに居たものを取り込み始めた、一夏のすぐ傍に転がっていたモノも手当たり次第に、

肉体が溶け合い、黒い瘴気と共にホラー レギオンが巨大化していく。巨大化したレギオンは有に十メートルはあるであろうという巨体であった。

その光景に、一夏は……

「前に戦ったのよりも遥かに大きい」

「ああ、こいつを絶対に学園には近づけるな。入らせたなら、とんでもないことになるぞ」

ヴリルの言葉に頷く。このホラーならば、IS学園を一晩で全滅させるだけの力はあるであろう。

一夏は、地を蹴り、普通ならありえない高さまで飛び上がったと同時に、レギオンの頭部めがけて矢を放った。

放たれた矢は、二、三発と放たれるが、レギオンの皮膚は硬く、矢は全て跳ね返ってしまふ。

「っ!!?!?!?!」

普通なら、刺さるはずだが跳ね返ってしまふのは、流石の一夏も驚いてしまった。

レギオンは、宙に居る一夏に対して、禍々しい角を突きたてるべく突進を行った。迫る角を刃で受け流しながら一夏は、ホラーの身体に飛び乗るが、

飛び乗った瞬間、皮膚からまるで浮かび上がるように、小型のレギオンが姿を現したのだ。一夏の前後を取り囲むように

「これが……」

「ああ、分裂だ。気をつける!!?!?!」

前後から来る小型レギオンの攻撃を魔戒弓を大きく振りかぶることで防いだ。金属音がなると同時に二体のレギオンが吹っ飛ぶが、その瞬間に地響きと同時に足場が揺れる。

レギオンが動いたのだ。動いたレギオンに合わせる様に、小型の二匹は溶け込むように本体の中に還った。

足場があまりにも悪いため、一夏は、一旦レギオンの本体から降りる。数メートル先まで離れて、一夏は

「巨大化と分裂……恐ろしく厄介な能力だ」

「そうだ、レギオンはかなり厄介だ。どうやって、片付ける?」

一夏の言葉にヴリルが問う。一夏の答えは決まっている。戦いを長引かせるわけにもいかない。

「これで、決めるっ!!!」

その言葉と同時に一夏は、魔戒弓を頭上に掲げて、円を描き”鎧”を召還する。光と共に蒼い狼を模した鎧が現れた。

同時に大きく変化した魔戒弓を掲げると同時に、魔道火を矢に点火させ、レギオンに放った。

狙うは、レギオンの蛇のような皮膚をした半身。この部分は、頭部のように硬い外骨格で覆われてはいない。

一夏の狙い通り、矢はレギオンの半身に刺さり、炎が侵食し、その身体を粉碎する。だが、巨体だけに、致命傷には至っていない。それどころか、再生をしている。

再び矢を放つべく弓を構えようとすると、レギオンはその巨体をもつて一夏に突進を仕掛けてきた。

恐ろしい硬度を誇っているレギオンの外骨格を正面から受けるのは、魔戒騎士でも厳しい。故に一夏は、上空に飛び上がることで回避する。

アスファルトが割れ、地響きで震える。魔戒弓を構え、魔道火を伴った矢をレギオンの半身に放つ。だが、身体から現れた分身が盾となり防ぐ。

矢で消滅させたのは、分身であり、本体には傷がついていない。

「くっ！？！矢が何本あっても足りないっ！！！！」

レギオンは一夏の狙いを察したのか、周りを固めるように自身の分身を出現させた。

「まったくだ。何で、こんな奴が出てくるんだっ！！！！！！」

ヴリルも、レギオンの能力に対して辟易していた。細かいところを狙っても分裂か再生を繰り返す。

「だったら、烈火炎装で奴が分裂も再生ができないぐらいに切り込むっ！！！！」

一夏は、魔戒弓に魔道火の炎を纏わせたと同時に自身の鎧にも炎を纏わせた。橙色の炎が蒼い鎧を照らす。

横一文字に魔戒弓の刃による魔道火を帯びた剣圧が一直線にレギオンの半身を切る。切られた半身は魔道火により燃え上がる。だが、身体はまだ残っており、そこから、二体目のレギオンに成ろうとするが……

一夏は既に駆け出し、さらなる剣圧を近い距離から放ち、二体目に成ろうとしていたレギオンを魔道火の炎で、焼き尽くし、消滅させた。

上半身だけのレギオンは信じられないのか、呆然としていた。無限に再生と増殖を繰り返す自身の身体を消滅させるなど……

一夏は、レギオンの上半身よりも高く飛び上がり、魔道火を帯びた魔戒弓による斬撃は、レギオンを真つ二つに焼ききったのだ。

焼き切られたレギオンの左右の身体は消滅したと同時に一夏はアスファルトの上に着地した。

一夏と同じく、奇妙な肉の塊が目の前に落ちた。うつすらと男の顔を浮かべて……

”嫌だ…僕は、この酷い世界を変える力を得たんだ。あそこには、全ての元凶があるのに……”

悔しそうな男の顔に対し、猛々しい蒼い狼は、

「たとえば、この世界を酷い物に変えた元凶であっても、私にとっては、かけがえのない”大切な人達”だっ！！！！！！！！」

魔戒弓の炎を未だ衰えず、肉の塊に対して大きく振りかぶり……

「それにお前は、ホラーに憑依された時に死んでいたっ！！！！！！」
振りかぶられた炎は、肉の塊を塵を残さずに消滅させた……

鎧が解除され、辺りには静けさが漂った。不意に懐かしい感じを背後に感じ、振り返った。

「久しぶりね、一夏」

目の前に小柄な少女が立っていた。

「鈴」

彼女の名は、凰 鈴音。一夏にとって、筈に続くもつとも懐かしい存在である。

「ああ、久しぶりだね。一年ぶりかな」

「そうね、アタシもこの一年を頑張ってきたわ」

鈴は、一夏に自身の相棒である大筆の”魔道筆”を掲げた。

「魔戒法師になれたんだね」

「何言ってるのよ。アタシは、まだまだ半人前よ。烈花さんからは、仮免の評価だから……」

その言葉と同時に鈴の肩に、小さな魔戒魚が姿を現した。

鈴

IS学園に向かう途中で、まさか一夏とホラーとの戦いに出くわすなんて……アタシはとことん、厄介ごとに縁があるらしい。

IS学園に来たのは、アタシが魔戒法師として、一夏の補佐役として指令が出たからだ。

アタシ自身も驚いたわよ。だって、まだ修行をして一年ぐらいのアタシが前線に行くなんてね。

当然、この一年は死にそうな目には、何度も合ったし、目を背けたくなるようなものだって見てきた。

半年程、閑岱で基礎を学んで、経験を積むために魔戒法師の烈花さんに師事してきた。

”もっと冷静になれ！！頭に血が上りやすいのは、お前の悪い癖だ”

”愚か者っ！！！！ただ敵を倒せばいいのではないっ！！！！”

”俺達が護らなければならぬのは、多く人々の未来だ！！！！敵を倒すよりも護ることを優先しろっ！！！！鈴っ！！！！！！”

” 甘いつ！！俺がホラーならば、シグトは死んでいたぞっ！！！”

” 卑怯？それをホラーに対しても言つつもりかっ？”

烈花さんは、本当に厳しかったわ。口調は”俺”で、一夏以上に男らしい女の人だった。

話を戻すけど、IS学園に向かう途中でアタシは、一夏が巨大なホラーと戦っているのを見た。一年前に比べると格段に強くなっていた。

アタシじゃ、まだ届かない。一夏が、どれだけ努力を積んで魔戒騎士になったかはよく分かっている。だって、魔戒騎士は決して才能だけじゃなれない。

才能以上の努力が必要だったから……、一夏は、普通の魔戒騎士なら倒すのが困難な巨大ホラーを倒した。

目の前にいる一夏は強くなっている。だけど、アタシよりも綺麗になっっているのは納得できない……

一夏と鈴は、IS学園の校門前を揃って歩いていた。

「鈴。元気だった？」

「元気も元気ね。烈花さんの前で落ち込んだら、アタシが元気になるまでボコられるわよ」

鈴は一夏に、自身の師匠の理不尽さを語る。一夏は、鈴が相変わらぬ様子なので、思わず笑みが浮かんだ。

「シグトの優しさが身にしみるわ」

生意気にも年上の、先輩の魔戒法師を呼び捨てである。これは師匠がいないからこそ、言えるのだ。

「私は、鈴の師とは面識はないけど、いい魔戒法師なんだね」

「ええ、お父さんもお母さんもいい人だって、言ってくれてるわ」

鈴は、まるで自分の事のように嬉しそうな笑顔を一夏に向けた。幼いながらも、人の気持ちを暖かくさせてくれる笑みだ。

「それと、一夏。たまには、アタシん家に顔を出しなさい。お父さん、嘆いていたわよ、”恩人”が来てくれないって」

「ああ、でもおじさんとおばさんは、鈴が魔戒法師なのには、平気なの？」

「千冬さんみたいな事、言ってんじゃないわよ。アタシは自分で考えて決めたの、お父さんとお母さんとちゃんと向かい合ってるわ」

鈴の言葉に一夏は、

「そうか、私は失礼なことを言ってしまったな」

「そうね。もう少し、察しなさい。あんたも”女の子”なんだから

」

茶目つ気たっぷりに鈴は、一夏の鼻の先に指を当てたのだった……

彼女は、一夏が”IS”インターセックス 中性であることを知っている。

「そうだな、一夏。一応、お前も女なんだからじゃなくて。鈴、そこは、男も女も関係ないんじゃないか？」

先ほどから黙っていたヴリルが会話に加わる。

「あ、そういえば、あんたも居たわね。ヴリル」

「居たわね、じゃねえよ、俺を無視するとは、いい度胸してんじゃねえか？」

ヴリルが、俺が折角、気を使ってやったのと言わんばかりに言いあげた……

翌日、パーティーを途中で抜け出したことについてセシリアに少し、言われてしまった一夏だったが、放課後にISの訓練に付き合うということで機嫌を直してもらった。

そんな一夏を箒は、少しだけ不満な目で見ていた……

箒

あの後、一夏はパーティーには戻らなかった。皆、残念がっていたが、私としてはこれ以上一夏が他の女に気を取られないで思うと良かったと思ってしまうたが。

千冬さんも戻ってこなかったし、あれから一夏は何をしていたのだろうか？

あの怖い目をしていた一夏。そして、昨晚、一夏と親しげに話していたあの”女”。

一夏の事が気になって探しに行ったが、何処にもいなかった。

一時間経ってから、私は一夏を昇降口付近で見つけた。声を掛けようとおもったが、できなかった。

なぜなら、一夏の隣に私の知らない女が居たからだ……

親しげに話すその女は、誰なんだ？一夏……

それにお前は、今、何をしているんだ……私の知らないところで？

第陸話「訪問者」（後書き）

さて、ホラー介入と同時に鈴 参戦。彼女は、魔戒法師です。師は烈花で、彼女同様に魔戒魚を用いた術を使います。

よくクロスモノで鈴が代表候補生でありながら、確かオーズとのクロスでバースをやっていたのがありましたので、

思い切って代表候補生ではなく、一般生徒？な立ち居地で、強化で魔戒法師になりました。強さに関しては原作よりも少しだけ上という具合です。

回想では、ありますが鋼牙ができませんでした。一応IS原作にも出演はありますので、ここだけでは、終わらないです。

中国の代表候補生は、一応IS学園にいますが、モブっぽい人物です。二組在籍ですよ。

今回は、ISの部分とGARROの部分の折り合いが中々難しかったです。

ラブコメっぽいのは、苦手だなと思うしでした。

それでは、予告を……

さて、鈴と再会した俺たちだが、二人のお嬢ちゃんに様子が少しおかしいな？

お前達二人は、一夏に恋でもしたか？だったら、生半可な気持ちで近づいたら、許さんぞ。

鈴は、一夏を真剣に想っているんだからな……

次回！「凰 鈴音」

さて、これから面白くなりそうだな。特に一夏の周りが……フフ
フフ

ああ、そうそう、作者が牙狼の番外編の”呀 暗黒騎士 鎧伝”で流れたEDをFULLで聞いてな、それに感激して

短編を書いたらしいぞ。何でも、クロスオーバーでだが、意外と周りの奴から好評で連載も考えているらしい。

ペースは、二週に一度ぐらいでやる予定だよ……

第漆話「鳳鈴音」（前書き）

今週は、やたら忙しく前の投稿からかなり間が空いてしまいました。

牙狼は先週と今週を見ましたが、先週の鋼牙の可愛いところが見えてよかったです。

アレなら、鋼牙よりも零の方が適役なのではと思いました（笑）

元老院は、どういう基準でホラー狩りに行く騎士を選んでいるのだろうか？

今週のは、ホラー色がかなり強く、最後のアレは、ホラーよりもの方が意味もっとも恐ろしいかもと思うものでした……

先週よりも今週のホラーのデザインが、凄く好みでした。

雨宮さんのデザインは女性的なラインを使うことが多いので、今回のホラーもそれっぽい感じですよ。

それでは、最新話です。どうぞっ！！！！

第漆話「鳳鈴音」

二日前

とある町の中華料理店は、久々に賑わっていた。営業時間は既に過ぎていたのだが、今、数週間ぶりに”家族”が帰ってきたのだ。

「ただいまっ！！！お父さんっ！！！」

「おおっ、鈴っ！！！よく帰ってきたっ！！！！！」

久々の娘の帰りに父は、思いつきりその身体を抱きしめた。

「鈴。私からも言わせて、お帰りなさい」

いつの間にか、母もまた娘の姿を笑顔で迎えていた。

「うんっ！！！お母さん。ただいまっ！！！！！」

一家団欒の雰囲気では鈴は、数週間ぶりに父と母の料理を楽しんだ。

「鈴、やっぱり世の中は大変か？」

「うん、それなりにね。だけど、アタシは一人じゃないから……烈花さんにシグト、それに”この子達”も居るしね」

鈴の言葉に合わせるように肩の上に宙に浮かぶ魚が現れた。魔戒魚と呼ばれる生物である。

魔戒魚は、部屋の隅においてある大きな旅行用のスーツケース程の大きさの”モノ”の周りを舞いだした。合わせる様に、それは変形し、二脚の竜？”号竜”へと姿を変える。

大きさは、”ダチヨウ”程もありでかい。その姿に、両親は大いに驚く。娘が”魔戒法師”を指指してからは驚くことの連続だ。

「こら、”ヴォルト”いきなり変形しないの。戻りなさい」

変形した”号竜”を嗜めると、鈴の言葉に合わせて号竜はスーツケースの姿に戻った。

「驚いたわね。お魚ちゃんは知っているけど、そっちの子ははじめて見るわね」

母は、スーツケースを見てそう呟いた。

「うん、この子は号竜っていうの、名前は”ヴォルト”。私の新しい”仲間”よ」

鈴の言葉に喜ぶようにスーツケースの中心にある”魔獣の核”が点滅する。鈴の言葉が分かっているようだ。

その様子に、父と母は、内心穏やかであった。

「鈴がこうして笑ってくれるのはいいものだな」

「ええ、これも一夏君と魔戒騎士さん達のおかげですね。あなた」

「ああ、そうだな。鈴も彼らのように”護りし者”として、誰かを救っていくんだろっな」

鈴の父

一年前、俺の家族は”崩壊”の危機に陥っていた。理由は、妻の故郷である”中国”より、娘を引き渡せといわれた。

国家が総力を挙げ、作り上げた”IS”のために……。鈴には、何も話さずに、”離婚”の話を進めていたが、鈴の幼馴染である”織斑一夏”が

”鈴の為なら、どうして離婚なんてするんだっ！！！！！鈴の気持ち聞いてのかつ！！！！！”

”ただ、相手がどうしようもないからって、初めから諦めるなんて、私は認め、いや許さないっ！！！！！！”

今、思えば事情も知らない他人が良くここまでいえたものだ。だが、織斑一夏が言った事は事実だった。娘は…鈴は……

”ここは私の家よっ！！！！何で、お父さんとお母さんが別れなくちゃいけないの！！！！ここから居なくなるなんて嫌よっ！！！！！”

その言葉に、俺は娘のために戦わなくてはと思った。一家を護れなくて何が父だ。妻を、娘を悲しませるなんて…そんな情けないことをしてたまるかと……

何とかして、俺はたくさんの人々の協力を経て離婚をすることなく、国から家族を護れたのだ。

あの時は、信じられないことが立て続けに起こった。鈴の幼馴染の一夏君は、“魔戒騎士”という戦士で、ホラーという魔獣と戦い続けているというからだ。

俺もこの目で見るまでは、信じられなかった。聞けば、あのホラーはISですら倒すことができないという。その圧倒的な存在に、立ち向かう彼らに背を押されて、俺も戦うことを決めたのだ。

一夏君もこれまでにない強大なホラーとの戦いの最中だったのに、鈴の事を気にかけてくれてくれたことは本当に感謝しきれない。

”俺もさ、家族が居たんだ。血は繋がらなかったけど、あの人は紛れもなく俺の父さんだった”

”だからさあ、俺は、理不尽な理由で家族が居なくなるのも、奪われるのも嫌なんだよ”

彼が一夏君を迎えに来た時に、彼こと”涼邑 零”と話したが、彼もまた理不尽な理由で家族を、愛する者を奪われたらしい。だけど、彼には”家族”がただ一人残っており、“家族”が居る限り戦い続ける……

だから俺も、家族を護り続けようと誓った。彼らのように戦えなく

ても俺は俺の戦いを…鈴がいつでも帰ってこられるように……

鈴の母

この子には、本当に驚かされるわ。普通の女の子だったのに、この一年で見違えるほどになったわ。まだまだ、半人前だというけど、私からしては、もう十分すぎるほど……

自分の信念の元、闇の中に身を捧げる事は、親として”納得”はできないけれど、この子の意思は固い。

鈴は、魔戒法師になると言ったのだ。

”アタシは、一夏を支えられる魔戒法師に、いえ、一夏達みたいに誰かを護る、護りし者になりたいっ!!!”

そう言った鈴の決意は固かった。いつの間にか、一人の”女”の目をしてきたから……

私達は鈴の意思を尊重することにした。夫も戸惑っていたけど、鈴は自身の歩むべき道を見出し、そこに進むうとしている。その背中を見送るのは”親”として、当然のことだ。

鈴は必ず戻ると言って、時々顔を出しに戻ってきてくれる………

一家の住む料理店に二人の影が近づく。一人は人の良さそうな青年シグトともう一人は凜とした長身の女性 烈花である。

「烈花。鈴に何を言いにいくんだ？」

「何も言わん。鈴には、まだまだ教え足りんが、俺は、こいつを渡しに行くだけだ」

烈花は手のひらに一匹の魔戒魚を乗せた。二人は、賑やかな声が響く中華料理店の戸に手を掛けた。

「夜分、遅く尋ねてきてすまんっ！！！ここに凰鈴音は居るかっ！！！！！」

烈花が堂々と声を上げた。この声に反応するように奥から慌しい鈴の声が聞こえてきた。

「れ、烈花さんっ！？！！ちょ、ちょっと待ってくださいっ！！！！今、開けますからっ！！！！」

慌しく戸をあけた鈴に烈花は一発、拳を浴びせた。

「っあッ！！！！」

声にならない悲鳴を上げて、鈴はいつにもまして理不尽な一撃を呪った。

「まったく、もう少し堂々と構えろっ！！そんな事で一人前には成れんぞっ！！！！」

いつにも増して厳しい師の言葉。

「まあまあ、烈花もそのぐらいにしとけよ」

「シグト、甘やかしては鈴のためには成らん」

師は、自分を”一人前”にするまでは、ずっとこの調子なのではないかと思っ鈴であった。

「あの、魔戒法師の方ですか？もしかして、鈴の師匠の方？」

三人の様子に対し、鈴の母が尋ねてきた。

「ああ、この未熟者をモノにするために、師匠をやっている」

「そうですか、どうぞ、中へ」

「いや、用事は直ぐに済む。ここで構わない」

烈花は、鈴に視線を合わせる様に屈み、

「鈴、お前に渡すものがある。こいつをお前に渡したい」

鈴がモノを言う前に、烈花は一本の”笛”を手渡した。

「烈花さん。これ……」

「これは、俺がお前に伝えた”モノ”だ」

それは、師である烈花が愛用していた”笛”であった。

「鈴、けっして無茶をするな。お前が俺の力を必要とするなら、呼ぶ。必ず駆けつける」

「……烈花さん」

「お前は、まだまだ半人前だ。だが、その一途な”心”だけを決して忘れるな。そして、一人ではないことを……」

烈花は、伝えるべきことを伝え背を向けシグトを伴って去っていった。

鈴は、師である烈花の背を見送ると同時に、笛を口につけ、師が奏でていた曲を吹く。

”英霊達への鎮魂”を……

師がくたくたになった自分を労るように奏でていた、あの何処か切なくも心に響く旋律を……

一年一組 教室

「一夏さんっ！！！！昨日のパーティー、どうして抜け出したんですかっ！！！！」

「そっだよ、織斑君っ！！酷いよっ！！！！」

「そっだよ〜」

セシリアと数人の女子が一夏に詰め寄っていた。理由は言うまでもなく、パーティーの主役の内の一人在途中で何処かに行ってしまった事による憤りである。

「すまないセシリア。少し用事ができたもので、行かなければならなかったんだ」

一夏は、予め考えておいた言い訳を頭に浮かべた。

「用事って、何ですか？」

セシリアの言葉に一夏は、ある人物の”名前”を出す。

「篠乃之博士から、蒼牙のデータを確認させるって催促があった…」

「まあ、篠乃之博士が……もう少し融通を利かせられませんの？」

「私自身の報告が遅れてしまったのが原因だ。私の身から出た錆だよ」

「まあ、一夏さんもうっかりしてますわね。しっかりしてくださいませ」

一夏言葉にセシリアは納得の意を示した。噂に聞くと一夏は篠乃之博士の直属となっており、調査のために専用機を持っているのだ。

これに関しては、皆は”それなら仕方がない”と言わんばかりに納得してしまった。もう少しだけ融通ぐらいはとも思ってしまった。

だが、そんな一夏に対して、箒はすこし胡散臭いものを感じていた。

あの人からの催促？違うだろ、あの方は、呼び出すんじゃないか分かってくる。

なあ、一夏。お前は、何故、私達に嘘をつく？

あの変な赤い封筒と千冬さんのうるたえよう、そしてお前の変わりよう……

何がどうなっているんだ？それにあの人から教えてもらった番号もいつの間にか消えていた。

絶対に掛けることはないと思うから、消えてても問題はないが……

何を私に隠しているんだ？一夏……それにあの人も何を考えて……

昔から良く分からなかったあの人だが、今になっても良く分からない……

職員室

ここに一人の転校生 鳳鈴音と一組担任の織斑千冬の二人が対峙していた。

「……………お前が転校生か？凰」

千冬は少し目を鋭くして、鈴に言葉を掛けた。鈴はそんな千冬に対して

「そつよ、千冬さん、じゃなくて織斑先生」

余裕なのか笑みすら浮かべている。大抵の生徒は自分の睨みには、萎縮するのに、それが通用しないことに少しだけ、千冬は心のうちで毒を吐いた。

「何故？今になって転校してきた。お前はISが嫌いではなかったのではないか？」

「織斑先生。アタシに尋問するつもり？そつよ、ISは嫌いよ、大嫌いよつ！！！」

鈴は、わざと聞こえるように声を大きくした。これには、他の先生達も驚く。ISの嫌いな人間が学園に何のようがあるのかと……

「ISが嫌いなお前が、ここに何のようだ？それに”アレ”はここには、現れん」

「”アレ”は、こここの”陰我”からは出ていないわ。今のところ……だけど、昨日は此処を目指して、直ぐ近くまで来たわ」

昨晚の戦いは、一般人の目撃者こそはいなかったが、何かしらの痕跡は残っていた。千冬は、忌々しそつに表情をゆがめた。

(……まったく、どうしてホラーはここを目指した。何故だ……)
この学園まで近づいてきたホラーに対して、怒りを覚える千冬であった。

「最近になって、ますます増えているわ。何かの前兆かも……」

鈴は、ISによる陰我とは言わなかったが、此処のところホラーが増えていることだけを伝えた。

「分かった。だが、あまりここで騒ぎは起こすなよ。收拾が大変だからな……」

「それ、一夏にも言ったの？」

その言葉に千冬の顔に陰が差した。鈴は、彼女が一年前よりはマシになったが、あまり変わっていないのを察した。

(千冬さん、まだ諦めていないんだ。一夏は一夏の意味で決めたのに、それをまだ他の道があるって……)

鈴も千冬にとって、一夏がとても大切な存在で護ろうとしているのは理解している。そして、あまりにも愛しすぎていることを……
空気が重くなる前に話を切り上げ、鈴は一年一組への転入が決まったのであった。

(一夏も一夏で、千冬さんには甘いんだから)

一年一組

「え〜と、今日はなんと転校生を紹介します」

真耶が、SHRで明るく声を上げるが、クラスメイトの乗りはあまり良くない。

一夏は、誰が来たのかは察しがついていたが

「山田先生。気を落とさないください」

「ああ、織斑君だけです。私の味方は……」

少し涙目の真耶に少しだけ、一夏は引きつった笑みを浮かべた。

この先生は、生徒に舐められているのではないかと思ってしまうのは、自分だけだろうか和一夏は思った。

「凰鈴音さん。入ってきてください」

気を取り直して、真耶が呼びかけると教室に小柄な女生徒が入ってきた。

「こんにちはー、皆さん。凰鈴音です。よろしくねっ!!!」

明るい声と共に自己紹介をした鈴であった。少女の様子に一夏も、自分の知る鈴だと思い、自然と笑みが浮かんだ。

「一夏は、正面ね。先生、一夏の隣、良いですか？」

「えっ、凰さんは、織斑君を知っているんですか？二人は、知り合いですか？」

真耶が、親しそうに一夏に声を掛けた鈴に対して問いかけた。ここで一夏が声を上げる。

「はい。鈴とは、小学校の頃からの知り合いです」

「そうなんで「待てっ!!!」そんな話は聞いていないぞっ!!!」

箒が真耶の言葉を切るように声を上げた。激情しているのか、目が釣りあがっている。

「騒ぐなっ、篠乃之」

「っ!?!」

いつの間にか傍まで来ていた千冬の拳により、箒は沈黙せざる終えなかった。

何故か開いていた隣の席に座る鈴に対して、箒はただ不機嫌に睨むしかなかった。

「一夏、一年ぶりだけど、よろしくね」

「ああ、私のほうこそ、よろしく頼むよ。鈴」

あまりに親しげな様子にクラス全体が衝撃を受けたように目を丸くしていた。

セシリア

「一夏さんっ！！誰ですの？その人はっ！！！！幼馴染は篠乃之さんだけでは、ないのでっかっ！！！！？」

それに一年ぶりだなんて………どういう関係か、はっきりさせてくださいませっ！！！！一夏さんっ！！！！！！

なんですか？知り合いだからって少し、慣れ慣れしすぎますわ。

「一夏さんも一夏さんで、何だか嬉しそうですし…何だか、ムカつきますわ……」

S H R が終わった途端、一夏に詰め寄る箒とセシリアは

「一夏さんっ！！！！その人は、一体誰ですのっ！！！！！」

「そっだぞっ！！！！一夏、説明をしろっ！！！！！！！」

まるで怒髪、天を付かんばかりに怒っている。そんな二人を鈴は少しだけ、呆れた視線を向けた。

(……そんなにアタシと一夏が仲がいいのが気に入らないのかな？)

そんな鈴の横で一夏が応える。

「私の幼馴染だよ」

一夏の言葉に箒は、

「私は、こんな奴は知らんぞっ！！！！！」

と反論をするが、

「箒が引つ越した後に知り合ったから、会わなかったのは当然だよ」

「まあ、あなたが知らないのは無理もないわ、ファースト」

火花を散らすかと思えば、鈴はやりわりと視線で返している。この余裕が少しムカついた箒とセシリアだった。

「少し、前後してしまっただけど、紹介するね。鈴、この子達が、私の幼馴染の箒とクラスメイトのセシリア」

「私が篠乃之箒だ」

「ワタクシがセシリア・オルコットですわ」

二人の様子にまるで鈴を牽制するように一夏は見えた。何故かは、分からないと思いたいが……

「さつきも言っただけど、凰鈴音よ。よろしくね、二人とも」

二人に対して、やりわりと言葉を返すのだった。やっぱり、この余裕が少しムカついた二人であった。

一夏は、更衣室で自身の専用のスーツに着替えていた。

一夏のISのスーツは、ダイバースーツのようなものであり、それそのものが一種の戦闘スーツでもある。

ピッタリとしたラインは、ISを操縦した時の意思を伝達しやすいようにするためだ。

当然のことながら制服を脱ぐ。制服を脱ぐとピッタリとした黒いシヤツが現れ、それを脱ぐと小振りな女性の乳房が姿を現した。

女でもある一夏だが、基本は男で通しているため、自身の胸をこうして隠しているのだ。姉からは、形が崩れないよう下着を付けるように言われているが……

「篝と一緒にいた頃は、あまり気にしなかったのに……」

自分の身体の変化について、一夏は少しだけ考えた。自分が、男でも女でもないことは幼い頃から分かっていた。

男のように活発でもなかったし、かといって女のように話好きでもなかった。そして、男女の恋愛というのが、よく分からないことも……

”織斑君って、変だよ……男の子なのに、女の子みたいだし……”

”それって、気持ちが悪いよ……”

幼い頃、好きだといった女子が居たが、その好きがよく分からなか

った。あの子は、どうなったかは知らないけれど…自分のことなど覚えては居ないだろう。

「お前も厄介な星の元に生まれたのは、俺も良く分かっている。だが、お前は、お前だ」

ヴリルが、一夏的心情について声を上げた。女でもある一夏を氣遣ってか、正面を向かずに顔を後ろに向けている。

「分かっているよ、ヴリル。また、誰かに”気持ち悪い”と言われるのかと思うと、少しだけ、気が弱くなってしまう」

珍しく弱気な一夏であった。普段は、それなりに堂々としているが、男女の恋愛となると一夏は非常に”弱い”のである。

一夏の脳裏に、自分の体のことを知らない筈とセシリアの顔が浮かんだ。そして、自身の事を姉と同じくらいに知る鈴の顔も……

一夏

私は、男女の恋愛が良く分からない。それは、私自身がどちらでもない心と身体をもっているからだろうか。

中学の頃は、修行中と魔戒騎士に成ったばかりだったから特にそういった話はなかった。私自身が少し殺気立っていたから、鈴と弾以外に誰も近づこうとはしなかった。

弾とは、女に絡まれていたのを助けたのがきっかけだった。私のことを”女”とっていて、学校で男子用の制服を着ていた私を見て酷く驚いていた。女でもあるので間違いではないのだけど……

鈴は、私がIS”中性”であることを知っている。きっかけは、中学に上がる前に私の胸を鈴が面白半分に触ってくれたことだった。

あの時の私は、酷く心を乱してしまった。修行中じゃ、こんなことはなかったのと思うぐらいに……

姉が家に居ないので、師匠の下にいつてしまった。

”一夏、俺は男だから、こういう事にはあまり役には立てんと思うが、鈴と向き合ってみるのが一番だな。誤魔化したら、それだけお前が辛い思いをするからな”

師匠の言葉通り、翌日、鈴に私の”身体”の事を打ち明けた。鈴は驚いたが、直に笑顔で

”別に悪いことじゃないわよ。一夏は、一夏じゃない。たとえ、男でも女でもね”

私を受け入れてくれた。それ以来、私が女でもあることが分かって、女としての話題を持ちかけるようになった。

服であったり、歌、時には化粧すら教えてくれた。まあ、私がさせられていたのだが……

一年前、私の不始末で迷惑をかけたが、それでも鈴は私のことを受け入れ、支えようとしてくれていた。

魔戒法師になるため、閑岱へ旅立つ日に

”一夏、アタシはあんたのことが好き。この好きは、友達としてじゃない。恋愛でアタシが好きなの”

”あんたが恋愛がよくわからないのに、こんな事を言って、困らせたいわけじゃない。もし、あんたが恋愛を理解して、アタシ以外の誰かを好きになっても、アタシの想いを忘れないで”

あの言葉に私は応えられるだろうか？いや、今は応えられない。私は……まだ、何も分かっていないのだから……

こんな半端な気持ちで、鈴の想いに応えても、傷つけるだけだから

……

場面は変わり、午前最後の授業は、ISの基本機動を行う授業が始まることとしていた。

ただ、ここに一人だけ服装の違うものが居た。凰鈴音である。一人だけ、ジャージ。

IS学園の実習用のIS用スーツを買っているのだが、まだ届いていないのである。

一人だけ浮いている鈴を箒とセシリアがジト目で見ていた……

鈴

さつきから、アタシを箒って子が見ている。何か聞きたいことがありそうだけど……一夏との関係ね。

あの外人もそんな感じね。あいつに惚れるなんて……

箒って子は、知らないかもしれないけど、一夏はあなたの事を本当に大切に思っていたのよ。

それが、恋愛かどうかと言われると少し違うけどね。

一夏は男でも女でもある”中性”だ。この”女尊男卑”中、女で居るほうが良かったのに、一夏は、男で居た。

その理由を聞くと、私よりも前に出会った”女の子”といつか再会

するためだと……

”私と篤は、いつか必ず再会すると約束をした。再会したとき、私が”女”だったら、篤を驚かせてしまう”

その外見でそんな事を言っても全然説得力なんてないわよと言ってやった。

六年も経てば、忘れろと思うけど、一夏と篤はお互いに忘れなかったから、案外両思いかもと思っちゃった。

でも、二人は互いにまだ歩み寄れない。一夏の事を聞いて、どう思うかな？もし、”気持ち悪い”なんて、言ったら、アタシがぶっ飛ばしてやるんだからねっ！！！！

その一夏が、最後にクラスメイト達の元へ小走りできた。

「すみません。少し、遅れました……」

一夏が来たと同時にクラスメイト全員が振り返り、その姿に全員が見惚れてしまった……

「なにっ？あのスタイルのよさ……」

「ほんとに男？」

「実は、女の子じゃないの？」

「織斑先生より、細かいか……」バシッ！！”あべしっ！？！”

「あの綺麗なライン……私の寸胴と交換して欲しい……」

彼女のらの視線は、一夏のボディーライン全体を嘗め回すように向けられたのだった。

一夏は、女子達の視線に居心地の悪さを覚えていた。特に、自分の”脚”、”くびれ”、”胸”による視線は正直、恥ずかしいと感じていた。

「箒、羽織るものないかな。ちょっと……恥ずかしい」

「男の癖に何を恥ずかしがっているっ！！普通、逆だろっ！！！！」

一夏は顔を少し赤くして箒に頼るが、彼女は一夏を突き放した。これも”IS”によって、男女の価値観が歪んでしまったのではないかと、箒は思った。

（これが、最近の”草食系男子”というものなのか）

これが、いかつい男なら引いたが、見た目が女の一夏では、違和感がない。

「仕方ないわね。あんたは、肌を人前にさらすの、極端に嫌がるもんね」

鈴は、何処から持ってきたのかジャージの上着を一夏に手渡し、一夏はそれを羽織った。

「ありがとう、鈴」

ジャージを羽織る一夏に鈴は苦笑する。

(……一夏って、女でもあるんだけど、もしかしたら、アタシより女らしいところがあるかもって……一夏は女だから、変じゃないよね)

一方でセシリアは、頬を引きつらせて

「……一夏さん。あなたは、間違いなく”女の敵”です」

ここでも、敗北してしまつたセシリアであつた。自身のスタイルもそれほど悪くはないはずなのだが、一夏のそれと比べると見劣りがしてしまうのは、自他共に明らかであつた。

間もなくして千冬と真耶が生徒達の前に立ち、

「これより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、試しに飛んでみる」

「わかりましたわ」

千冬に応えるようにして、セシリアは青いボディーが特徴的なブルー・ティアーズを展開する。

「……………」

一夏は、左手首のブレスレットを掲げて蒼い狼の顔を持った蒼牙を展開した。

その時に、羽織っていたジャージが舞い、鈴の手元に戻った。

赤い鬘を靡かせるその姿は、威風堂々としたもので、近くで見ると、のに軽い威圧感を与える。

「織斑。そのバイザーは仕舞っておけ」

蒼牙の顔が気に入らないのか、口を出す千冬。今は、授業中なので、大人しく指示に従い、バイザーを仕舞うのだった。

現れたのは、姉そっくりの顔である。

「よし、飛べ」

その合図に合わせるように一夏は、地を蹴って跳び上がった。

「織斑っ！……誰が地を蹴って跳べと言ったっ！……！……ちゃんど、飛行しろっ！……！」

千冬が教師として、厳しく指導する。

「……うっかりした」

「おいおい、しっかりしてくれよ。授業参観で見ているこっちの期待にも応えてくれよ」

一夏は一夏で、いつものように振舞ったことである。ヴリルは、ヴリルで少しだけ苦笑いをしていた。

「い、一夏さん。随分とユニークな飛び方をされるんですね……」

地を蹴って跳び上がるのをセシリアは、少し引きつりながら話しかけた。

「……まあ、いつものくせで……」

一夏も一夏でどう応えていいのか良くわからなかった。飛行をしなければ、話にもならないので、蒼牙の翼を展開して一気に飛翔した。

「凄いわね。一夏……めちゃくちゃ、上手いじゃん」

鈴は、蒼牙を展開し飛行する一夏を見てそう呟いた。蒼牙は一気にIS学園を見渡せる高さまで飛行し、風と戯れるように上下左右を舞う。

「……………」

箒は、あの遙か空の上を舞う一夏の居る場所と自分との位置がそれだけ離れているように思えた。

いや、もしかしたら自分と一夏は、交わることはない違う世界で生きていくようにも……………」

そう思うと、少しだけ寂しく思えたが、自分と一夏はこれから始めればいいと思い、気を引き締めた。届かないのならば、あの場所へ届けばいいだけのことだから……………」

IS学園上空

「皆は、いい印象は持っていないISだけど、空をこっぴつ風に乗るの、凄く好きになれる」

「ああ、そっだな。なんで、こいつは女にしか動かせないのかね？」

「それを言うなら、ソウルメタルが男にしか扱えないことを言うのと同じだよ」

一夏は、蒼牙を見事に制御していた。ISの制御は、思考によるものでありイメージなのだ。

ISと少しだけ制御の方法が似ているのが魔戒騎士達が扱う”ソウルメタル”である。

これは、持ち主の心の在りようでその重さを変えるため、”ソウルメタルは、力でなく、心で扱え”という格言があるのだ。

ソウルメタルを扱うのは、かなり難しく、ほとんどの騎士が数年を掛けて、扱えるように師の元で学ぶのだ。

一夏もソウルメタルを操れるまでは、かなり苦勞をしている。それこそ、語りつくせないほどの”努力”を行ってきたのだから……

そのソウルメタルと比べるとISの操縦はさほど難しくは無かったと言っのが、一夏の感想である。

「もう少しだけ、高く飛んでみたいけど……さすがに今は、難しいかな」

「まったくだ。こいつで、月まで行くんだろ、ジュール・ヴェルヌの世界だ。ほんとに大したもんだ、ISってのはよ」

「一夏とヴリルは、遥か上空に存在するであろう」未知なる世界”に少しだけ思いを寄せた。

それだけに残念な思いもある。本来ならば、未知なる世界への翼と成るべき”IS”は、国家の武力として、さらには、女しか扱えない強大な力として”女尊男卑”の陰我を生み出した元凶となっている。

「いつかは、俺も行ってみてえな。宇宙によ」

魔道具初の宇宙飛行をしたいのだろうか？他の魔道具はどう思うだろう……

「い、一夏さん。お待ちになってくださいませ」

下を見るとセシリアが、息を切らすようにして自分に追いついてきた。

「ああ、すまない、セシリア。少し、飛ばしすぎた」

「ええ、良いものが見れましたから、構いませんわ」

「良い物？」

「いえ、ワタクシの勝手な感想ですので、一夏さんはお気になさらなくて良いですわ」

セシリアの言葉に一夏は首を傾げたが、彼女は微笑んで、それ以上のことは言わなかった。

セシリア

ほんとうにISを二ヶ月ほど動かしたただけですかしら？遙か上空の雲に届くところまで飛ばれるなんて……

ワタクシだって、このブルー・ティアーズを専用機とするまで、それこそ語りつくせない努力をしてみましたわ。

あの方は、それを二ヶ月足らずとあそこまで”IS”を動かせるなんて……

上空を舞う一夏さんは、何処か楽しそうにも見えましたわ。まるで、空を舞う”天使”のように……

ワタクシは一夏さんを”騎士”と思いましたが、あのように空を舞う姿は、”天使”ですわ……

”騎士”は、身近のものを主を護るために己のみを捧げるといいますが、”天使”は、ワタクシ達とは違う世界を生きる生き物です。

一夏さんがもし、”天使”なら、ワタクシと一夏さんは住む場所が違う事を意味します。もしかしたら、そうなのかも思っています
ます……

今のこの距離が、ワタクシをそう思わせているのでしょうか？ワタクシは、一夏さんのことが知りたい。だから、傍に近づけるように、進まなくてはなりませんわっ！！！！

「一夏さん、ISで飛行するのは、楽しいですか？」

セシリアは、一夏に問いかけてみた。

「……………こうやって空を飛べる感覚が凄く楽しいかな」

一夏は、本当に楽しかったのか、笑みを浮かべて応えた。その笑みが綺麗なのかセシリアは、少しだけ頬を赤くしてしまった。

「……………あの、よろしければ一緒に訓練でもいかがですか？ワタクシも一夏さんのように接近戦と遠距離戦をうまくこなせるようになり

たいので……」

セシリアの考えはもつともである。一夏の駆る蒼牙は、雪片を用いた接近戦と弓を用いた遠距離戦を主体としている。

遠距離での戦いを主体とするブルー・ティアーズも接近戦ができれば、戦術の幅は広がる。

「それなら、セシリア。私からもお願いをしたい。よろしくおねがいするよ」

「はいっ！よろこんで『一夏っ！……！……！いつまで、遊んでいるっ！……！早く降りてこんかつ！……！……！……！』」

いきなり通信回線に怒鳴り声が割り込んできた。

怒鳴り声の主は、箒である。地上ではインカムを強奪された真耶がオタオタとしていた。

遙か上空から離れた地上もISのハイパーセンサーを使えば、鮮明に見える。

『織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から10センチだ』

「了解です。では、一夏さん、お先に」

千冬の指示に従い、セシリアは地上へ向かい、地表戦前で身を翻して、ピタリと地表10センチ離れたところで完全停止をする。

「さすがは、代表候補生つてところだな」

ヴリルがセシリアの技術に感心したように呟いた。

「それでは、私も続くとする」

「おおっ！！行って来いっ！！！！」

続いて一夏が蒼牙の六枚の翼を展開して、地上へと向かう。こちらも難なく、地表10センチで停止した。

放課後、授業が終わり、一夏と分かれた鈴は食堂に来ていた。箸とセシリアの二人と同席していた。

「鳳。私達に何のようだ？お前から、誘ってくるとは……」

「そうですね。ワタクシはこれから一夏さんと有意義な訓練の時間ですよ」

セシリアの言葉に、篤は一瞬、青筋が立ったが、直ぐに気を取り直して鈴と向き合う。

「そうね。ぶっちゃけ、聞くけど、あんた達、一夏のことを好きなんでしょ?」

意外過ぎた言葉に対して、二人は顔を赤くして

「な、何を言っただつ!?!?!」

「そ、そうですわっ!?!?!?!?!物事には順序がありますのよっ!?!?!」

この反応を見て、やっぱりと思う鈴だった。一夏は何気にもてていた。

(そういえば、弾の奴も一夏が女でもあると知ってから妙に意識していたわね)

中学時代の友人もそうだが、近寄りがたい雰囲気を持つものの何気に優しくかった一夏を意識するものは多かった。

事情を知らない男達から一夏は”高嶺の花”と呼ばれていた。意味、手が出せない。男だから……

「アタシは、好きよ。一年前に告白だったから……」

「なっ!?!?!?!」

「何ですってっ?!?!?!?!」

鈴の言葉に箒とセシリアは、声を上げてしまった。近くに居た生徒たちも鈴に注目している。

「まあ、今は一夏の返事待ちよ。あいつを困らせたくないしね」

少しだけ笑みを浮かべた後、真剣な表情で箒とセシリアに向かい

「あんた達二人が一夏の事が好きだとしても、絶対にあいつを困らせないで。あんた達の都合で振り回して、傷つけるなら、絶対に許さないから……」

「な、何を言っているんだっ?!?!わ、私は、幼馴染だ。一夏のこととは誰よりも知っているんだぞっ?!?!」

箒が鈴に反論する。それに対してセシリアは箒のように反論ができなかった。なぜなら、セシリアは一夏とまだ知り合っただばかりだから……

「そう……でも、今の一夏の事を知っている人は、アタシと千冬さんぐらいなものよ」

「な、何を言っているんだ。一夏は、私の幼馴染だっ?!?!ああの頃のままだっ?!?!?!」

声を上げる箒に鈴は、本当に一夏に入れ込んでいるものだと感心してしまった。だが、二人は知らない。一夏が二人が知らない世界へ身を置いていることに……

「そうなら、もし一夏に普通とは違う違和感を感じても絶対に詮索しないことね。もし、それを詮索して、”絶望”をしてもアタシは一切手は出さないわ」

鈴は、思わず目に怒気をこめてしまった。この時、発せられた威圧感是一般人を軽く威圧するものだった。箒とセシリアも思わず、怯えてしまうほどに……

「アタシ程度にびびるようじゃ、一夏の傍には居られないし近づけないわよ。半端な想いなら、やめたほうがましよ」

そういって、鈴は席を立って二人から離れた。二人は、ただ呆然と鈴の背を見送ることしかできなかった。

セシリア

二人とも、ずるいですわ！！！！ワタクシだけが置いてけぼりです！！！！！！！！

知らないのなら、これから知ればいいだけのことですわっ！！！！

あなた達と違って、スタートラインは遅いですが、絶対にワタクシ、セシリア・オルコットは負けませんわっ！！！！！！

第

一夏が私に対して、何かを悟らせたくないようだが、それは何なのだ？

一夏、絶対にお前からそれを聞き出してやる。鳳、お前には絶対に負けないからなっ！！！！！！

この時も私はやはり六年前と変わらない餓鬼だった。一夏が何を行っているかなど、考えもしなかった。

一夏の事を考えずに、自分のわがままを通そうとしていたのだ。それに気づいてすら居なかった。

あの人と千冬さんすらが恐れる”闇”がこの世界に至る所に存在していたことを……

その”闇”がこのIS学園に迫ってきていることを……

第漆話「鳳鈴音」（後書き）

こちらの鈴は、原作と違い千冬さんに対して強いです（笑）

今回は、ISによる戦い、ホラーとの戦闘は無しですが。鈴と烈花の絡みを書いてみました。

鈴は、あの曲を演奏できます。

原作と色々の違い今回は戦闘もなしですが、次回は原作よりも早くあの娘を登場させます。

一夏の一年前の出来事ですが、これは原作で言う第一巻が終わる頃に番外編的な感じで出してみたいと思います。

今回は、一夏の少しナイーブなところを出してみました。恋愛に関しては、少し臆病です。此処の一夏は……

それでは、次回予告を…

何事にも決して超えてはならない一線がある。

その一線を越えたとき、全てが崩壊し、今まで通りではなくなる。

それを警告する警鐘を決して、無視するな。

次回！「踏み切り」

その一線を越え、あるべきだった”日常”を知らずに壊してしまっ
た”誰か”を俺は知っている。

第捌話「踏み切り」(前書き)

前の投稿から、随分と間を空けてしまい申し訳ありませんでした。

一週間前に風邪をひいてしまい、声が二日ほど出せなくなっていました。

今週のGARROは、零がメインの回でした。

個人的に零こと絶狼は好きなキャラなので、久々に見えてよかったです。

今回のホラーは、人間をたぶらかしていたんですが、人間の方がホラーのを見せていた幻に心を奪われて、今を生きることが放棄してしまった所は、何とも物悲しいものでした。

零にとっても、つらかったんじゃないのかなと思うところがありました。

それでは、どうぞ……!!

第捌話「踏み切り」

放課後

鈴を見送ってからセシリアは、急ぐように第三アリーナへ向かっていった。

理由は言うまでもなく、自身が思いを寄せる男性 織斑一夏の元へ一刻も早く行きたかったからだ。

(ずるいですね。篠乃之さんも鳳さんも……ですが、ワタクシも負けてばかりではありませんっ！！！！)

先ほどの鈴の話を聞いて焦り、彼女は少しでも一夏と触れ合い、彼を知りたかった。

初めてかもしれない感情に任せるがままに彼女は走る。セシリアに鈴の警告は、届いていない。

一夏が抱えている”闇”を知ることが、彼女の日常が崩壊し今までどおりに過ごす事が叶わなくなる事を知らない……

それでもセシリアは、一夏を想う事ができるだろうか？

その頃、第三アリーナでは、既に一夏が蒼牙を展開して飛行訓練を行っていた。

接近戦を主体としているだけに、高速戦闘を得意としている。六枚に翼を使い、アリーナを舞う姿は華麗の一言に尽きる。

雪片を振るい、弓を使つて的を射るといふ訓練をひたすら繰り返していた。

「おい、一夏。これって、ゲームって奴か？」

「一応は、訓練の一環だけれど……確かにそれに近いな」

訓練の内容を見て、ヴリルが思わず口走つたのに一夏が言葉を返す。

ISの活躍の場は、ルールにのつとつた競技で競われる。見ようによってはゲーム、もしくはショーに近い。

「最強の兵器だと世間では言われているが、こうしてみると何かのファッションか、スポーツの道具にしか見えんな」

ヴリルは、IS学園の生徒と話す機会はないが一夏越しに見てみるとISは兵器というよりも、女性にとって何かのステータスに抑えられているように思えたのだった。

「これを皆が見たら、何と思うかな？」

一夏はISの競技について、仲間である他の魔戒騎士はどう思うだろうかと考えるのだった。黄金騎士辺りは”興味はない”の一言で済ましてしまいそうだ。

今は、セシリアとの訓練を約束をしているので彼女が来るまで待つことにするのだった。

一夏の様子をアリーナの客席から一人の女生徒が見ていた。

少し垂れ目の可愛らしい顔立ちの少し袖の長いIS学園の制服を着ている。

布仏 本音

すごいな。おりむー、専用機も凄いいけど、心身ともに強いおりむーには、憧れるな。

やっぱり、お姉さんが織斑先生だからかな。だから強いのかな、私とは違うんだよね。

私にもお姉ちゃんが居るけど、お姉ちゃんの妹としては凄く情けない。

私のお姉ちゃんは凄く優秀だ。専用機持ちほどではないけど、何事もテキパキとこなす。

それに比べて私は、のんびりしていて、悪く言えばトロイ。

おりむーは、お姉さんの事をどう思っているのかな？

世界的に有名な、雲の上の人と一緒に居て、辛くはなかったのかな。

優秀なお姉さんと比べられることを……

かんちゃんも私と同じように辛い、いや、かんちゃんの方がもっと辛い思いをした……

だって、かんちゃんは”更識楯無の妹”としか見られていなかったから……

本音がそう思っていると、いつの間にかピットからセシリアのブル
ー・ティアーズが飛び出していった。

そこは奇妙な空間だった。様々な線路が無尽蔵に引かれ、あちこちに墓標のごとく警笛を鳴らす踏切が存在していた。

あたり一面を警笛が鳴らされ、赤く点滅するランプによりそこに迷い込んだ”人間”の不安な表情を照らす。

「な、なによっ……何なのよっ！！！！ここはっ！！！！」

自分は先ほどまでショッピングを楽しみ、これから家路に着くためのモノレールに乗った途端にこの奇妙な場所に迷い込んでしまったのだ。

線路の上に佇む彼女を見下ろす影が対向車線の線路から歩いてくる。

「おやおや、お嬢さん。あなたも一線を越えられますか？」

対向車線から歩いてきたのは、駅長の制服を着た初老の男であった。

「一線つて何よっ!!!私は何したって言うのよっ!!!?!!」

イラついていたためか、女性は八つ当たりをするように男に食って掛かった。

「それより、此処は何処よっ!!!?!!どうやったら、出られるのよっ!!!?!!」

「フム、君はここに来て引き返すというのかね?ならば、選ぶがいさ、ここから引き返す道かこの先の一線を越える道かを」

「何よっ!?!それ、ふざけてんじゃないわよっ!!!役に立たないのならっ、あんたがやってきた道を辿れば戻れるんじゃないがっ!!!!!!」

女性は鼻息を荒くして、男を押しつけて道を進む。

「おや、お嬢さん?そちらへ行かれるのですか?そちらを越えては、あなたは戻れませんよ」

その言葉が届くはずもなく、女性は奇妙に交差した線路の上に来ていた。

「何よ此処は?どこに帰り道が……」

その瞬間、女性は前を見た。そこで、奇妙な形をした機械とも生き物ともいえないものを見てしまった。

「きゃあああああああああああああつ！！！！！！！」

辺り一帯に蒸気が立ち込め、女性の身体が霧散するようになして消えていった…………

「だから言ったのに…………あなたは戻れないって…………」

いつの間にかその場にたたずんでいた車掌の瞳に魔界文字が浮かび上がった。

「まあ、どのみち、戻すつもりはなかったがね」

意地の悪い笑みを浮かべて、彼はその場にたたずんでいた…………

IS学園 食堂

「…………一夏。お前、その量を食べるのか？」

箸は信じられないモノを見るかのように、目を丸くしていた。

「うん。此処のところは、多めに摂っておかないと身体が持たないんだ」

一夏の持っているトレイには、大盛りのご飯とかなりの量のおかずが載せられていた。

食が細かいかと思われていた一夏だが、朝はきつちりと取る為にかなりの量を食べる。

「朝は、一日の基本だ。これぐらいは普通だと思っけど……」

「す、凄いね、織斑君。さすがは、男の子？かな……」

「……この量であのスタイルをどう維持できるの？」

「……女の敵め」

「くっ、私なんか、量を減らさないと体重が増えちゃうのに……」

一夏のトレイを見て、女生徒達はそれぞれの言葉を吐いた。

「一夏のスタイルの良さは、既に広まっており、”女の敵”と認知されている。あの織斑千冬よりも細いという話も……」

「一夏の姿は、女が男装をしている感じでかなり倒錯的である。声もハスキーな千冬と比べると、かなり女らしい。千冬の声のほうに聞こえようによっては男に思えるかもしれない……」

制服越しからも分かる身体の細さに、女生徒達は溜息をつくしかなかった。それを見て筈は、

「あの身体の何処に、この量がい入るのだ？」

「何言ってるのよ。ちゃんと食べないと、この先きついわよ」

続いてきた鈴もかなりの量を探っていた。朝から豚骨ラーメンとチヤーハン大盛りである。

「こいつもこいつで……」

この小さな身体の何処に納めるつもりだろうかと疑問に思う筈だった。

「ねえ、おりむー。一緒に良いかな？」

そこへ少し間延びした声が挟んできた。布仏本音である。

「構わないよ。布仏さん。おりむーって？」

「あ、おりむー。私のことを知ってたんだ。織斑君よりもおりむーの方は馴染み易いと思って……もしかして嫌だった？」

「……別に構わないよ。私自身、そういう風に呼ばれたことはなかったので、少し戸惑ってしまっただけだ」

少し不安な表情を見せた本音を安心させるように一夏は笑みを浮かべて応えた。

「一夏、あんたも笑うようになったわね。少し前までは、アタシや身内以外に笑い掛けるなんて、そうそう無かったのに……」

鈴が一夏と本音のやり取りを見て、驚いていた。一年前の一夏は、少し殺気立っていて人を寄せ付けず、このように笑いかけるのは考えられなかったからだ。

「鈴。一年も経てば私も変わるよ、四六時中気を張るよりも、こういう時ぐらいは穏やかに居たいからね」

「ふ〜ん。何だか、零さんみたいな事を言うのね。そういえば、千冬さんと喧嘩をしていた時は、一時的に一緒に住んでいたのよね」

一年前に自分の家族を救ってくれた恩人の事感慨深く鈴は思い返した。生真面目で愛想の無い魔戒騎士の中では珍しく笑みを絶やさない銀牙騎士 涼邑 零。

鈴はあれから彼とは会っては居ないが、今日も何処かで護りし者として剣を振っているだろう。

「一緒に住んでいたとっ!?!?!?!一夏っ!?!?!貴様っ!?!?!男と同棲していたのかっ!?!?!?!」

二人の会話を誤解したのか、箒が青ざめた表情で叫んだ。

(ま、まさか…一夏は、そっちの気があるというのか?)

鈴の言っていた事はこのことなのかと箒は、絶望したような表情だった。

「……………箒。零さんとは、そういう関係じゃないよ。私は、これも”男性”だから…気にするなら”女性”にしたい……………」

「そ、そうか…よ、良かった。お前は見た目がそれだからな」

(…一夏。あなたは女でもあるんでしょ。その台詞は、少し危ないわよっ…!)

インターセックスの一夏は、男でも女でもあるので恋愛をすれば同性であり、異性であるというなんともややこしいことになるのだ。

「お、おりむー。どうして、お姉さんと喧嘩をしたの?」

「ああ、うまくは話せないが。意見がかみ合わなくなって、私の方から飛び出してしまったんだ」

「な、なにっ!? 千冬さんと喧嘩しただけに飽き足らず飛び出したっ!? お前は、何をしていたんだっ!?」

「ええっ、飛び出したって!?! どういうこと!?!」

古くから千冬と一夏の間係を知っている筈は、二人が喧嘩する事はないというぐらいの仲のよさを知っていたが、そんなことになっていたとは驚いてしまった。

一方の本音も千冬と一夏の仲の良さは、普段の二人の振る舞いを見ればよく分かっていたが、まさかそこまでの大喧嘩をしていたとは思わなかったのだ。

「これは、私自身のことだから話すことはできないけど、姉さんにとって、私のやろうとしていたことが許容できなかったんだ」

「そうよね。千冬さんって、かなり過保護だしね」

鈴が一夏の言葉に付け加えるように口を挟んだ。

「千冬さんが許容できないこととは、一体なんだ？」

篤は、重要となるその辺を聞き出そうと質問をするが

「すまないけど篤。こればかりは言えないし、篤を関わらせたくない」

「な、なんだと……」

思わず声を上げそうになるが、一夏が篤の知らない”怖い目”を向けてきたのだ。本音は、位置の関係で見えなかったが……

「そうなんだ、おりむー。お姉さんの事、どう思うの？だって、お姉さんは、凄く優秀で有名なんだよ。そのことで何か言われなかったの？」

「そうだね。姉さんの弟だからって色々言われたこともあるけど、私自身を大切にしてくれる姉さんをその事で、文句も言えなかった。

ISに関わってから、滅多に家に帰ってはこられなくて、私も寂しかったけれど、姉さんはもっと寂しがっていたかな」

「ええっ！？！織斑先生って、寂しがり屋なのっ！？」

「姉さんは、ああ見えて誰かに構って欲しいと思っているところがあるし、一人で居ると用も無いのに私に電話かメールをしてくるこ

ともあるしね」

一夏は、千冬と瓜二つなその顔に千冬自身が絶対に人に見せることの無い笑みを浮かべて

「姉さんは、雲の上の人かもしれないけれど私にとってはたった一人の姉で、私しか知らない可愛い一面も知っているから、姉と比べられても怒るに怒れなかったかな」

「……そうなんだ。おりむーは、ねえ、もし『いつまで食べているつもりだっ!!!食事は迅速に効率よく摂れっ!!!』」

ここで、一年の寮長である千冬の声が響き渡った。気がつけば、かなり話し込んでいたようだ。

食堂に居る面々の食事を取るスピードが上がる。

「遅れたものは、グランド十週だっ!!!」

「大変だよ。このグランドは一周がすーーーーーくあるから」

本音もいつもののんびりとした雰囲気を廃して、急いで食事を取る。

「まったく、もう少しゆっくりさせてよ。食事ぐらい」

あの厳しい烈花でも食事ぐらいは、ゆっくりさせてくれたぞと言いたかったが、何も言えずに鈴も急いで平らげるのだった。

一夏も一夏で食事を終わらせ、急いで授業へと向かう。

そんな一夏たちに視線を向ける千冬は少しばかり晴れやかであった。

(ふふふ、一夏。その微笑みは間違いなく私似だ。もっと笑えよ)

普段から強面であることは、千冬はよく理解している。偶に笑えば、お地藏さんのようだと言われれば、石の様に硬い笑みだと言われる。

一夏の笑みは、まさしく自分の理想としているモノだ。血の繋がった弟？の微笑み。姉である自分の微笑み。

「偶には、私も笑ってみるか」

その後、授業で生徒達に微笑んだのだが、逆に気味悪がられてしまい(特に真耶)、内心落ち込んだのは言うまでもなかった。

第

何だ、何だ？一夏の奴……、私に何も言わないとは、関わることじやないとか、お前は私を拒むのか？

それに風が、私の知らないことを知っているのがイラつく。

これでは、凰に先を越されてしまっじゃないか。私は、まだ一夏に思いを伝え切れていないのに……

あいつは返事待ちでと言っていた。一夏が私以外の誰かと一緒にいるのは嫌だ。

今までもずっと一夏を想ってきたんだ。あの頃からずっと……ずっと……凰よりもずっと前から……

分かっているが一夏は、私に対して恋愛という感情を抱いては居ない。一夏が私に抱いているのは、友情に近い親愛だ。

だけど、私は一夏と一緒にになりたい。だから、この想いを告げて、一夏と……

IS学園 整備課

学園にあるISを整備し調節する施設の一角に一人の女生徒が、一心不乱に最新式の空間ディスプレイに移る映像を見入っていた。

映像は、数日前に行われた一組のクラス代表決定戦である。そこに映る赤い鬘を持った蒼い狼のバイザーをつけたIS 蒼牙のデータ

を自身のISと比較していたのだった。

長方形の眼鏡を掛けた女生徒の名は、更識 簪。ISの日本代表候補生である。専用のISは、打鉄式。

簪

すごい……おそらくは接近使用であるが、遠距離と近距離の切り替えが早く、相性の悪い遠距離攻撃を主体とするIS相手にも遅れを取っていない。

使っている武器は雪片。かつて”ブリュンヒルデ”織斑千冬が持っていた”唯一の武器”。その弟の織斑一夏が使っている。

この戦闘スタイル、技量を見る限り国家代表とも互角に渡り合えるかもしれない。

……やっぱり姉が優秀なら、弟も優秀なの？私と違い……

私の姉は、更識楯無。この学園の二年生であり、生徒会長、そして唯一の国家代表だ。

一歳上で私を遥かに上回る才能を持った姉だ。いつも私よりも遥か

な先をいき、周りの期待に応えていった。それに比べて私は、周りの期待に応えられずに”どうして、あなたは姉と違うの”と期待を裏切ってしまった。

勉強、武術に関しても優秀な成績を収め、さらにはISの作成すら自ら行ってしまった。私にはできない事ばかり…………

織斑一夏は、男性であるためISに触れる機会などなかったはずなのに、選り抜かれた代表候補生を倒してしまった。

いくら、あのブリュンヒルデを姉に持つからといって、できることじゃない。やっぱり、優秀な姉には優秀な弟でなければならぬのだろうか？

もし、私に織斑一夏のような”才能”があれば…………きっと、”楯無の妹”じゃなくて、更識簪としてみてくれたらどう。

現に織斑一夏は、世界で唯一の男性のIS操縦者、”ブリュンヒルデ”織斑千冬の弟ではなく、”織斑一夏”として認められているのだから…………

四組の教室でも噂はよく聞く。”生真面目で勤勉家”、”男？というよりも寧ろ女”、”女の敵”、”プロポーションは、姉よりも優れている”。

とよく分からないが、彼はこの学園の話題によく上がる。ISの操縦もそうだが、織斑一夏の”美貌”があがることが多い。それは男としてどうなんだろうか…………

遠めにしか見たことがないが、織斑先生に瓜二つの外見だというの

は知っている……

一度、話してみたい……優秀すぎる姉を持つ者同士で……

放課後

一夏と鈴は学園の周囲を回っていた。ある一定の間隔で赤い符を目立たないところに貼り付けていく。これは、学園にホラーが入ってこれないようにする為の策である。

「一夏、何なのよ此処は。下手すれば陰我のゲートになりそうなのはっかじゃないの」

一夏と鈴が学園を散策するたびに見つけたものを見ては、封印を行ったが、その数がかかり多いのだ。

「ヴリルも言っていたけど、此処には陰我の要素がかなり多い。姉さんは、ここにホラーは現れないと考えていたみたいだけど……」

「そうね、アタシも言われたわよ。ここには、アレは現れないって……でも、直ぐ近くまで来ていたのよね」

二人は、IS学園の向こうに見える都市に目をやった。あの都市には多くの陰我が存在しているのだ。

「まったくだぜ。あの”白騎士事件”でISの”力”が証明されてから、こんだけ経っているのに、今までIS学園に現れなかったのが不思議だったんだぜ」

ヴリルが二人に同意するように口を挟んだ。

「”白騎士事件”ね。何で、あんなことをやったのかしら……あんな事をしなくても他に道はあったはずなのに……」

鈴は、自身の家族を滅茶苦茶にした原因である”ISがしでかした事件”に対して吐き捨てた。本来は、宇宙での活動を目的としたパワードスーツなのに…それを兵器としての”力”を見せ付けたことに対して……

白騎士事件

IS発表から1カ月後に起きた事件。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピュータが一斉にハッキングされ、2341発以上のミサイルが発射される。

その約半数をIS「白騎士」が迎撃した上、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦

などの軍事兵器を撃破した事件。

この時の死者は皆無だった。この事件以降、ISの関心が高まることとなる

「あんな事を起こさなければ、ここまでホラーも多くは出てこなかったはずなのよね」

”女尊男卑”による陰我。ISの力によって齎されたモノ。その陰我も様々な形が存在しているが、これによって、ホラーが大量に現れるようになった。

思いつ上がった女性の虚栄心、その女性へ復讐するためにホラーの呼びかけに応える男性、理不尽な理由で家族を奪われた者などの心の陰に付け込みやすくなっている。

「千冬さんも篠乃之博士も、思いつ上がりすぎよ。あの時ISの力で何でもできるみたいに考えていたのかしら」

「鈴」

「あの白騎士事件は、世間じゃ謎だって言ってるけど、魔戒法師や番犬所は、事件の犯人が誰か分かっているわよ」

鈴は、再び符を貼り付けてから、次の場所へ足を進めるのだった。

一夏

白騎士事件。アレは、東さんがISを発表してから一カ月後に起こった事件。日本に向けられたミサイルを最初のIS 白騎士が迎撃したというもの……

その白騎士の正体は謎に包まれているが、私は開発者の東さんから聞いている。白騎士の操縦者は姉さんだということを……

発表したISは、そのあまりに突飛な発想ゆえに世間に受け入れられなかった。当然、東さんは腹を立てたが、それで世間の認識が変わるわけではないので、ISを放り出して別のものを作ろうとしたらしい。

だが、放り出したISに目をつけた人が居た。その人が姉さんだった。姉さんは、東さんに”計画”を持ちかけた。それこそが”白騎士事件”の大元のシナリオだ。

”ちーちゃんが、ISで白騎士事件を起こしたのは、私利私欲のためじゃないんだよ。全ては、いっくんが傷つかないように……”

”それに、あそこまで派手にやっちゃったのは、束さんが調子にのりすぎちゃったから……”

全ては、私 織斑一夏の為だった。白騎士事件が起こる前に私は、姉さんに……

”この前、女の子に気持ち悪いって言われちゃった”

”どうしてだろう、好きってのがよくわからない”

”ねえさん、ワタシって気持ち悪いかな？女の子と男の子の好きがよく分からない”

ただ何も言わずに姉さんは私を抱きしめてくれた。気丈な姉さんが少しだけ泣いていたのを今も覚えている。

”何を言う……私にはお前しか居ないんだ。大丈夫だ一夏。私がお前を護ってやる。絶対に、世界にお前を傷つけさせはしない”

だからこそ姉は”力”を求めた。最強であるために……何より私を護るために……そして、踏み越えてはならない一線を越えてしまった……

白騎士の名前は、姉さんが付けた。何色にも染まらない唯一の色。私という男女どちらでもない IS”インターセックス”の私を護る”名前”として……

この話を聞いて、真っ先に思ったのは”余計なお世話だ”と言いたかった。別に私は、姉に最強になってもらいたいと思わなかった。ただ、傍に居てくれるだけで……よかったのに……

ISを得た姉さんは、夢中になれるものを見つけて少しだけ嬉しそうだった。私は、幼いながら姉さんが苦労しているのは分かっていた。

そんな姉さんが辛いことを忘れられるのならと……姉さんが傍に居られなくなるのは寂しかったが、私はそれでも良かった……

その頃、私は師匠の言う”護りし者”としての生き方に憧れを抱き、今に至っている。

姉さんは、私に魔戒騎士を辞めて欲しいと事あるごとに言っている。私は辞めるつもりはない。

私のこの手は、姉さんと違って多くの血に塗れている。ホラーに憑依した人間を狩ることは、その人の命を絶つことだから……

人々を護るためとはいえ、罪を犯している事は事実だ。だけど、私は”魔戒騎士”だ。護りし者、闇を照らす希望の光とならなければならぬ。

たとえ、心を、友を……愛を全てを失おうとも……この”信念”だけは捨ててはならないのだから……

夕方の駅にはたくさんの人達が居た。帰宅時のラッシュなのか、皆が皆周りを鬱陶しそうにしていた。

「まったく、これだからこの時間は嫌なんだよ」

一人のサラリーマン風の男が苛立つように目の前に来た列車の窓越しから車内を見た。車内は、やはり人で溢れ返っており、乗車することは困難であった。

<申し訳ありません。ただいま、人身事故の影響でダイヤルが乱れています。お急ぎのお客様には申し訳ございませんが、今しばらくお待ちください>

聞こえてきたアナウンスに男は、軽く舌打ちをした。この時間は、特に混む時間である。それで、遅れれば暫くは乗れないし、乗れても降りる駅で降りられるわけではない。

苛立った男は、駅のホームから離れた。ここにいるのが嫌になったからである。

男は駅の中の喫煙所で時間を潰そうと考えていたが……

「おやおや、また人身事故ですか。最近、多いですね、このご時世

は

いつの間にか自分の真横に駅長と思わしき人物が立っていたのだ。

「ああ、そんな話は良いんだよ。早く動かしてくれ、言い訳はいからさっ!」

苛立ちをぶつけることができた男は、駅長に食ってかかるが、駅長はやっぱりとした態度で

「ええ、あなたにこの一線を越えられる覚悟がございましたら、ぜひこちらの路線をお勧めしようと思っただんですが、よろしいでしょうか?」

「なにっ!? 動いているのかっ!?!」

「はい。私のコネで一般には知られていない路線ですよ。この一線をあなたは、越える覚悟がありますか?」

気が付くと駅には、男と駅長以外の者は誰ひとりとしていなかった。駅長は、男の正面に立ち、足もとを指さす。

「ここが、踏み越えるべき一戦です。どうですか、越えられますか?」

「ああ、何でもいい。早くしてくれっ!!--!」

もったいぶるように語る駅長に男は、話を詳しく聞かずに”その一線”を越えてしまった。

「よつこそ、こちらの”世界”へ」

駅長の目に”魔界文字”が浮かび上がったと同時に口から大量の蒸気が噴き出された。

「な、何なんだっ!!?!?!!う、うわああああああああっ
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

口から吹き出された蒸気は、一瞬にして男を包み込み、霧散するよ
うに肉体が散ってしまったのだ。

再び景色は、ラッシュでこった返す駅の風景に戻ってしまった。駅
長は、先ほど正面に立っていた男が持っていた鞆を一瞥して、人混
みの中へ紛れてしまった……………

翌日 日曜日

一夏は、自身の所属する西の番犬所に足を運んでいた。現世とは違
う異界である此処は一般人が決して立ち入ることできない。

『一夏、ここ最近は苦勞を掛けますね』

白い衣を纏った若い男が一夏に勞いの言葉を掛ける。

「いえ、特に支障はありません」

『そうですか、お前がISを動かしてから他の番犬所はお前の追放をも叫んでいましたが、我々はある限り、お前のサポートを行うつもりです』

「こちらこそ、苦勞を掛けます」

一夏も頭を垂れ神官に言葉を返した。

「東西南北の番犬所が揉めるのは、仕方ない。最初は、あんたも一夏をいい目で見なかったのに、変わるものだな」

ヴリルが、勞いの言葉を掛ける神官に少し皮肉の言葉を掛けた。

「ヴリル、口が過ぎるぞ」

『その魔道具の言葉は事実だ。一夏、お前の騎士としての覚悟と振る舞いは、まさに魔戒騎士として相応しいもの、それを認めなくて何とする』

「あなたには、手を煩わせてばかりです」

『東に移った”あの男”と比べれば、あなたの方が品があります』

この西に所属していた”あの男”こと、涼邑 零。かつて西に居た頃は、数々の掟を破り、番犬所を困らせていた問題児だった……腕が立っていた分、扱いが厄介でもあった……

そんな男でも一夏にとっては頼りになる先輩であるが……

『それと、またIS学園周辺に近づこうとしているホラーが現れました』

神官は、一夏に指令書を手渡した。

休日、簪と本音は久しぶりにショッピングを楽しんでいた。

「ああ、この女の人の声、おりむーに似てるっ!!」

「ねえ、本音。織斑一夏って、セイーの声なの？」

立ち寄ったアニメショップで流されているアニメに出てくるキャラクターの音が、”織斑一夏”と似ているようだ。

「うん、凄く似ているよ。男の子の声じゃないんだ」

男として、それはどうなの？と簪は思った。

「それにおりむーは、凄く優しいんだ。セシリアさんに酷いことを言われたのに、それを笑って許したんだよ」

「そうなの……」

簪は、本音が織斑一夏に夢中になっている事を感じた。それは憧れから来ることに……

「この前の授業で、ISで地面を蹴って跳んだんだ。そしたら、織斑先生に怒られたんだ」

常におりむーはと話す親友に対して、簪は織斑一夏に益々興味を抱いた。

男性のIS操縦者ではなく、一人の人間としてどのような人物で何を思っているのかを純粹に知りたいと思うのだった……

二人は、その後、本音の趣味である着ぐるみの専門店へ行ったり、簪の趣味である特撮ヒーロー関係のショップを巡ったりと楽しい時間を過ごしていった。

IS学園へ戻るべく、簪と本音は、モノレールを待っていた。

<線路で事故が発生しました。ただいま、運転を見合わせています>
駅の構内でアナウンスが響いてから、すでに三十分が経過した。直ぐに立て直しがされるであろうと考えていたが一向に改善される様子がない。

「かんちゃん、モノレール遅いね」

簪も本音と同じことを思いつつ、モノレールを待つ。

「おやおや、IS学園の方ですか？まもなく、列車がきますのでもう少しだけお待ちください」

二人の背後に人のよさそうな笑みを浮かべた駅長と思わしき男が立っていた。

「ええ、まだ掛かるんじゃない……」

本音が言い切る前に、列車が目の前に到着した。

「どうぞ、こちらへ……」

促す駅長に対して、本音と簪は何も疑わずにモノレールに乗り込んだ。

それと同時に、動き出した。だがこの時、二人は気が付かなかった。駅で待っているのは自分たち以外にも居て、その人達がこのモノレールに乗らなかつたことに……

二人の姿は突然、消失したかのように駅から消え去ってしまった……

……

、

IS学園

IS学園の屋上で千冬と篝の二人が対峙していた。篝から千冬に話したいことがあつて此処に、来てもらったのだ。

「織斑先生、いえ、千冬さん。この六年の間に一夏に何があつたんですか？」

不安な表情を浮かべ、千冬に尋ねる篝。対する千冬も一夏の事を思いっ少しだけ辛そうな表情を見せた。

「ああ、お前も薄々違和感に気づいていたんだな。確かに今の一夏

は、お前の知っている記憶とは違う」

「それは一体なんですかっ!?!私にできることがあればっ!?!?」

今の一夏の事を少しでも知りたいといわんばかりに声を上げるが…

……

「悪いが、お前にできることは何も無い。私や東ですら、”力”が及ばない場所に一夏は居るのだぞ」

「なっ!?!あなたですら及ばないとは、どういうことですかっ!?!?!」

「篠乃之、私を買いかぶりすぎだ。私を上回る”力”など、吐いて捨てるほど存在する」

千冬の脳裏に一年前の光景が浮かぶ。

鎧を召還し、奇術師を思わせる異形との戦いの最中、私は一夏を助けようと戦いの中に割り込み

” 姉さんっ!!?!?! ”

ISの絶対防御をも貫通する攻撃に私は、成すすべも無く叩きつけられたのだ。

” 一夏、一旦鎧を解除しろっ!!?!?!このままじゃ不味い!!?!?! ”

不屈きモノが悲鳴のように叫んだ。一夏は、それを聞き入れることなく異形を睨みつけるように立っていた。

” うわああああああああっ!!?!?!?!?! ”

一夏の鎧が変化したのだ。大きく盛り上がり、巨大な獣を思わせる姿に……

” ウオオオオオオオオオオオッ!!?!?!?! ”

夜に咆哮する獣が一夏とは思えなかった。鎧越しに見た一夏は……

あの時、何もできなかったことを千冬は今も嘆いていた。世界最強のブリュンヒルデの称号も何も役に立たなかった。ISも……

ホラーには何もかもが通用しない。ISですらも滅ぼすことが叶わない。例え第六世代を越えても……

「……千冬さん。どうしたんですか？」

拳を握り、震えている千冬に対して篝は戸惑っていた。

「いや、なんでもない。篠乃之、悪いことは言わない。一夏の事をお前が好いているのは知っている。だが、一夏に深く踏み込むな」

「……それは、何故ですか？私では、力不足といたいたいのですか？！？」

「それを言うなら、私も力不足だ。一夏が関わっている闇は知ってはならないんだ」

その言葉に千冬は、噛み締めるように言う。ホラーと魔戒騎士の世界は、多少は裏の世界の事情を知る千冬ですら恐れるもつとも深い闇の世界なのだ。

おそらくは、他の者達も恐れ関わることを避けている。IS委員会を悩ませている”亡霊”ですらも……

「篠乃之、一夏の闇には踏み込むな。踏み込んだら、お前は今まで通りにはいなくなるぞ。私や束のように……」

千冬のいつになく真剣な目に箒は何も言えなくなった……

「それと夜はなるべく出歩くなよ」

背を向け、千冬は屋上から去っていった。その背を箒はただ見る以外に何もできなかった。

千冬

我ながら、悪役に徹しきれないな。篠乃之には可愛そうだが、お前が闇の世界を知ってしまえば……

何もできない自分自身に苛立ち、間違いを犯してしまうかもしれない。

そうなってしまえば、一夏を再び危険な目にあわせてしまう。今夜もホラー狩りに行くだろう。

相手は、IS学園を目指しているわけではなく周辺をうろついているらしい。まったく、どうしてIS学園に近づいてくるのだ。

腹立たしいが、私にできることは一夏を想う少女を闇の世界に近づけないようにするぐらいだ。それが一夏を想う心を否定してもだ……

一番は、一夏が魔戒騎士を辞め、ISにも関わらずに日常を生きて欲しいこと……

この学園に來ればと……淡い期待すら抱いていたが、それは裏切られてしまった……

もうすぐ夜が来る……ホラーと魔戒騎士達の時間が始まる……また、私の家族が手の届かないところに……

以前、私は一夏に”お前達、魔戒騎士はいつも親しいものを悲しませているのか”と問い詰めたことがあった。

一夏は”必ず戻る。だから信じてほしい”と言う。これは、あいつが目標とする黄金騎士の言葉であり、その黄金騎士にも愛する者がいる。

その者は、ただ一途に黄金騎士の無事を祈り、会えるときには会えると言っているらしい……

その頃、一夏はIS学園周辺の駅にホラーの気配を感じ鈴と共に来ていた。

「くそつ、二人ほど自分の結界の中に招き入れやがった」

「結界か……今、相手は何処に居る？」

「さあな、結界事態がややこしいからな。今日中に探せるか……」

ヴリルの言葉に一夏は、少しだけ口元を歪めた。

「一夏、ちょっと……」

鈴が一夏の袖を引っ張る。この場から移動したいようだ。

「鈴、何か分かったの？」

「ここじゃ、あの子が目立つからこっちに……」

鈴と共に一夏は、駅から少し離れた公園に来た。

「この子が、ホラーの気配を感じているわ」

鈴が連れている魔戒魚が身体を震わせて応える。

「でかしたぞっ！……！」

ヴリルの言葉に気を良くした魔戒魚は宙を撥ね、二人をホラーの居場所まで案内するのだった……

モノレールに乗り込んだはずであったが、何故か古びた列車の車両の中に二人は居ただ……

「ねえ、かんちゃん。此处、何処なの？」

本音は、親友である簪に問いかけた。その表情はとても不安げである。

「わからないわ。何処かの誰かが私達を誘拐したのかしら？」

確証はないが思い当たることはある。自身の生まれである更識家は日本の暗部に所属している。故に他の暗部に関わる者から敵対されている。

このIS学園の裏の事情は姉が対応している。その姉に揺さぶりを掛けようと自分を”標的”にすることは、十分にあり得る話だ。

モノレールなのに、何処か昭和の雰囲気を放つ奇妙な列車の中に迷い込んでしまった。

乗客は誰ひとりとしておらず、照明器具もまばらで薄暗く、吊皮が不自然に揺れている。なにより、窓の向こうの景色が見えないのだ。夜でも外の街灯は確認ができるのに、それが確認できないのは、はつきり言って異常だ。誘拐にしても、あまりにおかしすぎる。

簪自身も不安ではあるが、親友が一緒にいる以上取り乱してはならないという考えから、彼女自身が驚くぐらい冷静でいられた。

「はははははは、お譲さん達、別に誘拐と言うわけではないですよ。あなたの方が、今の自分よりも進みたいと言っことから、この一線を越えられたのだよ」

突然、年齢のいった男の声が社内に響いた。いつの間にか自分達の前に立っていた。

「……………?!?!?!」

「……………おじさん。誰なの？」

簪は、現れた人物に対して驚きながらも警戒の色を浮かべた。先ほどまで居なかつたのに、今まで居たかのような存在感を持つ人物に只ならぬモノを感じたからだ。

本音は、そんな簪の気持ちを察せず男に問いかけてしまった。

「先ほどお会いしたではありませんか、私は、先ほどの駅長であり、

「この列車の車掌だよ。お譲さん」

車掌は好意的な笑みを浮かべた。本音は、安堵の息をつくが、簪は彼女を庇うように前に立ち、

「だったら、この列車はどこへ向かっているんですか？他の人たちは何処に？」

少しばかり目を鋭くして、簪は車掌に問う。状況があまりにもおかしすぎるのだ、誰ひとりとしていない列車。突然現れた車掌など、考えれば考えるほどおかしい。

「ああ、他の者たちは私達が”食った”。皆、自ら”一線”を越えてしまったのだ、皆、日常には未練はなさそうだから、罪悪感を感じないがね」

「……………食べた……………食べたって、どういうことなの？車掌さん」

本音は、気味の悪いことを言う車掌に恐怖すら感じていた。彼女も気づき始めたが、この状況は明らかにおかしすぎるのだ。

「ふざけないでっ！！！！真面目に答えないと私にも考えがあるわっ！！！！！！！！」

簪は自身の専用機である打鉄式を展開させる。ISをここで勝手に使うものなら、重大な問題ではあるが、この状況を打開するには、これしかない。簪は考えたのだ。

「……………ほう、ISか。となると君は、代表候補生かな？これは、そのまま食べるのは失礼だな」

先ほどの人のよさそうな笑みとは違う悪意を持った笑みに、簪は牽制と言わんばかりに近接用の武装であるナギナタを展開し、それを車掌に切りつけるのだが、

「おやおや、脅して私を制することができると思っただけか？悪いが、その甘い考えは捨てたほうが賢明だよ」

車掌は、恐れることなくISの武装を素手でつかんだのだ。只の間であるはずの彼はあろうことが力づくで武装を簪からもぎ取ったのだ。

「ええっ！?!?!」

本音は、目の前で起こった光景に対して声をあげてしまった。それは簪も同じだった。ISの力は、人間はおろか既存の兵器を上回るものなのに、こんなことができる人間が存在するなどあり得ないからだ。

「”IS”の力では、私は、倒せないっ!!!!!!」

車掌はそのまま、ナギナタを砕いたのだ。ただ砕いたのではなく、奇妙にゆがみ、まるで粘土細工のようにボロボロに腐ったのだ。

「そ、そんなっ!?!?!なんでっ!?!?!」

驚きの声を上げる簪は、すぐに冷静さを取り戻し

「本音っ!!!!!!早く逃げてっ!!!!!!」

今、親友を護れるのは自分だけだと思い、簪は背中に搭載されている荷電粒子砲で再び牽制を図るが

「先ほども言ったが、牽制などと言う甘い考えはよした方がいい」
右手を正面に掲げると同時にすさまじい衝撃が簪を襲つ。

「きゃあつ！！！！！」

絶対防御すらすり抜け、はるか後方まで吹き飛ばすほどの衝撃だった。簪は倒れ、ISも解除されてしまった。

「か、かんちゃんっ！！！！！」

急いで簪の元へ駆け寄ろうとする本音であるが、その行く手を阻むように車掌が彼女の肩を掴んだのだ。

「君には、まだ役目があるのだよ、お譲さん。君をまず最初に喰らい、あの娘に絶望を見せつけねばな」

車掌の力は凄まじく、一介の女子である本音では振りほどくことはできなかった。

「やつ、は、放してよっ！！！」

「本音を放してっ！！！！！！！」

本音と簪の言葉を無視するように車掌は、口を開け、彼女を喰らおうとしたその時だった。

突然、車掌の正面に奇妙な文字を含んだ円が現れ、吹き飛ばしたのだ。本音はいきなりの事に啞然としてしまった。

何が起こったのかまったくわからなかったのだ。

「間一髪だったわね。こここの”結界”を探すのは苦労したわよ」

本音が振り返るとそこには、転校生の鳳鈴音が大きな筆を携えて立っていた。背には大きな旅行カバンも……

「リンリン、どうして此処に？さっきのは、一体何？」

よくわからない事態に対して、本音が聞き出そうとするが……

「それは今、ここで言うべきことじゃない」

応えたのは、簪の隣に立っていた織斑一夏であった……

「やれやれ、とんだ邪魔が入ってくれたものだな。貴様、”魔戒騎士”か？」

制服に着いた汚れを払いながら車掌は、腰を上げて一夏に問う。

「ああ、そうだ。お前達を”狩る”ものだ」

「一夏、気をつける。こいつの名は、スチーム。性格の悪さで有名なホラーだ。少し厄介だぞ」

ヴリルが目の前にいるホラー スチームに対して解説する。

「性格が悪い？心外だな。私は日常に不満を持ち、一線を越えたいものだけを喰らう。他のホラーと違い、健全だとは思っただが……」

「何を言う。お前のはつきりしない言い方では、そうは聞こえない」

一夏がスチームの言葉を否定する。否定されたスチームは、少しだけ頬を歪ませ

「くくく、随分な良いようだな。まあいい、食事の前に少しだけ運動をするのも悪くはない」

「その食事にありつくことは永遠にない」

魔戒弓を構えて、一夏はホラー スチームと対峙する。

「布仏さんとそっちの子。早くこの場から退散するわよ。一夏の邪魔にならないように……」

鈴は、二人にこの場から共に離れる事を促す。

「え、でもおりむーが」

一人、あの恐ろしい存在に一夏が戦うことに本音は不安を覚えていた。ISですら倒してしまう恐ろしい相手なのだ。

特に簪は、相手の恐ろしさを間近で接したために不安は本音の比ではなかった。

「大丈夫よ、一夏は必ず戻ってくるわ。絶対に勝つから」

「そんな根拠はどこにあるの？」

「根拠ね……それは、アタシが一夏の”強さ”を信じているからよ。魔戒騎士、ううん”護りし者”としての一夏を……」

鈴の目は、何よりも真剣であった。純粹に一夏を信じているのだ勝利すること……

彼女の真剣さに充てられた二人は、促されるようにこの車両から離れるのだった。

車両から飛び出した鈴の前に、自身の相棒である魔戒魚が現れた。

「ありがとう。出口までお願いね」

宙を舞う魚に対して、簪と本音は驚いたが、そんな状況ではないと察し鈴の護衛と案内の下、結界の外へと抜けたのだった……

「あの小娘達が無事で帰れると思っているのかね？思っているのなら……甘い」

スチームの言葉に一夏は

「私は、鈴を信じている。彼女は、私と共に戦う”魔戒法師”だから」

「くくく、ならばお前を倒し、絶望させてやろう!!!!!!」

スチームは、一気に距離を詰めるべく駆けだし蒸気を纏った拳を一夏に叩きつける。

魔戒弓でこれを一夏は防御する。拳に籠っている蒸気の暑さが僅かだが伝わってくる。

「気をつける一夏。こいつに掴まれたらやばいっ!……!」

ヴリルがスチームの戦力を分析し、一夏に伝える。確かに掴まれたら火傷だけでは済まされないだろう。

その間にもスチームと一夏の攻防は続く。長身の身体を生かしたスチームの蹴りと拳は一夏の急所目がけて放たれるが、一夏はこれを魔戒弓でいなし、切りつける。

振われた刃をスチームは、蒸気を纏った手刀で受け止めてカウンターの浴びせる。

「くっ!?!」

カウンターが一夏の頬を僅かに掠め、蒸気の熱のため頬が少しだけ赤くなる。火傷をしたためである。

「ハハハハ、少しは男らしくなったのではないか？」

スチームが一夏に対して余裕の言葉を吐く。対する一夏は、いつものように……

「私は、どちらでもない。だから、この顔に傷を付けられてもどうとは思わない」

内心、姉か鈴に知られたら怒られるだろうと思いつながら、一夏は反撃のために距離を取り、矢を放った。

「おいおい、一夏。女が顔を傷つけられて、その台詞はないぞ」

「うるさいぞ、私はどちらでもない。だから別にどうという事はない」

場違いな台詞を言うヴリルに怒りながらも一夏は、スチームに対して
立て続けに矢を放つ。

スチームは矢を徒手空拳で弾くが、時間差を置き虚を突くように放たれる矢にはさすがに反応しきれなかったのか、身体に受けるてしまった。

放たれた矢は、肩と左膝に突き刺さる。それを確認したうえで一夏は距離を詰め、刃で切りつける。

これを再び迎え撃とうとするモノの肩をやられ、うまく動かすことができずに反応が遅れてしまい、スチームは正面から鋭い斬撃を受けてしまった。

さらに追い打ちを掛けられるように一夏から強烈な拳が顔面に胸部に蹴りが加えられて、スチームは後方に倒れてしまった。

被っていた帽子も飛ばされ、一夏の足もとに落ちていた。

「はははははっ！！！！随分とやってくれてるではないかっ！！！！
さすがは、あの織斑千冬の弟、いや、妹か？」

「私の事を知っているのか？」

スチームは、痛む傷にうめきながらも言葉を続ける。

「ああ、あの女には本当に感謝している。お前と言う”存在”のために、この世界を我々が住みやすい場所に変えてくれたことを…そうそう、篠乃之博士にも感謝だな」

立ち上がったスチームはさらに

「それにしても皮肉なモノだ。お前のために世の中を変えた姉の成果をお前が否定するとは……」

「ああ、確かに姉さんは越えてはならない一線を越えてしまった。だけど、まだやり直せる」

一夏は、千冬が自身に言う”まだやり直せる”と言った言葉をそのまま自身が口にしたことに驚きながら……

「たとえ世界が醜く姿を変えたとしても、そこに愛する者、護りたい者が居るのならば、私たちは前に進める。どんなに辛くとも乗り越えられる」

一度変わってしまった世界は、二度と元には戻らない。だけど、それを悪い方向ではなく良い方向に持っていくことも可能はずだ。

闇に包まれてもそれを切り裂く希望がある限りは……

「そうか……ならばそれを乗り越えてみるのだなっ！！！！！！」

スチームは身体から蒸気を大量に吹き出したと同時に頭上へ勢いよく飛びあがった。車両の屋根を突き抜けた。

それを追うように一夏もスチームが開けた穴へ飛びあがった。

飛び上がったと同時に、強烈な熱を持つ鉄の塊が向かってきたのだ。それを魔戒弓でいなし、屋根に立ち、視線を前方に向けた。

そこにはホラーとしての姿に変化したスチームの姿があった。特長的な三角系の頭、目深に帽子をかぶった駅長と出っぷりとしたお腹と脚が特徴的で至る所から、配管が出ている。

生き物と言うよりもロボットと言った方が近い外見である。

スチームの手は、五指が異様なまでに長く太い。指と言うよりも五つの大砲としかいえない。蒸気が身体の配管から吹き出すと同時に五つの大砲から攻撃を仕掛けてきた。

それらの攻撃を避けるのは困難であつと判断したのか一夏は、鎧の召喚を行う。いつものように頭上に掲げるのではなく正面に円を描き、そこへ駆けだすと同時に鎧が装着された。

緑の目を持った蒼い狼を模した騎士が、大きく変化した魔戒弓をスチームの攻撃にひるむことなく突き進み、肘ごと切り伏せた。

腕を失ったスチームは、バランスを崩しよろめくが、反対の腕で蒸気の力を上乘せした拳を一夏に叩きつけるものの、そのまま掴まれ逆にねじ伏せられてしまった。

「はあああああつ！！！！！！」

一夏は渾身の力を込めた蹴りをスチームの大きく出た腹に加え、車の両の屋根から落としたのだった。

屋根から落ちたスチームは、態勢を整えようとするのだが、迫ってきた一夏に大きく振りかぶった魔戒弓による斬撃により真っ二つに切り裂かれスチームはそのまま弾けるように消滅してしまった。

消滅したスチームに合わせるように結界が消え、どこか分からない古びた駅の構内に一夏は佇んでいた……………

「なあ、一夏。本当はお前、顔を傷つけられて怒ってたんじゃないのか？」

ヴリルが改めて一夏に聞くが、一夏は無言のまま頬につけられた傷を抑えてこの場を後にするのだった……………

その後、学園で鈴と合流し頬の傷を指摘されたのはいつまでもなかった。

翌日の昼休み、IS学園の中庭で一夏と鈴、本音と簪の二人が居た。

二人から一夏と鈴を誘い、この場に来ているのだ。

「ねえ、おりむー、昨日のアレは何だったの？」

「……………」

本音と簪は、昨夜の事を一夏に尋ねた。

「アレは、魔獣 ホラー。遙か古の時代より闇の潜んでいた魔獣。

奴らは、人間の魂と肉体を食らうためにこの世界に現れる」

「昔から…ISができる前から居たの？」

簪の言葉に一夏はうなずく。

「そつよ、中国四千年の歴史よりも前から居たわよ」

鈴が応える。

「それ以上のことを知る必要はありませんわ」

そこへ本音が大人びた容姿の女生徒が現れた。一夏達を睨むように立つ。

「お、お姉ちゃん。」

「虚さん」

虚と呼ばれた女生徒は、本音と簪の二人に

「あなた達は、下がりなさい。これ以上”魔戒騎士”には関わってはなりません」

「それって、どういう……」

「質問は許しません、本音。あなたは知らないでいいの。昨日のこととは悪い夢だと思いなさい」

虚は睨みを聞かせながら、一夏と鈴を見る。

「昨晚、妹と簪お嬢様を助けて頂いたことには感謝します。ですが、これ以上ここの生徒たちとは、関わらないでください」

言われなくても一夏と鈴は分かっていた。本来、自分たちはこちら側の人間ではないのだ。

自分たちが関わることで、闇の世界の存在を知ってしまう。

「分かっているよ。私たちがここでは、異物でしかないことは……」

一夏の言葉に鈴も同意するように頷いた。

「そうですね、本当ならあなた方の入学は反対だったのですが……関わらないようにと言っておくぐらいしか『虚』。そういう訳にはいかないじゃない』

虚の言葉を遮るように第三者の声が響いた。

「会長……」

現れたのは、簪が大人びたような外見の女生徒だった。

「あなたは……」

「私の名は、更識楯無。ここの生徒会長よ、織斑 一夏さん。いえ、織斑 一夏君と言った方がいいわね」

楯無は、一夏に対して何かを含むように言う。これに対し、一夏は少し睨みを利かせるが

「うふふふ、そう睨まないで。あなた、とっても可愛いんだから」

「男がそう言われても嬉しくはないよ、更識 楯無 生徒会長」

「更識？てことは、お前が番犬所が言ってた協力者か？」

ヴリルが会話に入ってくる。まさか、ここで更識の名を聞くとは思わなかったからだ。

「ええ、そうよ。もしかして、魔導具って奴？話には聞いていたけど、本当に喋るのね」

一夏は、胸からヴリルを取りだした。アクセサリーが喋るのを見て、鈴以外の面々が驚いていた。

「じゃ、しゃべった……」

「んなことは、どうでもいい。更識 楯無 生徒会長。まさか、おっぴらにその名前を名乗ってるんじゃないだろうな？」

少し気になったのか、ヴリルが楯無に聞いてみた。

「ええ、そうよ。私の名前は更識楯無って、さっきから言ってるじゃない」

その言葉に一夏は……

「ヴリル、更識楯無は隠し名だったよね」

「……ああ、そのはずだったんだが……世の中、随分と変わった物なのかね〜」

すつとぼけたように返すヴリルに一夏、鈴は呆れた視線を向けるのだった。

「ふふふ、その辺りはいいわ。お姉さん。あなたがちょっと気になつてるのよ、織斑君」

楯無は、扇子を手にとって笑みを浮かべる。その笑みは、虚がよく知る楯無の悪癖ともいえるものだった。

「お嬢様。この場では、お控えください。魔戒騎士に面白半分に関わっては……」

「番犬所からの要請は受けるわ。だけど協力者として、あなたの実力が見たいわ。だから、あなたにISで勝負を申し込むわ。織斑君」

「お嬢様っ！……！」

虚の言葉を見無視するように飄々と一夏と話を進める楯無に苛立ちを覚えた。だが、虚は何も言えなかった。

番犬所からの要請は、断ることができない。

更識家は、日本の暗部に関わる影の一族である為に闇の世界には少なからずの関わりがある。

魔戒騎士を擁する”番犬所”とは、それなりにつながっているのだ。過去に前当主が黄金騎士とも交わったことがあるが、それはISが

できる前の事である。

「断つてはだめよ。男の子が売られた喧嘩を買わないのはどうかと思うわよ。女の子でも挑戦は受けるわ」

やはり一夏に対して含む言い方である。一夏は……

「分かった、そうまで言われたら受けないわけにはいかない。受けよう、その挑戦」

「良いわよ、それでこそ”男”だわ。勝負の日取りは後で連絡するから、それまで楽しみにしていてね」

軽く手を振って、楯無は虚を伴って去って行った……

その様子に一夏、鈴は、

「一夏……アタシ達、平和な学園生活を送れそうにないわね」

「ああ、そもそも私が此処に居る時点で、そんな物はなかったのかもしれない……」

二人の会話に、簪と本音は何も言うことができなかった。

分かってしまったのだ。自分たちが知らない世界があり、その世界で自分たちの力があまりに無力であることを……

それから間もなくして、一週間後に第一アリーナでの試合が伝えられた……

第捌話「踏み切り」(後書き)

色々と長くなってしまうましたが、やりたいことはやりつくしました(汗)

最初に言っておきますが、私はけっして千冬のアンチではありません。むしろ千冬は好きなキャラですね。

この世界での白騎士事件は、千冬が東に計画を持ちかけ、東が”おもしろそー”ということでした。承したという流れです。

最初は、何処かの戦場に介入してISの力を見せ付ける予定でしたが、東が悪乗りして、日本にミサイルを二千発放っちゃったんです。

原作では、千冬は何を考えて東と協力したのかがよく分からなかった。もしかしたら、千冬自身世間に対して、不満を持っていてそれを、自分の力で壊したかったのかもと思います。

踏み越えてはならない一線を越えてしまったのは確かですね。はい

.....

セシリアの絡みが少ない。セシリアは、IS関係で出張りますので、次回ではそれなりに活躍します。あの子の訓練の模様とか.....

ヒロインのポジションとしては、箒は日常、セシリアはIS関連。鈴はホラー関連での役割です。

箒と本音は、箒と同じく日常ですが、IS関連の暗部について関わってきます。

今回の話を書いてみると、簪よりも本音の方が活躍しているような
.....

簪は、自分からはほとんど喋らない印象がありますので、こうなっ
たのでしょうか？

それを言うなら、ここの一夏も自分からはあまり喋らないほうなん
ですが.....

しつこいかもかもしれませんが、こちらの一夏のイメージCVは、川澄
綾子さんです。

次回より、一夏の魔戒騎士としての名前が明らかになります。

V S 更識楯無。 I S 国家代表 V S 魔戒騎士

ぶつかり合う誇りと誇り。

学園最強を称する国家代表の”強さ”は半端じゃない。

次回！「更識 楯無」

霧を晴らす騎士の刃が導く蒼天をその目に焼き付けろ！！！！！！

第九話「更識楯無」(前書き)

更新が遅れてしまいました、申し訳ありません!!!

先週と今週のGARROは、本当に良いものでした。

先週の仮面の男との戦いは、落下しながら戦うという本当に良いものでした。

落下しながらの戦闘は、やっぱりかっこいいです!!!

今週は東北新社創立50周年記念作品だけにOPからびっくりさせられました。

時代劇を絡めていたので、気合の入りまくりのOP。ホラーは残念でしたが、あの侍は、凄くかっこよかったです。

ただ、対決がいつものGARROアクションだったので、このあたりは差別化して頂いたほうが、魔戒騎士対侍の異種剣術試合がみれたかなと思ったり……

これまでの二話はバトルの回が盛りだくさんでよかったです。

今回は色々と盛り込みすぎて、難産でしたがよろしくお願いします。

どうぞ!!!!!!!!!!!!!!

第九話「更識楯無」

「今日から、お前の名は”楯無”」

「ええ、私は　だよ。そんな名前じゃないよ!!!!」

「いや、これから更識の当主を貴女は受け継ぎます。故にこれからは、そう名乗ってください」

その日、少女は”自分の本当の名前”を失い、”更識楯無”となった。

それからの日々は、家に居る誰もが彼女の事を”更識楯無”と呼ぶ。一つ離れた妹ですら、彼女の名を呼ぶことがない。

少女は、自分の”名”を取り戻したいと願った。友人達も自身の”本当の名前”を知らない。

裏の一族である更識家の代々の当主は更識楯無と名乗る。これは、裏の世界で生きていくための名である。

幸いにも彼女は、様々な面で”才能”に恵まれていた。

文武両道、さらにはISの操縦から設計まで、寄せられる期待以上の成果を上げた。今の彼女は、更識家の当主、IS学園の生徒会長、ロシアの国家代表として振舞っている。

更識家のモノは、裏の世界には関わっても、より深い”闇の世界”には手を出すなどいつていた。

”魔戒騎士に勝つのは、至難の業である”

”代々の当主の挑戦に全て勝利をした”

もし、魔戒騎士に自分が勝てるのならば、更識楯無ではなく、”本当の自分自身”を見てくれるのではないかと……

彼女は、年相応の少女であることを心から願っていた……

IS学園 生徒会室

「お嬢様、悪い癖が出ていますっ……！言っておきますが、魔戒騎士に面白半分で近づくのは止めてくださいっ……！！」

「虚。あなたも言うわね…カルシウム取ってるの？」

「ふざけないでくださいっ……！！私でなくとも忠告ぐらいは進言

させていただきます。これは、あの”番犬所”からの要請です」

「そう…でも、私と一夏君とどっちが強いと思う？」

「話を聞いていましたか？そうですね、ISの操縦を見る限り国家代表候補生では、相手にするには”覚悟”と”経験”が違いすぎます。国家代表でも難しいところでしょう。言うまでも無く、ホラーという魔獣は、私達の人智を遥かに超えています」

虚の言葉に楯無は、今一ピンとこないのか扇子を顎にあて、

「ホラーね。そんなに厄介なものかしら？」

「そうです、あれはISですら滅ぼすことが叶わない存在。ですから、面白半分に魔戒騎士の仕事、行動には干渉しないでください」

「でもね〜、そんな事、言われてもピンとこないわ。まるで想像の産物じゃないの」

「……………実際にアレを目にすれば、お考えも変わると思いますが、遭遇することは、”死”を意味しますから、お辞めになったほうがよろしいかと……………」

「虚、あなたは、見たことがあるの？ホラーを」

「……………はい。幸運にも”魔戒騎士”に助けいただきました…」

虚は、忌々しそうに頬を歪めた。まるでそれは、理不尽な事に耐えているように見える。

「助けてもらったのなら、どうして一夏君達にきつく当たるの？」

「そうですね。私の親友をホラーごと殺したのですから…感謝などできようがありません」

虚の脳裏に忌々しい記憶が浮かぶ。ホラーに憑依された親友を死神を思わせる鎌で両断した赤い騎士の姿を……

” どうして、殺したのっ！！助けられたかもしれないのっ！！”

普段の冷静さをかなぐり捨てて、鎧を解除した狐目の男に虚は詰め寄る。

” 無理だよ。ホラーに憑依されていた時からその子の魂は死んでいたんだ”

男が付けている目玉を模したイヤリングが少年のような声で、虚に語る。

” そんなのっ！！あなた達の勝手な理屈じゃないですかっ！！！！”

” 勝手な理屈を言っているのは、お前だ。悪いが俺達”魔戒騎士”はホラーを狩るのが使命だ。悪い夢を見たと思って諦める”

狐目の男こと”五道 アキラ”はそのまま背を向けて虚から去っていった。

「そんなことがあったの？あなた……」

楯無は、悲しそうな目で虚を見る。

「はい。だから、私は魔戒騎士、法師がこの学園にホラーを招く可能性が怖いんです。その時に、もし……本音が……」

大切な者が”闇の世界”に巻き込まれて、命を落としてしまうのではないかという不安に駆られるのだ。

「……護りし者と言うわりには、やっていることは恨みを買っことをしているのね」

楯無は、飄々とした笑みを押さえ真剣な眼で”番犬所からの要請”を考えるのだった。

更識家は、日本の暗部に関わってきた影の一族であるが、闇の底である”番犬所”には繋がりこそは持っても、できる限り関わるなと言われている。

だからこそ、知りたいのだ。家の者達が、代々の当主が恐れていた闇の世界を……

好奇心が強いのは良く分かっている。魔戒騎士がどれほどのものなのかを確かめたい。歴代の当主は口を揃えて、魔戒騎士に勝つのは至難の業であると言っ……

特に魔戒騎士の最高位である”ガロ”には、絶対に勝てないと……

「……それに一夏君って、ちょっとずるいわよね。女にしか扱えない”IS”と男しか扱えない”ソウルメタル”の両方が使えるなんて……」

一夏が男女両方の性質を持っているからこそ、使えるのだが……

楯無は一夏が二つの強大な力を使えることに少しだけ嫉妬の念を覚えた。何よりも……

（あなたは、自分が関わっている世界が怖くないの？”自分”を失くしてしまうかもしれないのに……）

一年一組 教室

「一夏さん、聞きましたわっ！！！！ロシアの国家代表と試合をさせますとっ！！！」

セシリアは早朝、一夏の元へ詰め寄った。他の生徒達も騒ぎ出していた。

「何だっ！！！！一夏、どういうことだっ！！！！」

箒もまた騒ぎ出す。一夏は落ち着いた様子で

「ああ、ここの生徒会長の更識楯無さんから挑戦を受けた」

「一夏の言葉にさらに周りが騒ぎ出した。

「うそっ！！！！あの学園最強の会長がつ！！！！！！」

「でも、凄く盛り上がりそうだよね！！！！早く、皆に教えてあげようよっ！！！！」

IS学園の生徒会長になるには、一つの資格が存在する。それは”学園最強”でなければならぬと言ふ事。

彼女は学園で唯一の国家代表であり、自由国籍を有してロシアの代表であるという。

「一夏さん、代表候補生と国家代表ではあまりにも差が付きすぎていますわ。挑戦をお受けしてよかったですか？」

セシリアは、イギリスでの訓練時代に現在の国家代表と模擬戦を行ったことがあるのだが、その実力の差はあまりにもかけて離れていた。大人と子供以上の差が存在しているのだ。更識楯無は、この学園では他の誰よりも遙かな高みに居る。

「確かに今思えば、受けたのは軽率だったかもしれないが……向こうは、私の気持ちを無視してもそう仕向ける気だったのだろう」

「それは、どういう……」会長っ！！！！！！」

セシリアの言葉を遮る様に教室の入り口から声が聞こえてきた。

教室の入り口には、生徒会長の更識楯無と会計の布仏虚が立っ

た。虚は一夏に対して、厳しい目を向けている。

「ごきげんよう、織斑一夏君、一年一組の皆さん。今日もいい天気ね」

楯無は”本日快晴”と書かれた扇子を広げて教室の前の教卓に進む。

「今日は、訳があつて此処にお邪魔させた貰つたわ。一週間後の第一アリーナで私と織斑一夏君の試合をするから、よろしくね」

笑顔で宣言する楯無に対して、セシリアは一夏の言葉の意味を理解した。同じく鈴木

(……こいつ、あの場で断つても、絶対に断れないようにするつもりだったのね。更識って、どういう家なの？今度、烈花さんに聞いてみよう)

更識が影の一族であることは鈴木も知識としては知っていたが、どういふ一族かまでは知らなかった。今度の休みに師匠に聞いてみようと思つたのだ。

「ちよつと、生徒会長、お待ちになつてください。貴方は、一夏さんの気持ちを無視して、一夏さんを見世物にしようといふのですか」
セシリアは、楯無に対して厳しい目を向ける。

「あら、貴女も”賤ける”とか言つて、織斑君と試合をしたそつじやないの」

楯無は扇子を顎にやつて、飄々とした態度で言う。

「ええ、確かにワタクシは、自身の”驕り”で一夏さんに決闘を申しました。ですが、一夏さんは己のためだけに……いえ、自分の”力”を証明するためだけに戦うような方ではありませんわ!!!」

セシリアの言葉に一瞬だけ楯無の表情が曇った。虚ですら気がつかなかったが、一夏と鈴は気がついた。

「ふふふふ、面白いことを言うのね。貴女……」

「ワタクシは、事実を申しただけです、生徒会長。仮に断っても、そうせざる得ない状況に追い込もうとするのは許せません」

毅然とした態度でセシリアは楯無に言葉を返す。そして……

「一夏さんの手を煩わせる訳には行きませんわ。ですから、このセシリア・オルコットがお相手を致しますわ!!!」

誰も予想が付かないこの展開に誰もが驚く。

「セシリア。これは、私が受けた”挑戦”だ。だから、私が受ける」

「一夏さん!!!貴方が手を煩わせることなんて!!!」

「煩わせるもない。私は、彼女の”陰我”をここで見過ごせるわけには行かないからだ」

再び、”陰我”と言う聞きなれない言葉を一夏は呟く。

「”陰我”？何かしら、その意味は？」

「この世界の森羅万象に宿る”闇”の部分。人間の邪な欲望、愚かな願い……いや、誰もが持っている”心の陰”だ」

一夏の言葉に楯無は思い当たる節があるのか僅かだが口元を歪めた。

「私は”師”より、それを断てと教えられた。だから、この挑戦を断る事はできなくなった」

「かなりの自信ね。少し、自信が過剰じゃないかしら？私のように、よく分からない人間の世話を焼くなんて……」

「自信過剰なんてものじゃないわよ。一夏が戦うのは、”守りし者”としてなの…たとえ、相手が見ず知らずの他人でも守れる者なら守るわ」

鈴が一夏の隣に立つように続く。二人の言葉に楯無の隣に立つ虚はさらに目を険しくする。

「そつなの？じゃあ一週間後の試合、楽しみにしているわ」

楯無は、虚を連れて教室を後にするのだった……

「守りし者？いえ、あなたたちは、ただの”殺し屋”じゃないの」

虚は、憎憎しげに呟いた……

脳裏に浮かぶのは、死神を思わせる鎌を持った紅い魔戒騎士の姿……

本音

おりむー。お嬢様と試合をするんだ。でも、何故戦うの？

よく分からない会話。昨日見たあの怖いおじさん。怖い目をしておりむーに当たるお姉ちゃん。

”陰我”って…心の陰って、あの完璧なお嬢様にもそれがあるの？それを断ち切る。前のせっしーの時もそう言ってた。だから、今のせっしーは……

だったら、かんちゃんも、せっしーみたいに……

一夏が前に言っていた”陰我”という言葉。あれは、そういう意味だったのか。

確かに私にも”心の陰”というモノが存在する。だけど、それは武道の鍛錬で克服することではないか？

国家代表と戦う理由が相手の”陰我”を断ち切るため。鳳が言う”守りし者”……

一夏の師とは、どういう人物だったの？かつて、存在していた武者にも見える一夏だが……

やはり、私が知っている”一夏”とは違うのか？抱えている闇とは何なんだ？

すぐ傍に居る幼馴染と私は、住む世界が違っても言うのか？

いや、私と一夏の立っている場所が違うだけだ。私が一夏を支えられるぐらいに強くなればいいだけだ。

だから、一夏。お前の抱えている”闇”を暴かせてもらっぞ！……！

放課後、一夏は自室に戻っており、そこで千冬と向き合うように話をしていった。

「……なるほど、更識がか……あいつめ、余計な事をしてくれる」

千冬は、額に人差し指を付いて溜息を吐いた。この学園で唯一の国家代表の更識楯無とは面識があるのだが、あの厄介な性格だけは何とかならないだろうかと思っていた。

「はい。私に勝負を挑んできたのなら、それ相応に対応はします」

一夏は、楯無との戦いは”協力者”として技量を確かめたいという考えではなく、彼女の好奇心から来ているものと察していた。

「お前なら例え相手が国家代表であっても負けることはないだろうが。気をつける、あいつは”裏の事情”に通じている。油断はするなよ」

姉として千冬は一夏に注意を促した。この弟は千冬としては認めたくはないが、あのホラーと戦うために戦闘の技量と冷静さは、ずば抜けている。

予想の斜めに行くホラーを相手にする故に戦闘での油断はまず、ありえない。

「……IS側では私にあまり小言は言わないんだね。姉さんは……」

「一夏、口に気をつける。まったく……お前は一心この生徒だからな。ISでのやり取りは許容している」

「そう言ってるけど、姐さんは一夏がISに関わる事は許さなかつただろ？何だか、いまさらって感じがするんだが……」

ヴリルが千冬の発言に異を唱えた。

「不届きモノか……いや、今は不埒モノだな。一夏の胸に居座るとは……」

千冬は、一夏の胸の位置に居るヴリルに対し青筋を浮かべた。

「なんだ？その不埒モノってというのは」

「当然だ。一夏の胸に納まるうとする”煩惱魔導具”など、その呼び名で十分だ」

「……姉さん。私の何処を見ているの？」

一夏は、千冬の視線から自身の胸を両手で隠した。その光景に千冬は

「ま、待て。一夏、私が見ているのは、その不埒モノだ。決して、お前の胸を見ているわけではないっ！……！……！」

「そうだぞ、姐さん。だいたい、一夏の”もの”は俺を挟むほど大きくはない」

ヴリルの言葉に一夏の目から感情が消えた。

「……ヴリル。別に私は気にしてはいないけど、お前に言われると少し腹が立つのは何故だ？」

一夏は感情のない目でヴリルを手に取り、いつの間にか持っていた
”魔導筆”でその口元をなぞる。

「おいっ！！一夏っ！！俺が悪かったっ！！許してくれっ！！
！！」

ヴリルの声は無常にも聞き入れられなかった。紅く光ったと同時に
ヴリルの口は閉ざされてしまった。

口を閉ざされたヴリルは、そのまま箱の中に入れられてしまう。

「一夏、アレをこのまま何処かにやれないか？」

「……だめだよ姉さん。私はヴリルの相棒だから少し反省してもら
うのも相棒としての勤めだから……」

”クスクス”と笑っているが、少し怖いのは千冬の気のせいだと思
いたい。

(……………一夏。お前は、どっぷり闇に浸かっているのだな)

昔は、あんなに可愛かったのにと過去を懐かしむ千冬であった。

「それと姉さん。更識楯無だけど……あの先輩は、何故”本当の名
”を名乗っていないの？」

「なにっ？どつういことだ。”更識楯無”は、あいつの本名ではな
いのか？」

「前に番犬所から、こっちで活動する協力者が”更識”だつて聞いたんだ。”更識楯無”は、裏の名で表で名乗る名じゃないんだつて……」

一夏の言葉に、また厄介なことになったと千冬は思った。

「まったく、お前は どうして私の目の届かないところで、厄介ことばかりに巻き込まれるのだ。あと、あの”軽い男”にも時々会っているようだな」

千冬の脳裏に何故か一夏と一緒に自宅に居た”軽い男”こと、涼邑零の姿があつた。

”お邪魔してます。一夏のお姉さん”

その横でお茶の用意をしている一夏。この光景にムカついたのは、何故だろうか？千冬には黙っていたが、腕輪だったヴリルを首飾りに変更したのは零である。

「不届きモノを不埒モノに変えたのは、どうせあの男の仕業だろう。あの男は、何故、私の家に我が物顔で居座るのだ！！！！凶々しいにも程があるわっ！！！！」

当たっているのは凄いと一夏は、思った。それから三時間後にヴリルは開放されるのだった。

「一夏の”女の部分”は、怒らせるとめっちゃくちゃ怖いんだよな」

それから二日後、一夏は第三アリーナで蒼牙を展開していた。

「おい、一夏。お前はISをここまで動かせるんなら、後は”騎士”としての鍛錬を積んだほうがいいんじゃないのか？」

「東さんも言っていたけど、ISのコアには独自の意思があり、使用者に合わせて最適化し、進化をしていく。だから、少しでも動かさないと……」

ヴリルの問いに一夏は、ISの訓練の必要性を説く。IS学園に居る以上は、これを行わなければならない。

「なるほどな……更識楯無は国家代表だったな。確かに今は、ISを動かせるだけ動かした方がいいか……しかし、本当に対したもんだな。まさか意思の在るモノを生み出せるようになるとは……」

感慨深げにヴリルに呟いた。

「だが、話ができないのは残念だ」

「魔導員とISの会話か。どんな話をするつもりだ？ヴリル」

「ISは、男か女のどっちなんだ？女しか乗れないから、女なのか？」

ヴリルの疑問は一夏にも分からなかった。なぜ、ISが女にしか動かせないのかは、開発者である篠乃之 東にも良く分かっていないからだ。

ちなみに魔導具達の意味は、男のものもあれば女のものもある。

一夏は、もしかしたら自分と同じ中性かとも思ったが確かな答えではないので胸のうちにそっと留めた。

ここで誰かがコアのネットワークに呼びかけてきた。ISのコアは、相互通信ネットワークが内蔵されている。

これは広大な宇宙空間でのお互いの位置を確認することと連絡を取り合うためのものである。プライベートとオープンが存在する。

「誰かな？」

<織斑君。今、少しだけ話してもいいかな？>

呼びかけてきたのは、更識楯無の妹、更識簪であった。

一夏は簪と本音の二人でアリーナの客席に座っていた。

二人は、一夏のスタイルを見て溜息を付いてしまった。女である自分達以上のプロポーションに自信を失ってしまう。

「ねえ、おりむー。どうして、そんなにスタイルが良いの？男の子なのに……」

「……お姉ちゃんよりも凄いかも」

本音は羨ましがり、簪は自身の姉に勝っている一夏のスタイルとこれで胸が大きければ、”無双”ではないかと思うのだった。

「……あまり見ないでほしい。見られるのは、恥ずかしいから……」

一夏は予め用意しておいたジャージを羽織る。その様子に二人は、本当に一夏は”男”なのかと疑問符を浮かべてしまう。

本来なら女子が恥らうべきだが最近ではISの登場のため恥らう女子が少なくなっており肌の露出する機会が多い。

「まさか、私にそんな事を言いに来たのか？」

「違うよ。前のこともだけど……かんちゃんのお姉さんがおりむーの協力者ってどういう事なの？」

本音の言葉に続くように簪が視線を一夏に向ける。簪も更識家が普通の一族ではないことを知っている。だが、具体的にどういう事を行っているかまでは把握していなかった。

一夏は、どう答ええるべきかと悩んでしまった。理由は言うまでもなく、“闇の世界”に彼女達を巻き込んでしまうことに戸惑ってしまっただ。

一夏の悩みを吹っ飛ばす言葉が響いた。

「なぐに、一夏の”魔戒騎士”としての活動の協力者だ。それが、お前の姉さんってことだ」

ヴリルがISスーツ越しに喋ったのだ。その声に本音と簪は驚いたように辺りをうかがう。

「ヴリル……私がいいと判断するまでは、喋るなと言ったのに……」

「生真面目な奴だな。硬いこと言うな、あの姉ちゃんの身内だ。関係の無い話じゃない。それに……」

ヴリルは、少し言葉を切り……

「姉弟同士の隠し事は、もう懲りてるだろ？一夏」

一夏

言われてみればそうだった。かつて姉さんは私をISに関わらせた

くないのか、どういう仕事をしているのか教えてくれなかった。

今思えば、ISに関わる影の部分に私を関わらせたくなかったのだらう。

そういう私も”魔戒騎士”であることを隠していた。姉さんがどんな思いで私を守ろうとしていたかを知ろうとししないで……………

私を愛するあまりに世界そのものを変え、守ろうとしてくれたことを……………

私が”魔戒騎士”であることを知ったとき、姉さんは酷く取り乱し、自分の及ばない世界を知ってしまった。

色々あったけど、私と姉さんは今も家族で居る。少しばかりのすれ違いはあるけれど、前よりも”家族”でいる。

察すれば布仏さんと更識さんの姉さん達は、闇の世界に関わろうとしている。そんな世界に関わるのならば、二人も無関係ではいられないだらう。

ヴリルの言うように、私は話さなければならぬのだらう。それから、どう選ぶかは……………二人次第だ。

信じられない話だった。数日前に私たちを襲ったのは、魔界から現れる怪物”ホラー”であり、織斑君はそれを狩る”魔戒騎士”であるという。

作り話にしては細部までしっかりしている。それに今、織斑君の胸に掛かっているアクセサリー、いや、”魔導具”の存在が何よりの証拠だ。

さらに数日前、ISの武装すら破壊する様を私はこの身で味わった。アレは、ISで倒すことは不可能だ。

これだけを聞くと魔戒騎士はヒーローとも思える。

「ホラーは人や物に憑依して活動する。人が憑依されたら”死”を意味する」

私が憧れるヒーローは決して人を助けることを諦めない。だけど、魔戒騎士は私が憧れるヒーローではなく、多くの人を守るためにホラーを狩る”守りし者”。

「助けられたら、それはいいことだと思う。ホラーに憑依されたら未来永劫、魂は苦しめられる。ホラーを倒さない限り……だから、狩る」

私たちの世界にも”安楽死”というものがある。苦しみ続ける人を助けるための救済というけど、命を絶つことが助けることとは思えない。ましてや、ホラーに憑依されただけで…その人の命を絶つなんて……

「分からないなら構わない。だけど、私やその協力要請を受けている君のお姉さんに関わる限りは、ホラーとは無関係ではられない」
織斑君は、私達が関わらなければいいという話ではないと喋っているようだ。

「姉さんは自分の関わっている”事”に関わらせたくはなかったんだけど、こうして”事”に私は関わってしまった」

言うまでも無くISに織斑先生は織斑君を関わらせたくはなかった。だけど、織斑君は関わってしまった。

私も姉が”裏の事情”を抱えているのなら、そうした事態に関わってしまうのだろうか？

更識家はそういう家だとは知ってはいるけど、そうした事にはまだ私は関わっていない。でも、いつかは無関係ではいられなくなる…

……

織斑君の言葉を私は考えなければならぬと思う。

「おりむー。お嬢様に”陰我”があるって言ってたけど、そっちはどうなの？」

本音が私も聞きなれない”陰我”という言葉の意味を織斑君に聞いている。

「そっちの方だけど、私の姉さんと同じで何処の家の”優秀な姉”も悩んでいることは同じらしい。あっちは、少し私を舐めすぎだ」

何処の家の優秀な姉の悩み。それは一体なんだろう？その後の織斑君の話に私は、自分の視野が酷く狭く、また自身の事しか考えていなかったことを改められた……………

一夏は本音と簪と別れた後自室へ戻っていた。ドアノブに手を掛けようとした時、扉の向こうに気配を感じた。

「……………」

「一夏、誰か居るぞ。姐さんじゃねえ」

今日、千冬はIS委員会が主催する会議に出ており帰って来るのは明日のはずだ。

言われなくても分かっているのか一夏は目を細めて扉を開けた。

「おかえりなさい。お風呂にする？ご飯にする？それとも……………わ・た・し」

部屋の中には、所謂”裸エプロン”と言う格好の更識 楯無が笑顔で立っていた。

茶目っ気たっぷりの子供のような笑みで一夏を見るが、一夏は表情

「一つ変えずに……」

「お引き取りください。私に貴方のような人は知り合いには居ませ
ん」

そう言って、部屋から出るように促す。

「フフン いいじゃないの。私達、一応は”同性”だし…貴方のは、どっちが大きいかな？」

楯無は豊満な胸を一夏に見せ付けるように前に進む。やはり一夏は、まったく動じていない。普通の男なら、この状況にアタフタするのだが……

「私は、”どちら”でもない」

「女の子でもあるのは、事実じゃない」

猫などで声で楯無は、一夏の腕に自身の身体を絡める。

（織斑君って、男でも女でもあるのよね。恋愛は、どっちが好きかな？）

「おいおい、随分と積極的だな。更識楯無」

ヴリルが楯無に対して、挑発的に声を掛ける。

「……………」

一夏は無言のままである。いつもより目が険しいのは気のせいでは

ない。

「やだ そんな目で睨まないの」

「この目は元々だ。私に貴方の行為は、無意味だ。話したいことがあるのなら、はっきり言っただけ欲しい」

一夏は楯無の腕をいつの間にか解き、彼女と正面で向かい合う。

自分に気づかれずに腕を解かれたことに驚いたのか、楯無は雰囲気を変えた。先ほどの雰囲気とは違い、僅かな冷たさを秘めていた。

「そうね……少しぐらい楽しんでもいいんじゃないの？」

楯無はエプロンを解き、自身の裸体を一夏の前に晒した。やはり、一夏は動じない。むしろ、”何故、裸になる”という疑問すら出ている。

一夏の前に、”女の色香”が通じないことに楯無は、内心、舌を打ちながらベッドに腰をかける。

「正直に言ってもいいかしら？」

楯無は、少し間を置き

「貴方の所属する”番犬所”からの要請を受けるまで、”魔戒騎士”なんて単なる”噂”でしかないんじゃないかって思っていたわ。それに、”ホラー”に関しては、未だに信じられないわ」

「それは当然だ。私達”魔戒騎士”は、闇に紛れ、一般人が認知し

ない世界で剣を振るっている。信じられないのは無理もない」

本来なら決して知る必要の……いや、知ることが許されない世界なのだ。目の前に居る一夏は、そういう闇の世界の人間だ。

「だから、”闇の世界”を知りたいのか？それにホラーが信じられないのは無理もないが、興味本位で会おうとするなよ。下手したら、取り付かれるぞ」

ヴリルが楯無に釘を差しておく。理由は言うまでもなく、楯無が興味本位でホラーに近づかないようにである。

「取り付かれたら、私をホラー共々殺すのかしら？あなたは……」

「私もそういう事態には、ならないでほしいと思う。ホラーを狩るのが、私の使命だからだ」

裏の世界を知る人間として楯無は、目の前の一夏と対峙する。一夏の目に迷いはなかった。相手が親しいものでもホラーに憑依されたら、容赦なく葬るであろう。

「それが、守りし者なの？それじゃあ、まるでホラーを狩るだけの”殺し屋”じゃない」

冷たい視線を一夏に向ける楯無だったが相手がこのような恨み言には慣れっこなので、彼女の望む反応は得られなかった。

楯無は無言のまま着替えた後、部屋から出て行った。

「四日後の試合……楽しみにしているわ」

楯無

あれが、”魔戒騎士”。はっきり言って、”殺し屋”にしか見えな
い。

伊達に更識家の当主を務めているわけではないので、裏の世界の人
間とは何度か対峙したことはある。

だが、あのような人間は初めてだ。一つ年下であそこまで己の信念
に邁進する存在は……

むしろ、人としての感情があるのかどうか疑ってしまう。情がない
から、容赦なくホラーごと人を殺せるのかもしれない……

ホラーというモノがよく分からないが、人間が憑依されたら”死”
と同じであるという。

ホラーに憑依されたから、人間ごとホラーを狩る。いや、殺す。生
徒会長としては、仮にIS学園の生徒がそうなることは許せない。

家のものからは、”番犬所”からの要請は受けるという。だけど、
あの織斑一夏を中心に引つ掻き回されるのは、私としては少し許せ

ない。

ホラーは魔戒騎士か、魔戒法師かのどちらかでしか対応ができないためだ。

織斑一夏の戦闘能力は、はっきり言って私よりも上だ。対暗部用の心得のある私だが、相手は”人智を超えた魔獣”に対する戦闘の心得を持っている。

妹の簪をホラーから助けてくれたのは感謝してもいいかもしれない。ただ、ホラーの恐ろしさが分からない私には、どう感謝していいのか……

だけど、学園最強の名に懸けても”更識楯無”は、織斑一夏に負けてはならない。

代々の当主が”勝てない”と称する”魔戒騎士”をこの手で倒し、証明してみよう。これが、”私”だということを……

そうすれば、私は…また”本当の名”を名乗れるかもしれない……

寮の部屋に戻ろうとする私を待ち構えるように、セシリア・オルコットが自室の前に立っていた。

「ちょっと、よろしくて…更識生徒会長」

「何かしら？セシリアさん」

二人は、夜のアリーナで互いにISを展開して向き合っていた。既にアリーナは閉館の時間であるのだが生徒会長の権限を使い、この場に居るのだ。

セシリアの専用機　ブルー・ティアーズと楯無の専用機はミスティアス・レディ。

ミスティアス・レディはブルー・ティアーズと違い、全体的に装甲が薄く、まるで水の鎧を纏っているように見える。

掴みどころの無い性格の彼女をそのまま反映しているようである。

「更識生徒会長。ワタクシは、あなたのその悪趣味な性格を正して見せますわっ！！！！！」

「あらあら……私は、人に言われるほど性格は悪くはないわよ」

「一夏さんの気持ちを察せずにを困らせている貴方が言っても説得力はありませんわっ！！！」

「今年の一年生は、色々と面白いわね」

挑発的な笑みを浮かべ、楯無は自らのISの武装を展開させる。武装白兵戦用のランスである。

対するセシリアは、ライフルを構えると同時にBTを展開させる。

「第三世代専用の武装ね。あなた……そんなに器用だったかしら？」

「そうですね。前のワタクシならそうでしょう!!!」

ライフルからビームが撃たれる。撃つたと同時に思考をBTに切り替えて、楯無の左右と背後からピットによる攻撃が展開される。

「ふ〜ん。攻撃の切り替えを速くして、BTの操作の誤差を無くしたの？まるで、織斑君の戦い方ね。でも、甘いわよ」

水色のヴェールが楯無を包み込み、防御する。その防御の膜は非常に弾力性に富んでおり、セシリアからの攻撃を全てカットした後、急速に離脱し、ランスに備わっているガトリングでセシリアの防御シールドを削る。

「っ!?!?!なんて、正確な……これが国家代表の……候補生とは違いますわ!?!?!」

肩に腹に衝撃を受けながらもセシリアは戦意を失うことは無かった。かつての訓練時代、国家代表のあまりの強さに戦意を失ってしまった。

今も同じく現役の国家代表と戦っている。今のセシリアが楯無と戦う理由は……

(少しでも……生徒会長のISの情報が引き出せれば……)

セシリアは一夏が戦うのならば勝利をして欲しいと思い、自らが噛ませ犬として、情報を楯無から得ようと考えたのだ。

セシリアが一夏に勝利を願うのは、彼女にとって一夏が”騎士”であるからだ……

数日前、凰鈴音との話を終えてセシリアは第三アリーナで一夏とI Sを展開させて訓練を行っていた。

模擬戦を行っているが、一夏はやはり強かった。攻撃を交わし、その上での確な反撃をしてくるのだ。

弓で打ち、剣で切り裂く。一通りの訓練を終えた後二人は、

「やはり、お強いですね。どうすれば一夏さんのように強くなれるのでしょうか？」

「セシリア。私を買いかぶりすぎだ。私などよりも強い”男”はいくらでも居る」

「ええ、一夏さんよりも強い方がいるのですか!?!」

セシリアの言葉に一夏は、

「うん、特に”あの人”には絶対に追いつくことができない。それに今の私があるのも、あの人、鋼牙さんのおかげだ」

一夏の脳裏に魔戒騎士の最高位 黄金騎士 牙狼、冴島 鋼牙の姿があつた。一年前、孤独な戦いをしていた自分と共に戦ってくれた”仲間”でもある偉大なる”先輩魔戒騎士”。

様々な強敵ホラーと戦い、恐るべき七体の使徒ホラーを殲滅し今や、元老院所属の魔戒騎士だ。

「鋼牙さんは今も”強く”なり続けている。私以上に……だけど、いつかは……あの人と肩を並べるようになりたい」

その時の一夏は、何処か遠くを見ているようにセシリアは見えた。セシリアは知らないが、一夏の心には”黄金騎士”の雄姿が今も存在しているのだ。

(例えば、ワタクシは一夏さんの事を何も知りませんのね。貴方が何を目標にし、何になりたいのかを……あなたの強さは、あなただけのモノではないんですのね)

一夏の”強さ”の秘密が少しだけ見えたセシリアだった。もっと知りたくなった……

一夏には一夏が過ごした時間がある。それは、一夏だけが知ることでありセシリアが知ることができない物語。

楯無は強烈な突きを連続でセシリアに放つ。放たれたセシリアは、ライフルを楯に防御し、B Tを動かそうとするが、食らい付いてきた楯無の攻撃に思考が乱されてしまう。

「遠距離戦仕様のブルー・ティアーズもこうされると何もできないわね」

さらにガトリングがセシリアを襲う。突きとガトリングによる銃撃による攻撃により、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーがさらに減っていく。

セシリア

實力は、圧倒的に開いています。貴方には一矢を報いて見せますわ！……！！

「夏さんもご自身が”理想”とする”強さ”を目指しております。ですから、ワタクシも……」

いつか、ワタクシが自分が理想とする”強さ”を得られるまでは……
……一夏さんを支えられるようになるまでは……

鈴さんも、油断はしないでくださいよ。ワタクシも一夏さんに想いを告げて見せます。ですが、この想いは今は、留めておきます。

一夏さんに今、告白しても迷惑がられるでしょうね。だから凰鈴音さんも保留にしているのでしょね。

一夏さんの事をだれよりも考えて、一夏さんが一夏さんで居られるように……

だけど、ワタクシは一夏さんには勝って欲しい。生徒会長にあなたが何を見たかは知りませんが、勝ってそれを断つことが、この方にとっても良いことなのでしょう。

ですから、必ず勝って下さい！……！！……！！……！！……！！

ワタクシは一か八かの接近戦を仕掛けるべく、ショートブレードを水色の装甲に突き立てました……

勝者 更識 楯無

アリーナの地表で息をついているセシリアに楯無は問いかけた。

「ねえ、どうして私に挑戦をしたの？」

「……………あなたのその悪趣味な性格を正そうと思っただけですわ」

「嘘ね。貴女は、国家代表の強さを知っているわ。分かっているのに戦いを挑むのは自信過剰にも程があるわね」

話すことが無いのか楯無はそのまま背を向け、入り口で待っていた虚と共にアリーナを後にした。

「……………織斑一夏のためかしらね」

織斑一夏と更識楯無との試合の前日、鈴は一泊二日の外泊の許可を取り師匠である烈花の下を尋ねていた。

「IS学園は寮制と聞いていたが、かなり融通が利くのだな」

さっそく尋ねてきてくれた弟子に近況を聞きながら、今、鈴が巻き込まれている事態を話す。

「そうなのよ、アタシも修行中の身だから、こうして烈花さんの所に来られるのはありがたいから良いけど…」

「確かにな。お前の修行を疎かにしてしまつのはだめだ。一週間に一度は、俺の所に顔を出してもらつぞ。鈴」

烈花が不敵な笑みを弟子の鈴に向ける。この笑みに鈴は、表情を引きつらせた。

「何故、表情を強張らせている。まだ鍛え足りんようだな。よし、これから武道場へ行くぞ」

「ええっ！！！今からですかっ！?!」

「その後に更識について教えてやる。さあ、来い」

今日は穏やかに師匠の知恵を借りに来たのだが、ここでまさか、修行に入るとは思わなかったのだった。

鈴は烈花に表立って反逆することができないので、彼女はそのまま引きずられるように武道場へと引きずり込まれたのだった……

鈴は一泊二日の外泊許可は貰っているので、学園に戻らなくても良かった。

武道場で烈花と鈴は並んで、構えを取り守りと攻めの型の演舞に入る。

拳を突き出し、蹴りを繰り出す。掌底を放つと同時に法力が赤い螺旋を描く。

肘打ち、身体を大きくそらせたと同時に飛翔し、着地する。これらの動作を烈花と鈴は繰り返し行う。

一通りの型を終えて、互いに礼を取り、稽古に入った。互いの拳と蹴りを交え、競り合う。

「はあっ！！！！」

「やあっ！！！！」

互いに声を上げ、二人は大きく飛翔し互いに拳と蹴りを時には、法力を交えた螺旋が飛び交う。

(…鈴。まだまだ守りが甘い)

烈花は、弟子の様子に自身を少しだけ重ねた。自分もどちらかといえは守りよりも攻める方に転じやすい。

自分のそういうところには、あまり似て欲しくないと思うのだが、鈴が攻めに転じやすいところは、明らかに自分の影響であると考えていた。

掌底を鈴のわき腹に当てる。当てられた鈴は大きく身体を仰け反らせ、そのまま武道場の床に頭を打って気絶してしまった。

「鈴。まだまだ甘い！！！！」

「……あれ、アタシ。何やってたの？」

それから数分後、鈴は頭が痛いを感じながら、意識を覚醒させた。

「愚か者が。俺の一撃を受けて頭を打ち気絶したのだ。守りの型を疎かにしたためだ」

すぐ傍に烈花が腰に手をやって自分を見下ろしていたのだ。

「まったくお前は、相変わらず攻撃に徹すると守りが疎かになる。もう少し、守りを固めろ。敵を倒すのも大事だが、それ以上にお前はお前自身を守らねばならん」

「はい。でも…どうしても”強く”なりたいんです。一夏を、一夏みたいな”守りし者”に！！！！」

鈴は力を求めている。それは自分のためではなく、一人の”想い人”のためである…

「織斑一夏は、既に称号を持った魔戒騎士だ。織斑一夏は、今や時

代の中心に近い場所に居る。鈴、お前は、まだそこには居ない」

烈花の言葉に鈴は、自分の力はまだ”想い人”の支えには至らないことを改めて自覚し俯いてしまった。

「焦るな鈴。お前は、必ず”強い”魔戒法師になる。その時多くの人々を救い、織斑一夏の力になる。お前の時代は、まだ先だ。今は、それに備えるんだ」

烈花は鈴の隣に座り、新たに作った笛を奏で始めた。俯いていた鈴も続くように笛を奏でる。武道場を”英霊達への鎮魂”が響き渡った……

稽古を終えた鈴と烈花は、向き合い話し合っていた。

「更識楯無だが、これは本名ではない。代々の当主に告げられる名前だ。おそらくは、本名は別にある」

烈花は自身が知っている”裏の世界”の事情を鈴に伝える。彼女は魔戒法師の修行の傍ら、そういった”一族”の事も知識として習得していた。

かつての師”アカザ”の伝手もシグト共に引き告いでおり、烈花の顔はそれなりに広い。

最も烈花が有名なのは”女でありながら魔戒騎士顔負けの戦闘能力”、”ホラーすら怯む程の暴れっぷり”である。

年配の魔戒法師からは女のくせに出しゃばり過ぎと言われていたが、某騎士は”守りし者に、男も女も関係ない”と反論している。

「ホラーが憑依することは自分ではない自分に脅かされることだ。楯無自身も、本名ではないこの名に何かしらの”感情”を抱いているのだからな。ある意味、ホラーに憑依されるのと同じことかもしれない」

烈花は、鈴に楯無が一夏に魔戒騎士に勝負を挑んだのは、そういう思惑もあってではないのかと言う事を伝えた。

「それって、何だか複雑……」

「そうだな。俺としては、更識家の当主にそんな”小娘”を据えるから、こつという事になったのだと思う」

「何だか嫌ね。そういう家に生まれなくてよかったわ、アタシ」

「そうだな。俺は女に生まれたことを恨んだ事もあったが、今は自分に満足している」

「アタシは、今の自分にはまだまだ不満を持つてるけど、いつかは誇れる自分になるわ。そういえば、シグトは何処に行ったの？見な

いんだけど……」

「ああ、あいつなら新しい”号竜”の受け取りで離れている。今夜は帰らん。それとシグトを呼び捨てにするな。馬鹿者がっ！！！」

鈴の頭に特大の拳骨が当たったのは言うまでもない。凰鈴音が一人前の”魔戒法師”になる日は、まだまだ遠い………

試合当日

第一アリーナは、これまでにない観客で満席だった。今日の対戦カードは、更識楯無VS織斑一夏の注目の一戦であったからだ。

ビットでは千冬、真耶、篁、セシリア、鈴の三人が居た。

「織斑先生。織斑君は、大丈夫でしょうか？相手は国家代表ですよ」

「何を言っている、山田君。私の弟だぞ、更識如きに遅れは取らんぬ」

普段は生徒を鼻屑にしないのだが、珍しく一夏を推している千冬であつた。

「あれっ？珍しいですね、普段はあまりそういう事は言わないのに」

真耶の言葉に千冬は

「なに……弟に勝手な因縁をつけてきた小娘に負けるはずがない。それにあいつは、楯無の”陰我”を既に見ているようだからな」

箒、セシリア、鈴の三人はビットから飛び出し、第一アリーナ上空で対峙する。一夏と楯無が映るモニターに視線を向けていた。

第一アリーナ上空

「織斑君、どうかしら？第一アリーナは、気にいってくれたかしら？」

楯無は笑みを浮かべて一夏に尋ねる。一夏は狼を模したバイザーをつけているため表情は伺えない。

「別に何が変わるわけでもない。こつこつ見世物になるのは、これつきりにして欲しい」

「あらあら、言うわね。ISはスポーツなのよ。観客を魅せて、楽しませるのも私たちの役目よ」

水のヴェールが揺らめく様は、彼女の掴みどころの無い性格を現しているようだ。

「悪いが、私は人を楽しませる”能”は無い。だから、早めに切り上げさせてもらおうぞ」

「ふふふふふ、言ってくれるわね。さすが魔戒騎士だね。だけど、その魔戒騎士を倒せば私も拍がつくわ」

そのときの楯無の表情は、まるで獲物を捕らえた肉食獣のようであった。

「やっぱり心に陰があったか……一夏、あの子の陰我、お前が断ち切れ」

「言われるまでもない。楯無さんは、まるで”昔”の姉さんみたいだ。だから、放っておけない」

試合開始のブザーがアリーナに響き渡った。

楯無さんの”心の陰”。それは、年相応の少女であることを望む心。裏の一族の家に生まれたことで、その影に生きることを教えられ、普通の少女であることを許されなかった。

まるで私を育ててくれた”姉さん”のようだと思う。

学生の頃から、幼い私を育てるために四苦八苦していた姉さんは、社会の理不尽さに耐えるために年相応の”少女”であることを捨てた。

でも本当は、心では”普通の少女である”ことを望んでいた。

幼い頃、姉を駅まで迎えに行ったときに、流行の服をウィンドウから見ていた姉さん。

同じ年頃の少女達が遊ぶ光景をうらやましそうに見ていた姉さん。

顔も分からない”両親”に捨てられた姉さんは”普通の少女”であることを諦めなければならなかった。

好きな”異性”だって居たかもしれない。もっと遊びたかったかもしれない。

だからこそ、私にその願いを託すように”普通”であることを望んでいた。だけど、姉さん。本当は姉さんが望むべきだと言いたかった。

今の私は、普通とは言いがたい。魔戒騎士で、一般の人の生活を捨てている。だけど、この事に後悔はしていない。

私は”守りしもの、闇を照らす希望の光であらなければならない”

姉を不安にさせている私は、本当の意味で”強く”はない。だから、姉を安心させたい。だからこそ、”強く”になりたい。

だからこそ、この勝負。負けるわけにはいかない。

試合開始と共に一夏は、雪片を構え瞬時加速を伴って楯無に迫った。ブレードを横なぎに切りつけるが、楯無はランスでそれを防ぐ。

凄まじい衝撃に対して口元を歪め、楯無は

(想像以上に”力”が強いわ)

蒼牙は接近戦を主体としておりそのためパワーとスピードに優れている。何とかこれを弾こうとランスに意識を寄せるが、対する一夏は回し蹴りを加えてきたのだ。

水のヴェールが一夏の蹴りを弾く。その瞬間に一夏は上昇し離れる。

「女の子に蹴りを加えるなんて……やってくれるわね」

「戦いに女も男も関係はない」

一夏の容赦が無い攻撃に楯無は冷や汗をかくが、一夏は涼しい顔である。

男は女を傷つけてはならないとフェミニストは言うだろうが、一夏は女でもあるので女に攻撃をすることに戸惑いは無い。

この光景に冷や汗を流すのは、楯無だけではなかった。

「……おりむー。本当に織斑先生の弟なんだね」

「……………織斑君」

本音と簪は一夏の容赦の無さに頬を引きつらせてしまった。

同じくペシントでも……

「一夏……昔のお前は、私に似てもう少し穏やかだっただろう」

何故か嘆く千冬。

「やっぱり、先輩の弟です。織斑君は……」

真耶は代表候補生時代の頃の千冬と一夏の姿を重ねた。

「一夏の奴。かなり荒っぽくないか？」

「一夏さん！！遠慮は要りませんわ！！！！」

「一夏のISって、あれをそのままコピーしたのかな？」

三者三様の反応だった……

一夏

国家代表なだけに流石に強い。先ほど離脱したときに”人体”でいう急所の”肝臓”のあたりを突こうとしてきた。

咄嗟の反応と判断力は、十分に実戦でやってのけることができる。さすがは、更識家の当主だけはある。

距離を取られた私に、楯無はランスに備え付けられているガトリングを放つ。狙いは正確だ。私を遠ざけようと距離を作っている。僅かではあるが蒼牙の肩の部分に当たってしまった。いつまでも当たるわけにも行かないので六枚の翼を展開し回避したと同時に瞬時加速を発動させて雪片で切りかかった。

楯無

これが魔戒騎士の実力。今まで戦ったどの相手よりも強い。ダメージを受けること覚悟で攻撃を仕掛けてくる。

正面から来た攻撃を水のヴェールで防御をするが、それを押し切るようにしてヴェールを勢いと斬撃で圧してきた。

「くっ！？やるわねっ！？でも、簡単には負けられないわ！！」

ヴェールに指示を出し、より強固なモノに変化させる。

私の専用機のほとんどは”ナノマシン”によって構成されていて、私の意志一つでその形状を変化させることができる。

水のヴェールを楯から槍に変化させて、織斑君に攻撃を加えるが、織斑君はそれを全て刃で薙ぎ払い、拳を私に叩きつけてきた。

ISの力は、殴るだけでも凄まじいものを誇る。それをまともに受ければ、当然のことながらシールドエネルギーは削られ、ダメージを受ける。

でも……これぐらいで勝ったとは思わないでねって……思っていないわよね。

楯無は、目の前にいる一夏の周囲に怪しい視線を向ける。

雪片を使い、一夏は楯無に追い討ちをかけようとしますが、楯無の専用機が展開する水のヴェールが少し気になっていた。

それと自身の勘が周囲に気をつけると言っているのだ。先ほど形状を変えたところから、それなりに厄介な能力があると見ていたのだ。

相手は国家代表。自身の姉である千冬もそうであるが、一段の構えではなく二段、三段の構えを備えているであろう。

「織斑君。あなたは強いわ、私よりも……だけど、ISでの勝負なら絶対に負けないわ。何より、これなら絶対にあなたに勝てる」

楯無は自身のISのモニターが表示する蒼牙の周りの湿度が異常に高まっていた。

左の親指を中指で指を”パチン”と鳴らす。

音と共に、蒼牙の周囲に散布されていた水の分子が一斉に水蒸気爆発を起こす。

これが、楯無の得意とする”クリアパッション”。一斉に加熱して水蒸気爆発を起こすものである。

「最後に勝つのは、私よ。これで代々の当主が上げられなかった白星を私が初めて……」悪いが、こっちもやられるわけにはいかないんだ」

爆発の影響で爆煙が立ち込めるが、蒼牙は悠然と立っていた。その全身に炎を纏って……

「危なかったな一夏。まさか、こいつを使う事になるとはな……」

ヴリルが蒼牙のモニターに見える99.9秒からカウントされる表示を見た。

「ああ、蒼牙の”烈火装甲”は、全てを攻撃にまわしている。だから、早く切り上げる」

雪片の刃を向け一気に楯無のミスティアス・レディに向かっていく。

「まさか、”クリアパッション”をあの炎で相殺したの？」

思わぬ切り札に楯無は驚くものの直ぐに、自身の奥の手である”ミストルテインの槍”で迎撃すべく防御用の装甲表面を覆っているナノマシンを一点に集中させ攻性成形を遂げる。

防御用のナノマシンも攻撃に回されるため、自身も大怪我を負いかねない”技”である。

「負けるわけにはいかないわ!!!!!!私が、私であるためにも!!!!!!」

95.7秒……

炎を纏った蒼牙は雪片を上段に構えて切りかかる。

83秒

“ミステリアス・レディ正面に集中される” “ミストルテインの槍”

70・60秒

二機のISが近づき、二機のエネルギーがぶつかり合う。

「最後に勝つのは、私よ!!!!!!織斑君!!!!!!」

小型気化爆弾四発分の威力が蒼牙を襲う。蒼牙は怯むことなく進み六枚の羽を大きく展開させ、勢いをまして”ミストルテインの槍”の威力を真っ向から受ける。

40秒

「あつちいつ!!!!熱いぞ!!!!」

生身の人間ならば跡形も無く消滅していたであろう熱量に耐えられるのは、ISの絶対防御のおかげであるが、このまま受け続けるのはさすがに厳しい。

頬に汗を掻くのを感じながら一夏は、集中した”エネルギー”の本流をいなす様に雪片をそのまま振り下ろし、その刃を踏み台にし足蹴りにしてエネルギーの無い楯無の頭上へ跳び上がった。

30秒

「くくくくく、雪片を踏み台にしたっ!!!!!!!!!!!!!!!?!!!!!!」

これにはアリーナ全体が大きく驚いていた。まさか武器を手放し、それを踏み台にするなど考えられなかったからだ。

特に千冬は、自分ですら思いつかなかった”雪片”の使い方に開いた口がふさがらなかった……

20秒

楯無は目の前の状況に驚くも直ぐに態勢を立て直そうとするが、頭上に居た”烈火装甲”を纏った蒼牙は弓を展開させ、矢を楯無に放った。

「くっ!?!?!わ、私は……」

立て続けに放たれる正確無比な矢を防ぐ事ができずにシールド・エネルギーは削られ……0になった。

10・9・8・7・6・5・4・3・2・1……TIME OUT

時間が過ぎ、”烈火装甲”が解除された蒼牙のエネルギー量は10を切っていた。

「勝利者 織斑一夏」

「あれ？負けちゃったの？私……」

楯無は、自身の敗北が信じられないのか呆然としていた。”ミストルテインの槍”を正面に捕らえたときに勝利は確信していた。

だが、相手は自分の想像だにしないやり方で打開し、勝利したのだから……

「はははは、これが魔戒騎士。勝てないわけだわ……」

歴代の当主が勝てなかったのも分かる。いかなる困難にも決して怯むことなく突き進んでいく彼らを止める術などないのだから……

奇襲ではなく、真つ向正面から勝利されては悔しさも無い。むしろ清清しささえ感じてしまう。

まるで霧が晴れたかのように楯無の気持ちは晴れやかであった。

「織斑君……あなたに聞きたいことがあるわ。あなたは、望めば”一般人”として生きられたのに、どうして進んで”その道”を選んだの？」

楯無の言葉に一夏は、

「それは、これが私の進むべき道だと分かったからだ」

”強くなれ、一夏。守りし者として。そして、希望の光となるんだ”

「あなたは、自分の未来を闇にゆだねるの？」

「それが私の”運命”だ。それを選び、受け入れたのは私自身の意思。だからこそ、逃げることは考えられない」

「……強いわね。あなたは、私は”更識楯無”であることを受け入れたけれど、何処かで逃げたいと思っていた。あなたは逃げたいだなんて考えないのね」

「逃げてもどうにもならないことを知っているからだ。でも、どんなに辛いことがあっても必ずいつかは終わる」

一夏の言葉に楯無は、魔戒騎士達に面白半分で、いや、自身の我侭で接してしまったことを今更ながら反省の念を抱いたのだった。

「楯無さん。いや、あなたの本当の名前は？」

「ふふふ、今は楯無で良いわ。織斑君、そういえば、あなたは魔戒騎士の称号を持っていたのよね。それを聞いても構わないかしら」

前当主は、魔戒騎士は己の称号を持っているという。一夏もまた持っているのではないかと思ったのだ。

「ああ、私の魔戒騎士としての名は”ジン”。”蒼天騎士”だ」

今は夜があっても必ず、朝が来る。その空には……眩いばかりの蒼い空が広がっている。

私が受け継ぐ名は、蒼天騎士 ジン。ジンは、

旧魔界語に伝わる”バラデューク・バラゴ・ヤリュバ・ガロ”

ヤリュバに由来するヤイバ”刃”を別の読みである”ジン”から来ている。

”全ての騎士は希望の光となる”

ジンは我々の世界で”仁”と書き、それは慈しみ。儒教で人道の根本、最高の徳であるとされる……

第九話「更識楯無」(後書き)

烈花と鈴の関係は良好です。烈花は、女前なキャラだと思います。

烈花は、鈴との絡みが多いです。師匠なので、弟子の鈴が心配なんです(笑)

鈴も鈴で烈花には懐いています。

アクセスがいよいよ90000を突破し、ユニークが10,000に達しました。ありがとうございます!!!

それでは、では!!!!!!

少し頭が痛い協力者も得られたし、今の状況は納得しておこうか、一夏。

そういえば、”彼女”がお前をモデルにした絵を描いていたな。

今度、個展を開くって言ったな。せつかくだから、見に行ってみるか。

次回!「個展」

異国の少女は、そこで一枚の絵画に目を奪われる。

第拾話「個展」(前書き)

前回からかなり間が空きがちなこの頃。

早くあげられるように頑張りたいです(汗)ほんとに…

先週と今週の牙狼ですが、今回は過去の栄光を懐かしむ役者にホラーが憑依した様は、立派な人でも心に陰はあるものだなと思いつつ、鋼牙はカオルに対してデレデレだなと再認識しました(笑)

ホラーのデザイン、何処かで見た顔でしたよね。仮面ライダーブレイドのジョーカーに似てたような感じがしました。

今週は魔戒法師の魔導筆の材料になる霊獣が出てきており、ファンタジー風な感じでした。これをISキャラでやってみたいなと思ってしまいました。

やるなら、鈴と誰が良いかなと考えてしまいます(笑)

レオがなにやら怪しく思えてしまう回でもありました……

本気で悩んでいますレオをIS×GARROに出すか……

鈴の設定では、レオとは面識があるといった感じにしていますが……

それでは、どうぞ……!!

あと、お知らせがあとがきにありますのでよろしく願います。

第拾話「個展」

デュノア社

フランスのIS関連では有名な企業ではあるが、最近の第三世代の開発に遅れが生じており、政府からの資金援助が危ぶまれ経営危機に陥っていた。

そのとある一室で一人の少女がベッドに腰をかけ、俯いていた。

少女は目の前にある自身の全てとも言える”モノ”を未練がましく見ていた。

それは、絵を描くための道具と真つ白なキャンパスであつた。

ここ数日、いや一年以上も彼女は大好きな絵を描く事ができなかったのだ。

「……嫌だよ。どうして絵を捨てなくちゃだめなんだよ……」

そんな少女の部屋に一人の男が扉の前に立つ。

「なんだ、まだ”そんなモノ”に縋っていたのか。いい加減、そんな女々しいモノなど捨ててしまえ。お前は”男”なんだからな」

”男”と言われ、少女は胸のうちに酷い怒りを感じた。だけど、逆らうことができない。

「今日の夜に日本へ行け、そこで”織斑一夏”の専用機のデータを
持ってくるんだ。それがお前の役割だ」

男は机にチケットを置き、少女の顔を見ずにそのまま部屋を出て行
ってしまった……

「男”にこんな”趣味”はいらぬよね……できれば、”専用機
”をここに置いていきたかった……」

数時間後、少女はごみ置き場に大切にしていた”モノ”を置いてい
った……

そして、自身の胸に掛かる専用機の待機状態を忌々しく思った……

一夏が勝った。国家代表に……まさか此処までとは思えなかった。

「これで一夏が実質的な学園最強か……………」

どうやれば、あんな風に強くなれるのだ？私は一夏を支えられる事ができるのか？

よくて引き分け、負けてもいい線までは行くのではという予想は立てていたのだが……

一夏の戦いを見ていて、改めて私は”弱い”と認識させられてしまった。

このままでは一夏を支えることなどできない。だからこそ強くならなければならないのに……

以前よりも”心”を強く持とうとしているのだが、自分自身の”弱さ”に揺らぐ心が許せそうに無い。

せめて、一夏と同じ”専用機”があれば……そうすれば同じ土俵に立てるかもしれない。

セシリアは専用機を持ち、鈴は私と同じ一夏の幼馴染ではあるが、鈴は”専用機”は持っていない。

訓練機を使えばいいのだが、訓練機を借りるには時間が掛かるし、一年生ではほとんど使える機会が無い。

一夏の隣に立てるようになるには……”力”が必要だ。一夏が抱えている”闇”を知るためにも……………

「となると、織斑君が次期生徒会長つてことですか？」

IS学園の生徒会長の条件は”学園最強”であること。つまり、更識楯無を倒したことで一夏が”学園最強”になった。その条件を満たしているのだ。

「そうなるだろう。だが、一夏はそのようなモノには興味は示さない」

「ええっ！？！またですか？この間のクラス代表もそうですけれど、織斑君つて、どういう目的で”強くなるう”としているんですか？」

一夏の行動について真耶は疑問符を浮かべた。千冬は少しだけ苦々しく口元をゆがめた。

「一夏が目指している”強さ”は、一夏自身、絶対に”得る”ことはできないらしい」

千冬の脳裏に、”心滅”を起こした一夏を助け出した”男”、冴島鋼牙の姿が浮かんだ。

自分が助けられなかった一夏を救った人物。剣では、並ぶものがないと思っていた自分に匹敵するかあるいはそれ以上の剣を振るう人物。

あの後、言葉を交わすことは無かった。一夏に鋼牙という人物を聞けば聞くほど苛立ちを感じた。

魔戒騎士の最高位”ガロ”の称号を受け継ぐ者。何より一夏が目標であり、一夏にとって頼もしい”先輩魔戒騎士”

「もしかして、織斑先生を目標にしているんですか？今は無理かもしれませんが……このまま訓練を続ければ……」

「違う、私ではない。一夏が目標としているのは……あの男”冴島 鋼牙”だ」

千冬にとって鋼牙は妬ましい存在である。自分が決して得ることのできない”モノ”を持っているが故に……

「誰ですか？冴島 鋼牙って？もしかして、織斑先生の……」
『違う
っ！……！』

真耶がからかう様に言うが、千冬は普段は見せない怒気の色を浮かべて彼女の言葉を遮った。

これには、篝、セシリアも驚いた。鈴は、あまり驚いていない。

「一夏の目標はやっぱり鋼牙さんね。零さんもそうだけど、やっぱり最高位”ガロ”の男は違うわよね」

鈴も鋼牙には一度だけ会ったことがある。あの時は、ただ”強い男”という認識だったが、師の烈花、閑岱では”邪美”から話を聞き、その認識を改めた。

この世を闇に染めんとする強大なホラーと戦いそれらを打ち倒した”偉大な騎士”なのだ。盟友である”白夜騎士 山刀 翼”もまた鋼牙の事を”ガロ”の称号に相応しい男と語っている。

鋼牙が倒してきたホラー達は、”全てのホラーの始祖 メシア”、”白夜の魔獣 レギュレイス”、”最凶と名高い七体の使徒ホラー”と言った、今の一夏では手に負えない猛者ばかりなのだ。

その背中を追いかけている一夏もいつかは、鋼牙と肩を並べる日が来るのだろうか？既に称号を持ち、”守りし者”としての務めを果たしている一夏ならきつと、その高みにいけるかもしれない。

そついう自分は、法師としては半人前だ。一夏の負担にならないように鍛錬も行っているのだが、まだまだ道のりは遠い。

今の自分のできる事をやっていくしかない。これはシグトから教わったことだ。シグトは烈花と比べれば戦闘能力は低いが彼は自分に行い様々な面で烈花や魔戒騎士の戦いを支えている。

魔戒法師は一部の例外を除けばホラーに対しての戦闘は魔戒騎士と比べれば低いのだが、だからと言って魔戒騎士よりも格下というわけではない。

元々ホラーと最初に戦ったのは魔戒法師で、神出鬼没なホラーに対抗すべく強靭な肉体と精神力を併せ持った魔戒騎士が誕生したのだ。

(アタシも頑張らないとね。いつまでも”半人前”じゃ……一夏を支えることなんてできないから)

「一夏さんが目標としている”鋼牙”。どういう”男”なのでしょうか？」

この”女尊男卑”の時代では、”男”の評価は低い。ISを唯一使える一夏は、今の”男”達の中では例外なのだが……

セシリアは一夏の事がもっと知りたいと思うも、中々一夏への深い一歩を踏み出せないでいた。

楯無と戦った後に一夏に彼女の情報を言おうとしたのだが、結局は断られてしまった。

どんな相手に対しても正々堂々と構えている一夏には、好印象を抱くセシリアだが一夏にもっと近づきたいという想いだけが先走っていた。

未だに日常という”踏み切り”を越えるという事をセシリアはできないでいた……

試合が終わり、一夏は楯無の案内で生徒会室に来ていた。

「番犬所」からの要請はちゃんと受けるわ。だけど、ホラーの恐ろしさなんだけど、実際の所……本当なの？」

デスクに肘を当てて一夏と向き合う楯無。

「実際に見なければ恐ろしさは理解できないのは仕方が無い。奴らは”人を喰らう”そこだけは、理解して欲しい」

「人を喰らうって……憑依するだけじゃないの？」

「憑依してから人を喰らう。憑依されたら、”斬る”以外に方法は無い」

一夏の話に楯無は、話のおぞましさに嫌悪感を感じた。ホラーは人間に憑依し、人間を喰らう。

憑依された人間の意志はどうなるのか？

「更識のお嬢ちゃん。ジュースは作れても、それを元に戻すことはできない。そういうことだ」

ヴリルが分かりやすく説明する。要するにホラーに憑依されたら、
”斬る”以外に対処ができないのだ。一体化したホラーと人間を分
離させることは不可能だ。

「……………そういうことなの。つまり、学園の生徒が憑依されたら
……………あなたは……………」

「そうならないように願うまでだ。ここは陰我がかなり多い。だか
ら夜間の外出はなるべく控えた方がいい」

一夏は、鈴と共に結界を貼ったことと陰我のオブジェになりそうな
ものを封印していることも楯無に説明をする。

一通り説明の説明を終え、一夏は生徒会室を後にしようとするが

「待って、織斑君」

楯無の呼びかけに一夏が止まる。

「あなた……………生徒会長になる気はない？」

「……………悪いが、私はそういう柄ではない」

振り返ることなく一夏は生徒会室を後にした。

楯無

織斑君は、魔戒騎士としての務め以外に興味は無いのかしら？

IS学園に居るのだから、せつかく学園最強の私を倒せるほどの”強さ”があるのなら、もう少し”IS学園の生徒”らしくできないのかしら？

自分がこの世界の異物のように振る舞い、本当の意味で誰にも気を許しては居ない。

セシリア・オルコットは織斑君を慕っている。織斑君は日常では気を許しているのだけれど、本当の意味では誰にも心を許していない。ホラーという魔獣を相手にしているのなら、巻き込まないためにそうするのは、当然かもしれない。

更識家も暗部に関わっているのだけれど、闇の世界には関わることを恐れている。

織斑一夏に関わるという事は、”闇の世界”に関わるということ…
…そうになったら、日常には二度と戻ることはできない。

私は”普通の少女”で居たかったんだけど、この件で、それを諦めなければならぬかもしれない……

願わくば、この学園に”ホラー”が現れないことを……

生徒会室を後にした一夏を待っていたかのように更識 簪が立っていた。

「織斑君。お姉ちゃんとどういう話をしていたの？」

「前にも言った私の”魔戒騎士”としての活動の協力についてだ」

一夏はの言葉に簪は

「そう。アレは此処に現れるの？」

簪は不安な表情を浮かべて一夏に尋ねた。彼女は本性を現したホラーの姿は確認はしていないが、その恐ろしさだけは、僅かではあるが理解していた。

本音は間近でその”悪意”に触れたので感じた恐怖は簪の比ではなかった。

「それは分からない。だけど、少なくとも何人かは”悪夢”を見るかもしれない」

実際、一夏はこの学園の全ての生徒を護れるとは考えてはいない。ホラーの神出鬼没さとその強大な戦闘能力を侮ることなどできないからだ。

当然のことながら、何人かの犠牲は覚悟をしなければならぬだろう。例え、犠牲となった親しい者に恨まれたとしても……

楯無は学園でホラーによる犠牲者が出ることを許せないでいるために厳しい話をするにはできない。

予防策こそはしているが、どこまで予防できるかは、分からないのが現状である。

「織斑君は、どうして”魔戒騎士”になったの？”普通の人”として生きようとは思わなかったの？」

「……………それが私の”運命”だからだ。ホラーを狩る事が……………」

それ以外に理由はないと一夏は簪に背を向けて離れていく。その背中中は、近くに見えるのだけれど何処か遠い場所を歩いているように見えた。

簪は知らないが、それは姉の千冬が見る一夏の背である。彼女は自分の手から”家族”が離れるのを酷く恐れている。

だからこそ”日常”で生きて欲しいと願った。”普通の年相応の織斑一夏”であることを……………

”普通の少女”であることを願い、今もそう願う千冬とは違い、”魔戒騎士”として”闇の世界”に生きると決めた一夏。

”何処の優秀な姉も悩んでいることは同じ”

数日前に一夏と交わした言葉。自分よりも遥かに優秀な姉 更識 楯無。

周りの期待に応える為に、”普通の少女”であることを許されなかった。更識家当主として、相応しい器量を身につけるために……

自分は姉の”優秀な部分”だけを見ていて、姉自身を見ていなかったのかもしれない。

そう思うと自分が酷く嫌な人間に思える。

”魔戒騎士”と”ホラー”との戦いに姉が関わろうとしている。自分も再び関わってしまうだろう……

そう思うと、何かをしなければならぬと考えてしまう。だからこそ私は、姉と向き合わなければならない。

生徒会室に入った簪は酷く悩んでいる楯無を見た。普段は飄々としていて掴みどころが無いのに……

「あら、簪ちゃん。どうしたの？」

直ぐに表情をいつもの飄々としたモノに戻す姉に簪は少しだけ口元をゆがめた。もしかしたら、姉は自分を巻き込みたくないと思っているのか？

それとも、足手まといと見ているのだろうか？姉の本心は姉にしか分からない。だけどこれだけは言っておきたい。

「…………お姉ちゃん、私じゃ頼りにならないかもしれないけど…………

愚痴ぐらいなら聞くから……」

簪は少し遠慮しがちな表情で楯無に声を掛けた後、生徒会室を後にした。

「簪ちゃん。前は私のことを避けていたのに……どういう心境の変化なのかしら？」

もしかしたら、織斑一夏が関わっていたのかもしれないと思う楯無だった……

冷酷な殺し屋とも思えたけれど、織斑一夏は意外とお節介焼きなのかとも思った……

都心のとあるトンネルで……

「こ、こんな事をしていいと思っているのっ?!?!男の癖にっ?!?!」

女は酷く怯えていた。何故なら取るに足らないと思っていた存在が恐ろしく感じたからだ。

「ふざけんやつ！！お前が偉いわけじゃないだろ！！！」

鈍い音と共に女の視界は赤く染まっていた。路地裏の隙間から見える都市の光がぼやけて見える。

体中に痛みが走り、口の中には鉄の味しかない。

男は女に手は出してはならない。なぜなら女は男が守らなければならぬと誰かが言った。

しかし、この時代、女尊男卑の時代にそれを謳う男性は居ない。何故なら、世の男は女を守ろうと思わなくなってしまったからだ……

ISの力は絶大であるが、全ての女性がそれを使えるわけではない。当然、適性が無く動かせない女性も居るのだ。

それを勘違いしたのか、使えもしない力があるかのように尊大に振舞う”傲慢な女”が力の無い男に横暴を振舞うようになった。

ほとんどがいいなりになるしかないのだが、時々であるがこのように”男”から逆襲を受けてしまうこともある。

実際、女よりも男の方が体力的に優れており、腕力もあるのだ。

トンネルの灯りにより、男が振るう拳によって殴られる女の影が映し出され、アスファルトに赤い血が広がり始める……

数分後、力なく倒れこんだ女は、もはや虫の息で危険な状態であった。男達は、その様子を嘲笑う。”大したことない”と……

「なっ……なんで、ワタシがこんなめに……男にやられるなんて……」

自業自得ではあるのだが、女はそれを認めていない。その歪んだ自尊心に惹かれるように”闇”が迫った……

”ハハハハハハ、奴隷である男に無様な目に合わされて悔しいか？”

「だ、誰？……なんで、嗤うの」

突然、聞こえてきた声に女は怒りよりも恐怖した。この声は耳ではなく、直接、頭に響くのだ。

”知りたいか？最近は何に復讐がしたい男に憑依する奴が多いんだが、お前のように男に復讐したい女に憑依するほうがずっと良さそうだ”

女を”悪魔”が覗き込んだ。”悪魔”の体が霧状になり、女の口、鼻、目から”身体”に入り込んだ。

声にならない悲鳴と共に女は”悪魔”と一体になった……

瀕死の重傷だった女は何事も無かったかのように起き上がった……

「おっ、おいつ！?!」

「あの傷で立ち上がれるわけが……」

立ち上がった女の服が変化する。黒い霧が両腕を覆い身体のラインをハッキリと見せるボディースーツへと……

”ニヤリ”と笑うと女は、すぐ傍に居た男の顔面目掛けて鋭い蹴りを放つ。その蹴りの威力は凄まじく、男の首の骨を一発で折り昏倒させる。

驚く男達をよそに女は、素早く動き、拳を振るい、時には蹴りを放ち、一撃で男達の”命”をいとも簡単に奪う。

「うっうわああっ！！！！！！」

あまりの光景に腰を抜かしつつもこの場から急いで逃げるために近くに止めてある車に乗り込み、急発進させる。

車で逃亡しようとする男に女は、人間では考えられない脚力で車のボンネットに飛び乗り、装甲をぶち破り、エンジンを鷲掴みしたのだ。

コントロールを失った車はそのままトンネルの壁に激突し、爆発炎上するのだった。

炎の中から傷ひとつ付いていない女が何事も無かったように現れ……

「うふふふふ……いい気分」

怪しい笑みを浮かべ、女は夜の闇へと消えていった……

楯無との戦いから数日後の日曜日、一夏は郊外にある館を目指していた。

広大な敷地にあるその館は年代を感じさせる建物であり、庭には色とり取りの花が植えられていた。

そんな屋敷の庭で一人、花達の世話をしている初老の執事が目に入った。

彼の名は、ゴンザ。この館の主仕える執事である。

ふと視線を感じたゴンザは、その視線の主が一夏であることを確認するや否や

「これは、これは、一夏様っ！！！！」

庭を覗いている一夏をゴンザが見つつけ駆け寄る。

「お久しぶりです。ゴンザさん」

顔なじみの執事のいつもの様子に一夏も思わず笑みを浮かべた。

「相変わらず元気だな。ゴンザ」

ヴリルも挨拶を交わす。

「こちらこそ、お久しぶりです。本日は如何な御用時で？」

「はい今日、カオルさんは、こっちに来ていますか？」

「カオル様でしたら、本日から”個展”を開かれています、そちらの方にいらつしやいます」

「そうですか、この前の”絵”を見に来たんですが、居ないのなら……」

一夏はIS学園に入学する前に自身がモデルとなったカオルの絵が気になっていたのだ。

ヴリルもまた相棒の絵がどんなものであるか、興味津々である。

「あの絵でしたら、”個展”の方にありますよ。開かれている場所でしたらお伝えします」

「行ってみます。鋼牙さんもそつちに……」

「はい。鋼牙様は後でじっくりご覧になられるそうです。本日は、月に一度のお休みになられています」

「そうですか、ザルバに”命”を……」

魔戒騎士は、ひと月に一日、契約した魔導具に命を与える。その間はたとえホラーが現れても起きる事は無い。

一夏もひと月に一日、契約している魔導具”ヴリル”に命を与えて

いる。

「一夏様。よろしければ、お茶でもどうですか？あと、カオル様から一夏様にとお渡しするものがあります」

「私にカオルさんが？」

不思議に思ったのか一夏は首をかしげた。

「そちらは、紅茶でも飲みながらお見せしましょう。さあ、どうぞ屋敷へ」

ゴンザに伴われて一夏は屋敷の中へ入ったとき、玄関に”鉢”に植えられている”コチヨウラン”の花を見つけた。

「ゴンザさん。この子を大切にしてくれているんですね」

「はい、一夏様が私どもに託された”花”です。カオル様も絶賛されていらっしやいました。鋼牙様も、一夏様の育てた花をもっと見たいとおっしゃられておられました」

一夏がある伝手で手に入れた”種”を育てた”コチヨウラン”は孔雀の尾羽のような形の白い花を咲かせる。

数ある蘭の花の中でもかなり派手である。ちなみに一夏が気に入っているのは、”彗星蘭”である。寮の部屋に一夏が持ってきている。

”彗星蘭”は日光を好まないため、カーテン越しの半日陰で育てている。気を利かせた千冬が日向に置くこととしたのを一夏がやめさせたのは、ここでは割愛しておく。

「ありがとうございます」

「いえいえ、さあ、どうぞこちらでございます」

ゴンザに伴われて一夏は応接の間へと移動する。待っている中、一夏は屋敷に居るある人物？に会うために少しだけ席を外した。

ゴンザが紅茶の用意をしている間、一夏は屋敷のある部屋に足を踏み入れた。

部屋のソファ―に一人に男が腰をかけ眠っている。男の名は冴島鋼牙。

魔戒騎士の最高位である”ガロ”の称号を持つ男である。

鋼牙の左の中指に髑髏の形をした指輪 魔導輪 ”ザルバ”が嵌められている。

普段は眠っていても気配をさえあれば直ぐに起きる鋼牙であるが、本日はひと月に一日の契約した魔導具に命を与える日なのだ。

この時は仮死状態にあるために一夏が来ても目覚めることが無い。

一夏の目的は鋼牙もそうだが、彼の指に嵌っている”ザルバ”である。

「久しぶり。ザルバ」

一夏に反応するようにザルバはヴリルと似た声質で

「よう、一夏、久しぶりだな。それとヴリヴリも」

「誰がヴリヴリだっ！？！この野郎っ！！！！」

似た声が互いに罵り始めた。ザルバとヴリルの声は非常に似通っている。さらに口調も……

似たもの同士故か会えば必ずこのように喧嘩を始めてしまうのだ。

「うるさいぞヴリル。鋼牙さんの前だぞ」

「ああ、分かっている…こいつが…」

「大丈夫だ一夏。鋼牙は今日一日は起きないぜ」

ヴリルをフォローしているのか、はたまた余裕を見せたいのかザルバはしてやったという顔である。

「分かっているよ。こっちに顔を出したから、ザルバにも会っておいきたくて……」

「嬉しいことになってくれるじゃねえか。お前も色々大変みたいだが、まあ無理せずに頑張れよ。あと、左手首のそれは”IS”って

奴か？」

「ああ、私の専用機の”蒼牙”だ」

「お前も難儀だな。そいつのおかげで”魔戒騎士”は商売繁盛だ。おまえらはISをどう思っているんだ？」

ザルバの問いに一夏は

「IS自身は道を間違えているだけだ。本来は宇宙へ行くために生まれたから…存在が悪いわけじゃない」

「ああ、こいつはたいしたもんだぞ。知ってるか？こいつには俺達みたいに”意思”があるんだぜ」

一夏は、確かにISによる”女尊男卑”が今の世に多くの陰我を生み出しているのをその身で理解している。

悪いのは、おそらくはISの道を歪ませてしまった”人の陰我”である。陰我がさらなる陰我を呼んでしまったのだ。

「”意思”？そいつのは、人間が作り出した単なる”プログラム”って奴じゃないのか？」

ザルバは意外と博識である。ホラー関連の知識はもとより古今東西の様々な事情に通じている。

「そいつは違うぜ。ISの意思はプログラムじゃなくて一つの人格らしい。言葉を交わせないから操縦した時間だけ互いに理解しあう。そういう感覚だ」

ヴリルがISについてザルバに答える。

「人格？だとしたら、大したもんだな。まさかと思うが前の篠乃之博士ならともかく、お前がISに関わったのは……まさかな」

ザルバは、飛躍した予想を立ててしまった。

「ありえない話じゃないよ。ISが私を呼んだんじゃないかって、束さんも推測をしている」

「あそこにISおいた馬鹿は誰だよって思ったが、そうとしか思えない何かがあったのかもな」

一夏とヴリルの言葉にザルバは少し考え込み

「ISの意味か？開発者ですら分からない部分。そいつは、ISが喋らない限りはわからない……」

一夏がIS学園に行った事は、鋼牙も何か因縁めいたものがあるのではとザルバに話していた。

実際ISが道を間違えたのは最初にISを武器として使った千冬が原因であり、その彼女が武器を取った理由が”一夏が存在”であった。

そういう因縁があつて一夏はISに関わってしまったのではと……

「まあ、何にせよ。今はお前のやれることをやっつけ。そろそろゴンザが準備ができたみたいだ。早く行って来い。鋼牙には俺から言

っておくぜ」

ザルバは器用にウインクをし、一夏達を見送るのだった……

「ISが悪いわけじゃないか……そういえば、”母”を想うあまり道を間違えた”騎士”も居たか……懐かしい奴を思い出しちゃったぜ」

ほとんどの騎士達はISの存在を疎ましく思っているが、一夏はそうは思っていない。むしろ今の現状を悲しんでいるそんな感じがするとザルバは思った……

都内のとあるギャラリー

少女いや、少年の格好をした彼女の名は、シャルル・デュノア。シャルルは立ち寄ったギャラリーで開かれている個展にある一枚の絵を眺めていた。

タイトル”BLUE KNIGHT”

それは、男とも女とも見える細身の騎士と蒼い狼が丘の上にさく一輪の花と共に夜明けを迎えているというもの……

「君、この絵が気になっているの？」

シャルルに話しかけたのは、素朴な感じではあるが人を安心させる笑みを浮かべた女性であった。

女性の名は、御月カオル。この”個展”を開いている”画家”である。

「はい、何だか淒く気になります。他の絵も好きなんですけれど、この絵は淒く気になります」

「この絵には、実を言うと物語があるの」

「ええ？どんな物語ですか？」

カオルは得意げに笑みを浮かべて、話し始める。

「この子は、道に迷った人を本来の道へ導く役目を負っているの。道に迷った人を助けていくそういう物語なの」

「道に迷った人をですか？」

「ええ、他にもあの”騎士”達もそういう役目を負っているわ」

カオルは、デフォルメに描かれている”黄金の騎士”の絵達に視線を向けた。その絵は、木に良く似た竜が持つ赤い実を両手で受け取るうとしてるモノ……

「あの絵は、不治の病に陥った人を助けようと唯一治せる実を手に入れようとしているところよ」

改めて個展を見れば、絵本のような可愛い絵もあれば、風景画と様々なジャンルの絵が掛けられている。

特に騎士をモチーフにした絵は、シャルルにある”想い”を抱かせていた。”自分にもこんな絵が書ければ”と…

だけど、自分は故郷を出たときに絵筆を捨てたのだ。この手は、握りたくも無い”IS”を操縦するためにある。

未練がましく個展で絵を眺めている自分が少しだけ厚かましくさえ思う。

「もしかして、君。何か、悩んでる？」

「いえ、僕にもあなたのような絵が描ければと思ったんです。けど…僕にはこんな”才能”は…」

ISを操縦するために、男であるために絵は捨てなければならない。それはシャルルの言い訳だった。

「ううん、芸術に才能は無いよ。私だって、才能はそんなにあるほうじゃない。やりたいと思う情熱をどれだけ持てるかだよ」

かつて父である由児の才能に嫉妬していた”ある画家”に言った言葉である。

「それに絵を描くのに男も女も関係は無いよ」

カオルの言葉にシャルルは、驚いたように目を見開いた。

「ねえ、よければ君の絵を描いて見せてくれないかな？」

カオルの誘いにシャルルは頷いた。突然のことではあるが大好きな絵が描ける事にシャルルは心から歓喜していた。

ゴンザの淹れた紅茶を楽しみながら、一夏はゴンザに自身の近況を語る。スタンドに一枚の絵があり、布が掛けられている。これがカオルから一夏に渡すものである。

「そうですね、千冬様に関しては、まだ悩まれておりますか」

「はい。姉さんを心配させているのは分かっています。だけど……」

「“魔戒騎士”としての務めをやめることはできませんか。私は一夏様がそうしたいのなら、そうすべきだと思います」

ゴンザは空になった一夏のカップに紅茶を注ぎ、

「やりたいと思うことは、本人が決めることです。それを他の者が決める、それはあまりにもおこがましいと思います。鋼牙様も“魔戒騎士”になる以外の道もありましたが”魔戒騎士”になられまし

た」

かつて父 大河を失った後の鋼牙をずっと見守ってきたゴンザは、彼にとつてもう一人の”父”とも言つべき存在である。

何処にでもいる普通の子供であつた鋼牙は、”魔戒騎士”になるために日々、努力と鍛錬を積んできたのだ。

「千冬様は、一夏様をあまりに愛しすぎているのでしよう。愛することは確かに大切ですが、過ぎてしまえば愛する者を傷つけてしまいます」

ゴンザの言葉に一夏は、左手首にある”蒼牙”を託してくれた束とその妹である箒のことが浮かんだ。

そして、白騎士を駆った姉の千冬。

「一夏様。色々大変ですが、今はあなたの出来る事をやっていてはどうでしょうか？いつかは千冬様もわかってくれますよ」

笑みを浮かべるゴンザに一夏は、

「そうですね…あの姉さんが私を認めてくれるのでしょうか」

「そうですね、一夏様の姉でございますから。必ずいつかは分かりあえますとも…」

実例を知っているのかゴンザの言葉に妙な説得力を感じる一夏だった。

(……お父さんって、こんな感じなのかな?)

幼い頃から一夏は、両親、父と母というモノを知らずに育ってきた。故に年上の”ゴンザ”に自身が想っていた”父親”の像を思わず感じてしまったのだ。

余談ではあるが、一夏はよく自宅に顔を出す”涼邑零”には”兄”という印象を持っている。ちなみに彼の魔導具であるシルヴァには”母親”のように感じることもあるらしい。

「ゴンザさんが言いますと。凄く説得力がありますよね」

「おそれいります。そろそろ、こちらの方もお見せしなくてはなりませんね」

席を立ったゴンザはスタンドに掛けられていた絵を覆っていた布を取り払う。

そこに描かれた居たのは、自分と姉である千冬であった。腕輪だった頃のヴリルもいる。タイトルは”FAMILY”

椅子に座り、”彗星蘭”の鉢を抱えている自分とその肩に手を添えて正面を向いて千冬は微笑んでいる。”彗星蘭”の花言葉は、”特別な人”である。

見る人が見れば、千冬の姿に違和感を覚えるかもしれない。千冬のイメージは、不敗乙女”ブリュンヒルデ”という地上最強の生物という女としては、あまりに物騒すぎるモノ……

家族である一夏は、微笑んでいる千冬に対して違和感をあまり抱いてはいない。

「カオル様がおっしゃるに、この絵は一夏様とそのご家族を描かれたことです」

「……………これを私に？」

「はい。これは一夏様とそのご家族にとの事です」

姉と自分は、時々二人で写真を撮る。姉曰く”自分の隣に誰が居たのかを忘れるな”。

本当に貰ってよいものかと思う。だけど、

「一夏様。ぜひ、この絵をお受け取りください」

戸惑う一夏だが、自分のいや、家族のために用意された絵を断ることとはあまりに気が引けた。

「分かりました。この絵を受け取ります」

気がつけば、いつの間にか日が暮れていた。寮には門限があるので早く戻らなければならない。

席を立ち、戻ろうとした時テーブルの上に”番犬所”からの指令書が置かれていた。

ここに住まう主の鋼牙は、元老院所属の騎士。これは自分への指令

だ。

「やれやれ一夏。帰るのは後になりそうだな」

相棒の言葉に少しだけ苦笑し一夏は、指令書を炙る。

”他者の力に溺れし女。力を得、害をなさんとする。これを早急に葬れ”

「……またかよ。ISはさほど悪くは無いんだが、それを悪くしているのは明らかに”人間の陰我”だな……」

「……………」

何も言わずに一夏は、屋敷を後にしようとする。

「一夏様。絵はお預かりいたします。いつてらっしゃいませ」

ゴンザの言葉に一夏は、少しだけ驚いた。まさか、”いつてらっしゃい”と言われることなど今までほとんど無かったからだ。

直ぐに気を引き締めた後にゴンザと正面で向き合い

「行って来ます。必ず戻りますので、それまでよろしくお願いします」

一礼をして一夏は屋敷を後にした。

その日の個展の日程が終わろうとしている頃、シャルルはカオルと過ごした時間を思い返していた。

シャルル

楽しかったな。カオルさん、僕の絵を褒めてくれた。あのままずっと絵を描いていたかったよ……

でも来週からは、もう絵筆を取る事はかなわない。IS学園へ行き、織斑一夏のデータとその専用機の情報をあの人に渡さなくちゃいけないから……

幼い頃から絵が好きで、ずっと描いていた。母さんも僕が画家になるんじゃないかと思ってくれていた。

何年も前に母さんが亡くなって、あの人が僕を引き取った。僕を”子供”としてではなく、ISの適正が高かったというだけだった……

来る日も来る日もISのことばかりで絵を描くことはできなかった。あの人は、”絵”なんて、”才能”のある奴がするものだと言って、僕の絵をくだらないと言っている……

カオルさんは、芸術に才能は関係ないと言ってくれた。あの人は、本当に絵に情熱を捧げているんだ。だからこそ、言えるんだなっと思っ。

でも僕は……絵を描くことができなくなる。カオルさんが描いた”BLUE KNIGHT”みたいに僕を助けてくれないかな？

「うわあっ!?!」

人気の無い路地裏で男が血塗れになっていた。ボディースーツを着た女が徹底的に痛めつけていたのだ。

その様子を傍からもう一人の女が嘲笑うように見ている。

「男の癖に、私達”女”に逆らうなんて、何を考えているのよっ!?!」

先ほど男から逆襲を受けようとしたときに、ボディースーツの女が割って入ったのだ。

この光景に自分達女は偉いと彼女は思った。

「あなたこそ、何を言っているの？これは”私”の力であって、あなたの力じゃないわ」

ボディースーツの女は虫の息の男を背に、主義者の女に歩み寄る。

「何って、千冬様と篠乃之博士がISを作ってくれたからこそ、私達女性が優秀だっということが証明されたからじゃないの」

「それは、織斑千冬と篠乃之博士の成果であって、あなたが優秀だとは言っていないわ。だけど…あの二人には感謝しているわ」

”にい”と悪意の籠った笑みを浮かべたと同時に女の目に”魔界文字”が浮かび上がった。

「私達にとって素晴らしい世界を生み出してくれたのだから!!!」
「!!!」

女の胸元がはだけ、本来そこにある”モノ”はなく、そこに”奇妙な生き物”が存在していた。その生き物は、主義者の女目掛けて飛び出した。

「きゃああああああああああああ!!!!!!あああああ…
……」

生き物は女の頭にしがみ付き、まるで掃除機で吸い込むかのように主義者の女を喰らったのだ。

餌を喰らった後、生き物が女の胸元に戻った後はだけた服を元通り

に直しその場を後にした。

一夏

「一夏、ホラーの気配だ。カオルが開いている個展の直ぐ近くだぞ」

「まさか……ホラーの近くに」

カオルはかつてホラーの血に染まり、そのせいでホラーに関わりやすくなっていた。

今はホラーの返り血も浄化されているのだが、時々ホラーに遭遇してしまう。以前も鋼牙が元老院に所属した後に再会したときもホラーの結界に迷い込んでいた。

ザルバ曰く”つくづくホラーと縁のある女だな”。まったくもって嫌な縁である。

「……………ありえない話じゃない。まあ、これも縁だな」

一夏は、急いで現場に赴くのであった。

カオルは、今日”個展”に来ていた少年 シャルル・デュノアが少し気になっていた。

「あの子、もしかして一夏君と同じ”中性”なのかな？でも一夏君と感じが違ってたし……」

考えることはあまり得意ではないが、気になってしまつのは仕方が無い。

一夏と比べるとあの少年は、女としか思えない。一夏も女性的なのだが、時折男性的な面も見せるので”性別”が分かりにくいのだ。

シャルルは、男性的な面がハッキリ言つて感じられなかった。

「う~~~~ん。悩むな~~~~、でもあの子の絵は良かったな」

カオルはシャルルの絵は、中々のものであると評価していた。このまま絵を描き続ければ熱心なファンができるかもしれない。

そんな事を考えていたとき、一人の女が自分の前に立ちはだかつたのだ。

「絵ですって？女が強いこの時代にあなたは、何を考えているの？」

「えっ？まさか……」

カオルはその女の雰囲気じゃ覚えがあった。この雰囲気は、鋼牙と出会って間もない頃に何度も遭遇した”ホラー”に……

「もっつ！！最近の女は、どうして、みんなこうなのっ！！！」

思わずカオルは”女尊男卑”について文句を言いたかった。おかげで最近の男性の画家が”個展”を開くにも苦労しており、その作品に酷いことをする者までもがいる。

芸術に男女であることに関係ないとおもっカオルからしてみれば、最近の主義者の女は”最悪”である。

急いで逃げようにも、鋼牙は今夜は動くことができない。それに此処は”西の管轄”にあり、”涼邑零”も居ない。さて、どうしたものかと思っが……

「女が強いのは認めるよ。だけど、お前の”力”は、”強さ”なんかじゃない」

カオルにとつて久しぶりに聞く声でした。二人の間に割り込むように一夏が現れたのだ。

「一夏君っ！！」

蒼いコートを靡かせながらカオルの前に立つ一夏だった。

「カオルさん、急いで離れて…今は、そういうときじゃない」

「分かった。私は鋼牙の所に行くから、後で寄ってね」

そう言っただけカオルはその場から離れるのだった。

「……………鋼牙さんの代わりは、私には荷が重過ぎるかな」

今は動けない彼に代わって彼が愛情を向ける唯一の女性　カオルを守るべく一夏は魔戒弓を構えるのだった。

「あなた…織斑千冬？」

姉に瓜二つの容姿を指摘された一夏だが

「悪いが人違いだ。私は姉さんではないよ」

「あら？もしかして、あなたが織斑千冬の弟の……………まさか魔戒騎士だなんて」

女は徒手空拳の構えを取る。

「一夏、あいつは、”ブルダス”一筋縄じゃいかん。”二匹目”に注意しろ」

ヴリルの言葉を怪訝に思いながらも一夏は、先制攻撃と言わんばかりにホラー　ブルダスに切りかかった。

ブルダスは魔戒弓の刃を手刀で防ぎ、強力な蹴りを一夏の右側面目掛けて放つが、一夏は右腕で防御をし身体を屈ませ足払いをするよ

うにブルダスの両足を払う。

両足を払われたブルダスは、バランスを崩しながらも左手をアスファルトについて、一夏に飛び掛るが、側面に避けられ、から空きになった背中に強力な肘打ちを浴びせ、腹に蹴りを一夏は放った。

アスファルトに輝を走らせるほどの衝撃が響く。うつぶせになったブルダスの首を刎ねるべく一夏が魔戒弓を構えたとき、背後から何かが迫るのを感じ、上空へ飛び上がり迫ってきた”何か”の後ろに回った。

”何か”は、素体ホラーをそのまま小さくしたような生き物だった。

「ヴリル。アレが……」

「ああ、アレが二匹目だ。ブルダスは、群体のホラーだ。群体といつても二匹だけだな……」

二匹目のブルダスと一匹目が並んだと同時にその本性が露になる。

その姿は異様にまでに大きな腕を構え、助骨のあたりには人間の腕がある。

顔は頭部と胸部にそれぞれ一つずつ、髑髏の顔が存在していた。

「こいつは……」

何処と無くホラーの姿がISに見えるのは、気のせいだろうか。

「まったく世の女はISを改悪しすぎだ」

ヴリルの言うとおりであった。目の前の”ISもどき”のホラーは見
ていて、不快感が沸いてくる。

目を鋭くして一夏は、魔戒弓を構えて”鎧”を召還する。

ソウルメタル独特の金属音と共に鎧を纏う。”蒼天騎士 ジン”

大きく変化した魔戒弓を構えた。ブルダスは、巨大な爪を掲げ一夏
に切りかかる。大きく肥大化した腕による力は凄まじいが、真つ向
から受けるつもりが無い一夏はそのまま懐に入り込み

”ダンっ！！！ダンッ！！！！ダンッ！！！！”

鈍い音と共に拳が胸部の顔を潰し、さらにそのまま掴みあげ後方へ
と投げ飛ばしたのだ。

頭から突っ込んだダブルスは、すぐに起き上がるものの追撃の手を
緩めない一夏により矢を両足に受け、動きが鈍くなってしまつ。

「くっ！？！お、男の癖につ！？！」

憑依した人間の感情が強いのか、ホラーらしからぬ言葉をブルダス
は吐く。

「言うておくが私は、どちらでもない。それに、”IS”をこれ以
上悪く貶めるのは我慢できない」

両腕を魔戒弓で切り飛ばしたと同時に正面からの一閃で一夏はホラ
ーを両断し、消滅させた……………

「さてと、一夏。絵を取りに戻るか」

無言のまま一夏は、その場を後にし、カオルが行っているであろう屋敷へと向かうのだった。

その後カオルと合流した一夏は屋敷へ向かう道中、ゴンザのように話をしていた。

「一夏君も大変なんだね。やっぱり男の子一人は辛いのか？」

「いえ、私も一応は”女”でもあるので、そこまでは……ただ、男よりも視線を感じてしまいます」

「そうかもね〜、一夏君は、女の私から見ても凄く綺麗なものからかう様な笑みは、何処と無く自分の心を見透かされているように思う一夏だった。

「カオルさん。私が男でもあること、分かっていますよね？」

「一夏君もさっき、自分で”女”でもあるって言ってたじゃない。

綺麗は褒め言葉なんだけど……」

カオルは、今一どう評価すればいいのか分からない一夏に少しだけ困惑した。

「はい…私も自分がどういう感じに振舞えばいいのか、今でも分からなくなります。男らしく、かといって女らしく振舞うと、自分が自分じゃないみたいで少し気持ちが悪くなります」

男女どちらでもない”心”を持つが故に一夏は悩んでいる。このあたりは年相応である。

「まあ、私じゃ難しいことは分からないけど、一夏君は一夏君のできることをやっていけばいいんじゃないの」

人を安心させる笑みを浮かべ、カオルは一夏を見る。

「私もね”できること”をやっていくよ。”私の絵が誰かの力になる”って、鋼牙も言ってくれたしね」

「あの絵は……」

「一夏君に渡すあの絵は、もしかしたら一人で抱え込みすぎてないかなって思って、描いたの。千冬さんは一夏君にとって”特別”な人でしょう」

カオルは千冬とは面識が無いが、彼女の魔戒騎士嫌いは知っている。だからこそ、二人を描いた絵を一夏に送ったのだ。

「はい。以前の私ならそうだったかもしれませんが、今は、頼り

になる先輩も居ますから……」

一夏は、カオルの心遣いに感謝しつつ笑みを浮かべた。その笑みは、あの絵に描かれていた”姉”と同じものであった……

一夏が貰ってきた絵を千冬は何度も眺めていた。特に自分などは、惚れ惚れするぐらい穏やかな表情ではないかと……

絵の中の一夏は照れくさそうに、はにかみながら花を抱えている。

「この絵は素晴らしい。家宝にしたいぐらいだ。だが、一つだけ不満がある。何故この不埒モノも居るんだ！……」

千冬の不満は、一夏が腕に付けているヴリルの存在だった。これでさらに頻繁に織斑家に顔を出す”軽い男”がいたら……

「別に良いじゃねえかよ。俺の存在ぐらい……」

「たった二人の家族だぞ！……それを寄生虫のようなお前を何故、加えなければならんだっ！……」

「身も心も綺麗な俺を寄生虫呼ばわりとは失礼だな。姐さんだって、

人のこと言えねえだろ。一夏が居ないと身の回りの事が壊滅的だつて言うのに……」

「なんだとっ!?!?!」

「だから、いつまでたっても嫁の貰い手がねえんだよ。悔しかったら部屋の掃除を完璧にこなしてみろ」

ヴリルも少しムカついているのか、普段よりも口調が辛辣である。

「そういう貴様もできないではないかっ!?!」

「ハハハハっ、俺は良いんだよ。姐さんと同じ”人間”じゃないからな」

そういわれると反論ができない。千冬が生まれる昔から人間を知っているヴリルからみれば彼女もまた”小娘”である。

そもそも手足の無い魔導具に家事を望むことなど無理なのだから……

……

その頃の一夏は、一人バスルームで入浴していた。

湯の蒸気で頬が赤くなっている。なにやら姉と相棒が言い争っている

るのが聞こえる。

「姉さんとヴリルって意外と仲は悪くないかもしれない」

千冬が聞いたら全力で否定する発言をする一夏であった……

「カオルさんの絵……見たいな……」

一夏の脳裏に自身がモデルとなった”BLUE KNIGHT”というタイトルの絵が気になっていた……

”個展”は閉まっていたが、いつかは見に行くと約束をしている……

自身の目標とする”ガロ”の称号を持つ黄金騎士 冴島 鋼牙。

彼は護りし者として、護りたい者の姿をいつでも心に浮かべることが出来る。

”愛情”を持った魔戒騎士は、誰よりも強くなれる……

そういう自分はどんなのだろうか？自分にも愛情というものは存在しているが、鋼牙がカオルに向けるような”愛情”ではない……

今の自分は、魔戒騎士としての務めを果たしているに過ぎない。本
当の意味で”護りし者”になれるのだろうか？

それは、一夏の”心”次第である……

第拾話「個展」（後書き）

この小説を始めまして三ヶ月。

皆様のおかげでPV12万に後少しで近づき、ユニークは1万5千を越えました！！！！ありがとうございますっ！！！！！！

まだまだ至らないところはございますが、多くの方々に見てもらっなのは嬉しい限りです。

12は魔を鎮める数字なので……

記念という事で、ちょっとしたリクエストを募集してみたいと思います。

本編とは別の外伝的な話にはなりますが……

一夏とヒロインの絡み、もしくはあのキャラとあのキャラの絡みが見たいのでありましたらよろしくお願いします。

その中でリクエストの多かったキャラ同士で描いてみたいと思います。

期間は、次週のGARRO放送の金曜日の午前一時四十五分までとします。

よろしくお願いします。それでは、では……！！

なに？二番目の男のIS操縦者だと。こいつは驚いた…

しかし本当に男か？それとも一夏と”同じ体質”か？いや…何か隠しているな？

次回！「シャルル デュノア」

万人の憧れは、必ずしも憧れではない………

第拾巻話「シャルル デュノア」(前書き)

あけましておめでとございます。

今年もよろしく願います。

昨年の12月は異常に忙しく更新ができませんでした。が今年からはビビビシとやっていきたいと思えます!!!

前々回と前回のGARROは、特に前々回は小説版にありました。サブクではないですかと思わず手汗を握ってしまいました。

鋼牙は残された時間をどのように過ごすかを悩み、これからの運命をどう切り抜けようかという意思は少し切ないですが、魔戒騎士らしい不器用な生き方だと思いました。

もう一つは完全に零の話ですが、魔戒騎士の仕事はどうしても恨みを買うのは常なんだなと思いました……

今回は、IS色はかなり強いです。それでは、どうぞ!!!

第拾巻話「シャルル デュノア」

早朝、一夏は教室に自身のお気に入りである”彗星蘭”を持ち込んでいた。

理由は言うまでも無く、”花”がないのは、寂しいからである。

「これ、織斑君が育てたんですか？」

「はい。ある知り合いに”種”を貰って育てたんです」

真耶は感心したように一夏が教室に持ち込んだ”彗星蘭”を眺める。

”彗星蘭”は種類によって、様々な色の花を咲かせる。

ちなみに寮の自室にある”彗星蘭”は淡いピンク色のものであるが、今回教室に持ち込んだのは白い花を咲かせた”彗星蘭”である。

「綺麗ですね。花の世話をしている織斑君って何だか、”女の子”みたいですね」

「そうですね？私は、好きなものに男も女もそんなに関係はないと思っんですか……」

一夏は”中性”であるために、男女の”縫り”と言うものがない。好きなものに性差など関係は無いのではという持論を持っている。

「それもそうですね」

改めて真耶は一夏を見る。

（こうしてみると織斑君って”女の子”にしか見えませんか。もしかして…先輩……織斑君に……）

真耶は、まさかと思うが千冬が一夏に妙な考えを吹き込ませているのではないかと疑ってしまった。

一夏が実は”女”で、千冬に”男”だと教育されて、自分を”男”だと思い込まされているのではと……

真耶は一夏が”中性”であることは知らない。理由は、千冬曰く”山田君は人が良すぎる。うっかりお前の事をばらしかねん”と

「……山田先生。私はこういう見た目ですが、一応は”男”なので……誰かに歪められたという訳ではありません」

「えっ！？いや、やだな織斑君。私は別に先輩が……」

かなり察しのいい一夏に真耶は、自分の心を見透かされているのではと焦ってしまった。焦っている真耶を横目に一夏は教卓に”彗星蘭”を置くのだった。

「直射日光は、ここなら大丈夫か」

花の環境を配慮する一夏であった……千冬は、花は皆日光が好きだと思っているので、直射日光を嫌う”彗星蘭”を危うく直射日光に晒そうとして一夏に止められてしまった……

(姉弟でも違いますね)

真耶が思っている千冬のイメージは、IS操縦者として”刀”を振るっているイメージである。一夏も同じような感じではあるが、今”花”の世話をしている一夏は、千冬とは正反対な穏やかな感じである。

例えるなら千冬は、あらゆる困難を破壊していく”重戦車”で、一夏は何処かの丘に咲く”花”である。千冬本人が聞いたら怒声が飛びそつであるがそれを口に出さないとこころが真耶の賢明なところである。

ISでの戦闘中の一夏の容赦の無さは”千冬”を思わせるほどであるが………もしかしたら、千冬よりも容赦が無いかもしれない。

(織斑くんも”男の子”一人だけでしたけど、今日からは……)

真耶の脳裏に本日、一組に転校してきたフランス出身の少年を浮かべるのだった。

「今日は、なんと転校生を紹介します」

真耶の言葉にクラス全体がざわめき始めた。

「転校生？」

鈴がいち早く真耶の言葉に反応する。この時期に転校生は不自然だと言わんばかりに……

(まさか……一夏絡みじゃないわよね)

隣に居る一夏に鈴は視線を寄せる。理由は言うまでも無く一夏に関わろうとしている”陰我”である。

対する一夏は、無言のまま視線に応える。一夏自身も自覚をしているのだ。

世界で唯一の男性の”IS”操縦者である自身の立場を……

関わろうとしている”陰我”もまた……

「では、入ってください。デュノア君」

一組のクラスに長い髪を束ねた”少年”が入ってきた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。皆さん、よろしくお願ひします」

「「「「「キャー……ッ！……！……！」「」「」「」

「二人目の男子！」

「ていうか、織斑君って本当に男？」

対するシャルルは困惑した表情でクラスを見渡していた。

「あの〜山田先生。僕と同じ境遇の男子は……」

「はい。目の前にいる織斑君がそうです」

真耶の視線に合わせる様に向けると、かの”ブリュンヒルデ”に瓜二つの織斑一夏が居た。

(……………そりゃ、そうよね。一夏の外見は完璧な”女”だし。いや、性別も女でもあるしね)

鈴は、一夏を見てそんなことを思った。同じくして、

(デュノア。無理も無い、一夏は”そういう外見”だ。分からなくても仕方が無い)

ファースト幼馴染である筈は、幼馴染である一夏の”外見”に対して思うのだった。

ついでに声も”女”だ。

「……………誰かが私に対して、失礼なことを考えているみたいだけれど……………デュノアさん。私が最初の男性の”IS”操縦者の織斑一夏です」

少し不機嫌なのか一夏の目元が鋭くなっている。

「ほ、本当に……」

困惑したシャルルであるが、それ以上に目の前に居る一夏が少し怖い。

「お、織斑君。に、睨まないでください。もう少しにこやかにね……」

「一夏、転校生を威圧するな。まったくお前は目付きばかりが悪くなって……私に似ないで……」

いつもの事ながら千冬が一夏の目付きの悪さを嘆く。毎度の事ながら一夏はかなりうんざりしている。

「織斑先生。ここでは、先生と生徒の関係でしょう。私の目付きに悪さを嘆くよりももっと大事な事を気にしてください」

「なんだとっ!?!最近は口まで……あの不屈きモノと”軽い男”の影響か」

時々繰り広げられる姉弟のやりとりにクラス全体が苦笑いを浮かべるしかなかった。

鈴は”千冬さんは、千冬さんね”と真耶は”織斑君は間違いなく先輩の弟さんです”と……

S H Rは、織斑姉弟によるやり取りでつぶれてしまったのだった。

「私の身内のせいでS H Rがつぶれてしまったが、各人はすぐに着

替えて第二グラウンドに集合。今日は四組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

第

次の授業はISの模擬戦闘か……

それにしても一夏以外にも”男”のIS操縦者が現れるとは……

一人居ただけだから、二人目が居てもおかしくは無いかもしれないな。

それにしても”男”にしては華奢だな。一夏も一夏だが、ISに適正があるものは皆、男らしさのない外見をしているのか？

”強さ”はどれだけのものがあるのだろうか？

一夏と同じく”武道”を嗜んでいるのだろうか？それともまったくの素人なのか？

次の授業でそれは分かる。いや、今は人のことよりも自分を鍛えねば……

千冬さんが言った”一夏の関わっている闇”。一夏を支えられるよ

うになるためにも私は、鍛錬を多く積まなければならないのだから……

「おい、一夏。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だからな」
教室を出る際に千冬が一夏に言葉をかける。

「ここでは、織斑ですよ。先生」

公私は分けた方がいいと一夏は言葉を返してシャルルと向き合う。

「君が織斑君だよな？初めまして、僕は……」

「自己紹介は先に聞いたから構わない。今は移動だ先だ。私達が此処にいては彼女達が着替えられない」

説明すると同時に一夏はシャルルを伴って教室を出た。

先ほどのやり取りを鈴は微妙な表情で聞いていた。

(……一夏。あなたは”女”でもあるんだから、いいんだらうけど。男と一緒に着替えるのはまずいわよ)

鈴は中学時代一夏が隠れて一人で着替えていた事を思い出した。

IS”中性”に関する男女の接し方は、女子の方が包容力がある。

男子はどちらかというところ、リーダーにより傷つけてしまうこともあるらしい。一夏は公の立場が立場なので”中性”であることは秘密になっている。

「私達男子は開いているアリーナの更衣室で着替えることになっている。実習のたびに移動は大変だけど、早めに慣れて……デュノアさん、私がおかしいのか？」

シャルルに説明をする一夏であるが、シャルルは少し妙な顔をしていた。

「えっと……織斑君って、男だね。どうして、”私”っていうの

「？」

「別におかしくは無い。社会に出れば、一人称に男女は関係ないだろっ」

「だって、男ならさ、”俺”とか……”僕”が……」

”男”に対して何かしらの縊りがあるようだ。

「男なら男らしく、女なら女らしくも構わないが私は自分が自分らしくあればと思う」

”自分が自分らしく”の言葉にシャルルの表情が僅かに曇った。

「……………自分らしくって……それって”本気”で言っているの？（僕がどんな思いで此処に来ているのも知らないで）」

その表情を一夏は見逃さなかった。

「ああー……っ！！！！……転校生発見！！！！！」

「しかも織斑君と一緒にだ！！！！！」

ホームルームが終わり噂の転校生を見ようと各クラスの女子達が一組の教室に集まろうとしていた。

「……………少し厄介になるな。デュノアさん、走れるか？」

「えっ？急に何を……………」

シャルルの言葉を聞く前に一夏は彼の手をとって駆け出したのだ。

「きゃああっ！！！！見て見て！！！！二人！！！！手！！！！手繋いでるわっ！！！！！！」

「黒髪の織斑君も良いけど、金髪もいいっ！！！！！！」

やたら騒ぎ出した女子達を気にすることなく一夏は、アリーナの更衣室へ向かうのだった。

更衣室に着いたシャルルは少し肩で息をしながら

「もうっ……全力疾走するならちゃんと言ってよ。いきなり、走り出すなんて……」

「男なら、そんな小さいこと気にするのはどうかと思うよ。デュノアさん」

先ほどの仕返しと言わんばかりに一夏は少しだけ意地の悪い笑みを浮かべた。

その表情にシャルルは頬を膨らまして、睨んだ。

「……………早く着替えるぞ、時間がかかり押している」

シャルルの事を気にせずに一夏は更衣室へと歩みを進める。

「……勝手な奴」

頬を膨らましシャルルは更衣室の扉を乱暴に開けるのだった。

「私はこつち側にいるから着替えるまで来ないでくれよ。傷を見られたくないから」

一夏の声を聞き、シャルルも自身のISスーツに着替えるのだった。何となくシャルルは更衣室の隅にあるプラントを見た。そこには何故か花が植えられている。

「？誰だろう。こんなところに？」

かつて自身が居たあの会社でもこつというものは見たことが無かった。

IS関連は基本”女性”が主体で行うが、このような飾りつけを行う女性は居ない。

不思議に思いながら着替えていると、着替え終わった一夏がシャルルの前に現れる。

「その花の名は、シャガ」

シヤガ

日本の山野によく自生し、美しい花が好まれて公園や庭にも植えられている。

緑の中から真っ白な花が浮きあがる様に花咲く姿はとても美しく、どこでも見られることや雑草のようなたくましさを持つ。

「これって、織斑君が育てたの？」

信じられないモノを見るかのように一夏を見るシャルル。

「ああ、この子はかなり遅しくて特に世話をしなくても勝手に成長していく。少し間隔を空けて咲くから見た目が綺麗に見えるかは少し微妙だな」

楽しそうに一夏は花について語る。この様子にシャルルは

「はははは、男で花が好きだなんて……一夏って”おかまちゃん”？」

「……別に変ではないだろう。私は花が好きだからといって、そういうのは偏見ではないのか？」

小馬鹿にするように笑うシャルルに一夏は少し目をきつくした。

「だって男で花が好きなんて……何だか、変だよ」

先ほどと同じように花が好き男は変だとシャルルが言う。

「私は、男は男らしく女は女らしくというのが、どついうものか今
一よく分からない。好きなことに性別など問題ではないだろう」

一夏は苦笑していたシャルルに対して、そう応えた。この答えに對してシャルルは、

「……でもやつぱり、男はなんていうか……もっと男らしく空手とか……剣道とか……」

「今の”女尊男卑”の世の中で”男は”というのは、あまり意味を成さないかもしれない。誰かに言われて”好きなこと”を辞める事は、それぐらいの”価値”しか無かったということだろう」

「っ!?!?!?!」

それぐらいの”価値”しかない。そう言われた時、シャルルの中で何かが切れた。

「何が分かるんだよっ!?!?!?!何も知らないくせにつ!?!?!?!」

「……それは私からも言わせて貰う。シャルル・デュノア、お前も私のことを分らないくせして、私の”好きなこと”を否定してくれたのだからな」

一夏は更衣室を後にした。後に残ったシャルルは、

「……何だよ…男の癖に”花が好き”だなんて……考えてみれば…
……」

「おい、一夏。あの転校生。かなり怪しいな、本当に男か？って言
いたいが、やっぱ……」

ヴリルが一夏にシャルルについて話しかけてくる。

「……ヴリル。お前もそう思うか？」

「ああ、多分奴は”女”だ。二番目の”男”が聞いて呆れるな」

「目的は……私か」

「なるほどな…ったく、どうしてこつも厄介ごとがお前に降りかか
る？」

「それは仕方が無いことだ。今の私は、この世界で唯一の男性のI
S操縦者。故に”陰我”を呼び寄せる」

「仕方が無いことだっ!?！お前はもう少し自分を大切にしたらどうだ!?!確かにお前は魔戒騎士だ。だけど、お前はまだ……」
ヴリルが珍しく声を荒げた。いつもは冗談半分に受け流すのだが、この時ばかりは違っていた。

(「まったく、どうしてこうも」此処「は厄介な」陰我」を一夏に齎すんだ。一夏がISを動かしたからか……)

かつては一夏が例え場所を違えても”魔戒騎士としての使命”を果たし、それを貫ければと思っていた。

ヴリルの懸念は”一夏”の存在が”陰我”を齎すこと。あのシャルル・デュノアの件もその一例だろう。

ホラー以外にも厄介な”陰我”が一夏に齎される。それに対して一夏は、自分自身のことではあるが、他人事の用でもある。

「私が年の若い少年少女であるからか？戦いに大人も子供も関係は無いだろう。ましてやホラーを相手にしている私にいう事ではない」

「私よりもお前がこの影響を一番に受けてしまったかもしれないな、ヴリル」

一夏の言葉にヴリルは

「そうかもしれないな。だが、人間が戦うのは最終的には自分自身のためだ。お前はもう少し”我侭”になっても構わないと俺は思っているんだがな」

どちらかというところは一夏は他人に遠慮しがちである。魔戒騎士になったのは、とある事件がきっかけであるがそれはまたの機会に語らるであろう。

「んで、あの転校生を待つのか？」

更衣室の扉の前で一夏は立ち止まっていた。

「別に仲が悪いわけではないだろう」

「やれやれ、お前も中々のお人よしだぜ」

その頃、真耶はピットで訓練用ISである”ラファール・リヴァイブ”を展開していた。本日の授業である”模擬戦闘”のためである。

真耶

今日は、専用機持ちである織斑君との模擬戦です。

先輩はまだ生徒には伝えてはいないようですけど……肝心なところはあまり話さないんですね。先輩って……

世界初の男性のIS操縦者。IS初心者にも関わらず、クラス代表決定戦ではセシリアさんに勝利し、さらには生徒会長である更識さんにも……

織斑君がもし”女の子”なら、ISの国家代表にもなれたんじゃないかと思います。だけど、織斑君は”男の子”です。

本来ならISに関わらないはずなのに、関わっています。関わってしまった以上、生徒である彼を一人前にするのが私の仕事ですが……

織斑君を見ると、既に独り立ちをしているように見えます。先輩は、それを少し寂しそうにしているようですね。

織斑君が入学する前も先輩は、弟の事を気にしてよく自慢していました。一年前くらいのある日、無断で学園を休んだとき、心配して行つて見たら酷く気落ちをしていました。

弟さんと喧嘩をしてしまったという理由以外にも何かがあったようですが、それを話すことはありませんでした。

クラス代表決定戦の時に”私達の想像を絶するものを相手にしている”と言っていました。何だったのでしょうか？それは……

でも今は、授業の事に集中しなければなりません。ここでの私は先生なんですから。

シャルル

「まったく、僕の何が分かっているんだよっ！！！！大好きな絵を才能が無いからって否定されて、全てを捨ててきた”事”がそれぐらいの価値だって！！！！」

「優しくそうに見えてもやっぱり男は、粗暴なの？あいつみたいに……………」

「今だって絵を描きたいさ。だけど、僕は皆に”嘘”をついている。だから、もう後戻りなんてできない……………」

「数日前に会ったカオルさんは、僕の絵をもつと見たいと言ってくれたけど……………僕がここ”IS学園”に居る以上は……………」

「気持ちに整理をつけたのかシャルルは、更衣室を出たところで一夏と再び会ったのだった。」

「……………遅かったね。デュノアさん」

「僕を待ってたの？」

「……………一応、此処では二人きりの男同士だ。仲違いしても仕方がない」

ジャージを羽織って一夏はシャルルに言葉を返す。

その言葉にシャルルは、一夏は最初から自分に嫌われる事をしようと思っしてしているわけではないと悟った。

思えば一夏の気を悪くするように言ったのは自分ではないかと……………

「男で花が好きなのは、少し変かもしれない。私の趣味はガーデニングとフラワーアレンジメントだ」

一夏の言葉にシャルルは、少しだけ笑みを浮かべ

「考えてみればあまり変じゃないかもしれないね。僕の趣味は……………空手……………じゃなくて……………絵を描くことかな」

「絵を？デユノアさんが……………」

一夏はシャルルの”絵を描く”と言うところで、知り合いの画家の姿が浮かんだ。

「変というわけではない。私の知り合いに”画家”が一人居て、彼女の事を思い出したんだ」

黄金騎士が唯一愛情を向ける存在である”カオル”。彼女は、画家

として着実にその道を歩いている。

「そうなんだ。その人の名前は、なんていうの？」

「観月 カオルさん。私を戸惑わせる数少ない人だよ」

一夏は少しだけ苦笑しながらカオルとのやり取りを思い出した。

” ねえねえ、一夏君。モデルになってくれない？”

” やっぱり一夏君って綺麗だよ。髪とかどういう手入れしてるの？”

” 偶には、私からの差し入れだよ”

手料理をご馳走になったことがあるが、あの後気がついたらゴンザさんに介抱されてた。微妙な顔をした鋼牙さんが印象的だった。

「カオルさん？カオルさんと織斑君って、知り合いなのっ！?!」

「ん？カオルさんとデュノアさんは、顔見知りなの？」

「うん。ここに来る前、” 個展” に寄ったときに知り合ったんだ」

意外と世の中は狭いものである。

「そういえば、個展にはまだ顔を出していなかったから、近々行って来ようかな」

一夏は次の休日にカオルの” 個展” に足を運ぶことを決めたのだっ

た。

「その時は、僕も行っていいかな？それと僕の話はシャルルで良
いよ、織斑君」

「構わない。私のことも一夏でいい」

「うん、よろしく、一夏。それとごめんね。一夏の好きなことを悪
く言って」

「いい、気にしていない。既に時間が押している行くぞ、シャルル」
そういつて一夏はシャルルに背を向けアリーナへと向かう。シャル
ルもまた一夏に続くのだった。

アリーナに着いた一夏とシャルルは、四組の簪と一組の簪、鈴、セ
シリア、本音達と合流し教師達の到着を待っていた。

しばらくして到着した教師は千冬のみであった。補佐である真耶の
姿が見えない。

「本日から格闘および射撃の実戦訓練を行う」

「……はい！」「……」

千冬の声に生徒達がハッキリと応える。IS操縦者の憧れである”ブリュンヒルデ”の言葉だ。気合がはいる。

簪、篝、セシリア、本音達もまた同じである。一方で鈴は、

（実戦訓練っていうけど、実際のところはIS戦の”スポーツ”でしょ。この子たちって、その辺のところは分かっているのかしら？）

鈴は、魔戒法師であるが故にこの場に居るものたちと違い、生きるか死ぬかの実戦を経験している。

魔戒法師の烈花より自分達が扱う力の恐ろしさを最初に説かれた。使い方を誤れば魔界の力は人に害をなす恐ろしい力であることを……決して人を傷つけるために使ってはならないことを……

ISも競技大会という形で落ち着いているが、国家の”力”を象徴する兵器だ。間違いなく人に害をなすだけの”力”を持っている。

それを自覚せず、自身の優位性だけを主張するために用いたらと思うと背筋が寒くなる。

ISは絶対シールドがあるので、操縦者の安全は保障される。公平なルールに則った”クリーンな戦争”というが、実際はもっとドロドロしていると思う。

仮に師の烈花がISを操縦する機会を得ても積極的には使わないだ

ろうと鈴は思う。彼女なら、ガチでISと戦えると………と思う。

(ていうか、千冬さんと烈花さんどっちが強いのかしら？やっぱり烈花さんかな)

等と考え事をしていたら……

「であるからにして…おい、鳳っ!!!聞いているのかっ!!!?!

千冬が講義をしている中、自分の考えに没頭している鈴に対して彼女は出席簿でおもいきり叩くが…

「ん？あ、千冬さん。すいません、ちょっと考え事をしていました」

何事も無いように鈴は自身の非礼を詫びた。まるでダメージを受けていない。

「そうか、ちゃんと授業には集中しろ。次からはこうはいかんぞ）……おかしいな、いつもよりキツク叩いているはずなんだが……）」

とりあえず近くであくびをかいている女生徒が居たので、叩いてみた。頭を抑えて唸っている。

実を言えば、鈴の師である烈花の拳骨の方がまだ痛いのだ。そんな鈴を信じられないモノを見たかのように篤は目を見開いていた。

「早速だが、模擬戦を行う。織斑、前に出る」

一夏が名指しをされて前に出る。

「はい。シャルル、私の上着を預かっててくれ」

一夏は羽織っていたジャージをシャルルに手渡す。手渡されたシャルルは一夏のスタイルを見て……

「な、なんなの？そのスタイル……」

完璧なラインを持ったスタイルにシャルルは唖然としてしまった。シャルル以外にも一組、四組の女子も一夏のスタイルに対して

（（（（（女の敵め）））））

と共通の意見を持っていた。姉である千冬は

「織斑。私からもう少しだけ離れろ」

自身もスタイルの良さには自身があるのだが、相手が相手なだけに比較をされたくは無いのだ。特に気になっているウエストの部分を見られたくないという”女心”故だ。

「対戦相手は誰ですか？」

千冬の事情など意に介さず一夏は、対戦相手について質問をする。

「ああ、もうすぐ此処に来る」

キイイイインツ！！！

空気を切り裂く音がアリーナ上空から聞こえてくる。

「ああ~~~~~っ、どいてくださあ~~~~~いッ！！！！！！」

声のほうを向くと”ラファール・リヴァイブ”を纏った真耶の姿があった。

勢いよく来ているのは良いがアレでは、安全にとまることは難しいだろうと思い、一夏は”蒼牙”を展開させる。

蒼牙を展開したと同時に上空から落下してきた”打鉄”の衝撃により砂埃が舞う。

衝撃により何人かの生徒が尻餅を付き、転んだりもしたが怪我人は居なかった。

「山田君、飛び出したのは良いが、後の事をしっかり考えてくれ」
埃を払いながら千冬は真耶に近づく。

「は、はい。すみません、今日の事を思うと、気持ちだけが先走りすぎちゃって……」

「まあいい。それだから他の生徒達に舐められるんだ」

二人のやり取りに他の生徒達は”山田先生なら仕方ないや”と思っていた。

「さて、今から織斑と山田先生には模擬戦を行ってもらおう。山田先生はこんな感じだが元代表候補生だから、強いぞ」

「む、昔のことですよ。候補生止まりでしたし……………」

真耶

私は、目標であった先輩 織斑先輩に追いつきたくて必死に必死に頑張ったけれど代表候補生どまりでした。

この努力が無駄ではなかったとは思っていない。

あの頃があるから、今IS学園で教師をやっているし、何より私の培ってきたことを教え子に伝えることが楽しい。

目の前には蒼い狼を模したバイザーを付けた織斑君が居る。

織斑君はISに触れて一年も経ってはいないけど、何よりセンスがある。

生まれつきのものもあると思いますが、それ以上に努力をしてきた

と思います。

ISの試験会場で訓練機を動かしたときに、試験管を秒殺した映像を見たときには本当に驚きました。

先輩ですら織斑君の実力は認めていて

” 剣道の試合なら、私が勝てるが……もし、ルールなしの試合、戦闘ならば私でも敗北してしまうかもしれん”

と以前に洩らしていました。

だからこそ、油断してはいけません。全力でぶつからなければ……

これが教師としての私です。

鈴

先生の雰囲気が変わったわ。臨戦態勢に入ったみたいね。

普段の穏やかな先生とは違うわね。他の生徒達に舐められているけど、本当はかなり強いよね。

篠乃之さんとオルコットさんは驚いているみたいだけれど、先生の
実力を見極められないようならまだまだね。

かというアタシもまだただだけれど………

一夏、魔戒騎士として、先生に負けちゃだめよ。

一夏に笑みを向ける鈴であったが、その様子を箒は………

箒

驚いた、あの山田先生があんな風になれるなんて………

それに元代表候補生とは………てつきり、普通の教師かと思っていた
んだが………

凰の方は山田先生の”実力”を察していたようだ。

凰の実力は、少なくとも今の”私”よりも強いというのか？

一夏

「おいおい、山田先生も随分と張り切っているな」

ヴリルが私に話しかける。分かっている山田先生が強いという事ぐらい……

私自身、ISでの試合は本心で言うとあまり乗り気ではないが、
“零さん”の影響を受けてか少しばかり好戦的になっている。

雪片を展開させて私は、その切っ先を山田先生に向ける。

対する先生もショットガンを構えている。

それぞれが輪瀬陰体勢に入ったことを確認して、姉さんが試合開始の合図を告げる。

「では、はじめー!!」

私の戦闘スタイルは、接近戦を主体としている故に真っ先に相手へ近づく。

行動を読んでいるのか、山田先生はショットガンの照準を私に狙いを定め、放つ。

ここでなら横に回避するところだが、私は雪片を横一線に払いショットガンの弾を切り裂いて、山田先生目掛けて”拳”を振るう。

放たれた拳はシールドにより阻まれ僅かだが、手が少しだけしびれた。

その隙を狙い、真耶は二丁の拳銃を呼び出し引き金を引く。

狙いは正確で蒼牙のシールドダメージを削る。背中の六枚の羽を展開させて一夏は”瞬時加速”を行って真耶のほぼ真横に現れ二丁の拳銃を切り裂く。

「っ！?!さすがですねっ!?!織斑君。まだまだですよ!?!」

切り裂かれた拳銃を捨てショットガンを展開させて広範囲の弾幕で一夏を攻撃するのだが、それを読んでいるのか姿勢を低くして弾幕を回避し、雪片で斬り付ける。

切りつけ相手にダメージを与えるがカウンター越しにシールドエネルギーを削られてしまう。

……私もまだまだだな。山田先生はハッキリ言って強い。ISの操縦なら私よりも遥かに慣れている。

僅かだが私の反応が悪い。理由は言うまでも無く”蒼牙”にまだまだ慣れていないところがあるからだ。

でも、ここで負けるわけにもいかない。私にも意地がある”魔戒騎士”としての……

だから、失礼ですがあの技を使わせてもらいますよ”零さん”

雪片を一旦解除して、”弓”を呼び出す。これに山田先生は長距離用のライフルを構える。私が遠距離での戦いに切り替えると踏んだのだろう。

実を言えば、この”弓”は私の注文でかなり強度を強くしている。それこそ”盾”に使えるぐらいに……

私はこの”弓”を引くために距離をとる事もなく、再び山田先生に向かっていった。これには面を喰らったのか先生も驚いている。

弓を大きく掲げ、弧を描くように振りかざして投げた。

真耶

弓からの正確無比な攻撃は分かっていますが、この近い距離に……

えっ？それって、弓じゃないんですか？なんで”ブーメラン”みたいに飛ばしてくるんですか？

ISの力で飛ばされた”弓”？の威力は遠心力を伴ってか凄まじく受け止めれば間違いなく大きなダメージを被ります。

回避をしようとした時、間近に蒼い狼の貌が近づいていました……

雪片で斬り付けようとした時、

「そこまでだっ！……！」

ここで千冬の試合終了の合図に一夏と真耶の二人が動きを止める。

真耶の首元に刀が当てられ、一夏の正面にはライフルの銃口が向けられていた。

「凄いですね、織斑君」

「いえ、私なんてまだまだですよ。山田先生」

笑顔で話しかける真耶に対して一夏も少しだけ笑みを浮かべた。

「諸君も分かってくれたと思うが山田先生は強い。お前達よりもな……これからは教員を敬うように」

千冬は真耶の強さを認識させるためにこのような模擬戦を行ったよ
うだ。

生徒達は一夏はもちろんのこと真耶に対しても尊敬の視線を向けて
いた……

その光景に箒は

何なんだあの一夏の強さは……

セシリア、更識楯無、さらには山田先生ともあそこまで戦うなんて
……

ISの性能だけではなく、一夏自身が強いことも分かる。だけどあ

の強さは”異常”だ。

この間の剣を踏み台にしたり、弓をブーメランのように使うなんて
無茶苦茶にも程がある……………

いつかは、一夏を支えられるようになりたいと願っているが……………
のままでは、一夏を支えられるようにはなれない……………

第拾巻話「シャルル デュノア」（後書き）

昨年には投下する予定でしたが、リクエストは近々出したいと思いません。

リクエストに参加していただきました皆さん、ありがとうございました！！！！

それではこの辺で失礼します。では！！！！

次回予告は、リクエストと本編の二話分をいれますよ！！！！

織斑千冬と織斑一夏は、たった二人の家族。お互いがかけがえのない存在だ。

家族である一夏は、夜の度に”魔戒騎士”として”ホラー”と戦う。それは姉にとって家族として一夏を守ってきた彼女としてはとてもじゃないが許容ができないこと。

そんな苦悩を感じつつもどうすることもできない彼女は、一夏に何を思うのか。

幕間「一夏」

なあ、姐さん、俺が憎いのはわかるけど、偶には優しくしてほしいぜ。

クラス代表戦が開始される。それぞれの想いを胸にアリーナの空へ少女達は舞う。

ある者は、想いの人に近づくために、またある者は己の”力不足”に嘆く……

少女達の”想い”を”誓い”を踏みにじるかのように”乱入者”が姿を現し、”災厄”と”最悪”が一つになる。

次回！「想い」

そして一夏は……あの黄金騎士達が辿った試練に挑む…乗り越えられるか？それとも……落ちるか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9077w/>

IS x GARO

2012年1月3日02時59分発行